



KYOTO EXPERIMENT 2023

京都国際舞台芸術祭

9.30 Sat. - 10.22 Sun.

“まぜまぜ” “maze maze”

会場◎ロームシアター京都、京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、
THEATRE E9 KYOTO、京都市京セラ美術館 ほか

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭は、
2010年より京都市内で開催している舞台芸術祭です。
国内外の「EXPERIMENT (エクスペリメント) = 実験」
的な舞台芸術を創造・発信し、芸術表現と社会を、新しい
形の対話でつなぐことを目指しています。演劇、ダンス、
音楽、美術、デザインなどジャンルを横断した実験的
表現が集まり、そこから生まれる創造、体験、思考を通じ
て、新たな可能性をひらいていきます。

このマガジンについて

KYOTO EXPERIMENTのプログラム紹介をはじめ、
フェスティバルのスケジュール、チケットの買い方までの
あらゆる情報、フェスティバルをより楽しむための記事や
コラムを掲載しています。KYOTO EXPERIMENTへの
来場前後にお楽しみください！



kyoto-ex.jp

Kyoto Experiment: Kyoto International Performing
Arts Festival 2023

Dates: September 30th-October 22nd, 2023
Venues: ROHM Theatre Kyoto, KYOTO ART CENTER,
Kyoto Art Theater Shunjuza, THEATRE E9 KYOTO,
Kyoto City KYOCERA Museum of Art, and other
locations

Kyoto Experiment is a performing arts festival held
in Kyoto since 2010. Dedicated to producing
experimental performing arts—both from Japan and
overseas—the festival aims to bring the arts and
society closer together through new forms of
dialogue. Featuring experimental works that move
freely between genres such as theater, dance, music,
fine art and design, the festival hopes to open up new
possibilities through the creations, experiences, and
ideas that emerge from such a diverse combination.

This magazine includes information on the whole
festival program, schedule and how to buy tickets as
well as various articles that relate to the key concept
of the festival. We hope you enjoy reading it before
or after visiting the festival!





KYOTO EXPERIMENT

ごあいさつ

芸術表現の最先端を走り続ける「KYOTO EXPERIMENT」の開催を、心からお祝い申し上げます。

14回目を迎える今年のキーワードは「まぜまぜ」。多様性、重層性に富んだ文化が息づく京都を舞台に、新進気鋭の表現者の方々が紡ぎ出す壮大な実験(EXPERIMENT)は、言葉や文化の違いを超えて、私たちの心を大いに揺さぶることでしょう。

御来場のみなさまには、今ここでしか出会えない先鋭的な作品と新たな交流を、ぜひお楽しみください。表現者、鑑賞者の垣根を超えたこの芸術祭での豊かな実りを心から願っています。

本年3月に機能強化した文化庁が移転し、京都は名実ともに「文化首都」となりました。文化芸術がまちの隅々まで息づくここ京都から、文化の力で暮らしを豊かにし、日本中を元気にしていく決意です。

結びに、開催に御尽力いただいた天野文雄委員長をはじめとする実行委員会の方々、および関係者のみなさまに厚く御礼申し上げ、挨拶に代えさせていただきます。

京都市長 門川大作

芸術は誰が支えるのか

この数か月ほどの短いあいだに、芸術支援についての注目すべき2つの提言が公にされた。いずれも京都からの発信だが、ひとつは、本芸術祭の前プログラムディレクターだった橋本裕介氏の編著になる『芸術を誰が支えるのか—アメリカ文化政策の生態系』(発行:京都芸術大学 舞台芸術研究センター)であり、もうひとつは、「新しい文化政策プロジェクト」(代表:佐野真由子氏)が発行した13頁の小冊子『社会の分子ではなく、分母としての文化政策』である。前者は、12人のアメリカの芸術支援関係者へのインタビューを中心とした360頁の証言集、後者は文字通りの小冊子だが、両者の基本理念は、「特定のファンから社会一般へ」「分子から分母へ」であって、期せずして理念が共通しているのは、現在の芸術がそういう転回点にあることを教えてくれる。

本芸術祭はこの二編が対象としている芸術団体で、立場としては対極にあるが、この二編の基本理念は今後のわれわれにとっても肝に銘ずべきものだろう。橋本氏の言葉を借りるなら、「大小、様々な芸術団体が、資金調達のプロセスにおいて、それぞれの規模とミッションに見合った工夫を凝らして、「芸術の価値」を他者に向かって説得する努力を積み重ねる」、ということでもあろう。今回のキーワードは「まぜまぜ」だが、これには「芸術の価値」を「分母」としての「社会一般」に説いてゆくことも含まれているのである。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 天野文雄

Greetings

I am delighted to welcome the return of Kyoto Experiment, a festival at the cutting edge of the arts.

Now marking its fourteenth edition, the core concept for this year's festival is *maze maze*, literally meaning "mix mix." This ambitious experiment carried out by exciting and dynamic artists here in Kyoto, a city blessed with a highly diverse and multilayered culture, will overcome linguistic or cultural differences to greatly move us all.

Visitors, please enjoy this truly unique array of radical works and new exchange. I hope for the great success of this festival that transcends the barriers that conventionally separate artists and audiences.

In March, as part of its efforts to strengthen how it functions, the Agency for Cultural Affairs relocated to Kyoto, making our city a capital of culture both in name and reality. We are determined to enrich people's lives and rejuvenate the whole country through the power of culture emanating from Kyoto, where culture and art permeate each and every corner of the city.

In closing, I would like to offer my thanks to Fumio Amano and the other members of the executive committee as well as everyone else involved in the festival for all their tireless efforts.

Daisaku Kadokawa
Mayor of Kyoto

Who Supports the Arts?

Two noteworthy interventions on support for the arts have appeared within the space of just a few months. Both originated from Kyoto: one was *Supporting the Arts: The Ecology of American Cultural Policies*, edited by Yusuke Hashimoto, the previous program director of this festival, and published by Kyoto Performing Arts Center; the other was *Cultural Policy as Denominator, Not Numerator*, a thirteen-page booklet published by Mayuko Sano's New Cultural Policy Project. The former was a 360-page collection of testimonies, primarily interviews with twelve American arts funding professionals, while the latter is just a short booklet, but the guiding principle behind the two publications is a strive to shift from gaining support not only from established fans of the arts but also from the general public, to shift from the numerator (part) to the denominator (whole), and both coincidentally assert that the arts are now at this turning point.

Our festival is an arts organization like the ones that are the subject of these two publications, and though we are on the other side of the table, so to speak, their basic principles are things that we should surely keep firmly in mind as we move forward. As Hashimoto writes: "During the fundraising process, arts organizations both large and small employ inventive means corresponding to their size and mission, and make efforts to convince others of the value of the arts." This edition's core concept is the Japanese term *maze maze*, literally meaning "mix mix," and something that encompasses the endeavor to advocate the value of the arts to the public at large as the denominator.

Fumio Amano
Chair, Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee

もくじ

4	ごあいさつ
8	ディレクターズ・メッセージ
12	3つのプログラム
14	KYOTO EXPERIMENT 2023の楽しみ方
21	Kansai Studies
22	鋭意進行中! 5つのリサーチプロジェクト
25	Super Knowledge for the Future [SKF]
	アーティストトーク、ワークショップ、 まち歩きなどの交流プログラム
35	Shows
36	イ・ラン
38	ウィチャヤ・アートマート / For What Theatre
40	チェルフィッチュ
42	アリス・リボル / Cia. REC
44	バック・トゥ・バック・シアター
46	山内祥太&マキ・ウエダ
48	中間アヤカ
50	ルース・チャイルズ&ルシダ・チャイルズ
52	ダイナ・ミシェル
54	マリアーノ・ペンソッティ / Grupo Marea
56	サムソン・ヤン

58	コラム：“まぜまぜ”を思考してみる。
60	中西裕二「食文化とまぜまぜ」
62	温 又柔 「美しく、あいまいで、雑多な日本の『私』たち」
64	今福龍太 「クレオールから群島へ——混ざりあう舌の饗宴」
68	批評プロジェクト2022 選出作品
77	Other Programs
78	フリンジ「More Experiments」/ブックフェア
79	関連プログラム
80	提携プログラム
86	開催クレジット
	インフォメーション
92	チケット情報
96	パートナーホテル
98	会場アクセス
100	カレンダー

Contents

5	Greetings
10	A Message from the Directors
12	Program Outline
14	Tips & Hacks for KYOTO EXPERIMENT 2023
21	Kansai Studies
22	Five Research Projects Underway!
25	Super Knowledge for the Future [SKF]
	An exchange program consisting of artist talks, workshops, a walking tour, and study group.
35	Shows
36	Lang Lee
38	Wichaya Artamat / For What Theatre
40	chelfitsch
42	Alice Ripoll / Cia. REC
44	Back to Back Theatre
46	Shota Yamauchi & Maki Ueda
48	Ayaka Nakama
50	Ruth Childs & Lucinda Childs
52	Dana Michel
54	Mariano Pensotti / Grupo Marea
56	Samson Young

58	Articles: Thinking about maze maze
60	Food Culture and Mixing Author: Yuji Nakanishi
62	Japan, the Beautiful, the Ambiguous, and the Motley “Us” Author: Wen Yuju
64	From Creoles to the Archipelago: A Feast of Mixed Tongues Author: Ryuta Imafuku
68	Performing Arts Criticism Project 2022: Selected Review
77	Other Programs
78	Fringe: More Experiments / Book Fair
79	Related Programs
80	Partner Programs
86	Credits
	Other Information
92	Ticket Information
96	Partner Hotels
98	Access
100	Calendar



ディレクターズ・メッセージ

KYOTO EXPERIMENT 2023は、「まぜまぜ」をキーワードとして開催する。キーワードは、この言葉を鍵としてさまざまな問いへの扉を開いていけたら、というイメージで設定している。したがって、フェスティバルで紹介する全ての作品がこの言葉のもとにおさまるようなテーマではなく、プログラムへの多様な視点を獲得するための言葉と考えている。

「まぜまぜ」に行き着くまでの大きなヒントは、今年のShowsプログラムのうちいくつかに見出せる、「言語(身体言語を含む)」や「継承」、「アイデンティティ」といったアイデアである。これらの概念は、単一的な真正性が問えるものではなく、さまざまなものが混ざり合いながら存在しているのではないかと、ということディレクターチームで話し合った。翻って、いまの国内外の状況では、さまざまな分断が進み、白か黒か、という二項対立的な思考が顕著になっているようにも感じる。「まぜまぜ」は、そうした状況において、可変性や流動性、複数性を思考の軸のひとつとすることはできないかと考え、設定したキーワードである。

アイデンティティや帰属について考えるとき、国籍・民族・言語がその出発点になることが多いのではないだろうか。「まぜまぜ」というキーワードを通してこれらの出発点を思考することで、現代社会をオルタナティブなやり方で捉える余地が生まれるかもしれない。

プログラムにおいては、第二言語としての言語、ダンスや身振りなどの身体言語、そしてそれらがどのように受け継がれていくのか、また、文化の純粋性という概念や、文化が伝達され、循環していく中でどのように変化していくのか、といった問いやトピックを扱う作品群を紹介する。より広い視点においては、文化的・社会的アイデンティティがどのように構築され・あるいは解体されるか、そこでどのような権力構造やヒエラルキーが作用しているかを考察できるかもしれない。

今回は、プログラムの構成や各作品について解説することよりも、私たち3人が「まぜまぜ」から考えたことをディレクターズ・メッセージとしたい。これをきっかけに、このフェスティバルに参加するみなさんも考えをまぜまぜしながら、Kansai Studies、Shows、Super Knowledge for the Future [SKF] 8 からなるプログラムを楽しんでいただければ幸いである。

本物とスタンダードのゆくえ 川崎陽子

自分にとって一番身近なまぜまぜとして、関西弁のことを書いてみたい。

札幌で過ごした子どものころ、私は家の外では標準語に近い話し方(北海道弁もあるのだが、女子の間では標準語っぽい話し方が多かった)、家の中では関西弁、という生活を送っていた。うちの家族はもともと京都ベースだったので、関西弁が家族間の共通言語だったのである。ちなみに何度か引っ越しをしていて、私は札幌で幼少期から中学までを過ごしたが、生まれたのは三重である。だから、いまでも出身を聞かれるとちょっと説明が必要になる。だいたい「出身」って、どんな地域的・文化的アイデンティティを持っているのか確認するみたいなきこに感じてしまって、ては自分がそういう点ではどこ出身と言えれば良いのかと思うと、よく分からない。

それはさておき、自分では家の外と中の話し方を完璧に使い分けていると思っていたのだが、外と中が同じで良くなった京都で通った高校で、同級生から「あなたの関西弁はちょっと変わっている」と言われたのである。そこで初めて、どうやら自分の関西弁は自負していたより本物ではなくなっているらしい、と気づいた。三重でも地元特有のアクセントや言葉があるし、北海道では家の外の社会的な生活は標準語だったのだから、当然といえば当然。それからは、努めて同級生のしゃべり方を真似したものの、おそらく私の関西弁はずっと混ざったままなのだと思う。もっと後になって、そもそも「標準」語って何だろうとか、それが日本の近代化の過程で生み出された概念であったことなどを知ったけれど、キープできる「本物らしさ」なんてあるはずもなく、あらかじめ設定されている「スタンダード」だっけないのだから、考えることは初めは少し怖くもあり、今では何か自由さを与えてくれるような気もする。

それはウイルスのごとく 塚原悠也

改めて、パンデミックが広く地球上を覆いつくして人々の生活様式に瞬時に影響を与えたことは、いろいろな意味で示唆的だった。ウイルスは物理的に媒介することが前提なのにあつという間に地球上に広がり、アマゾンの奥地にまで届いたというニュースすら見かけ、誰かが咳をするとそこまで届くのかと驚いた。逆に言うと、いろいろな価値観や情報も今やウイルスより早くこの惑星を覆いつくすはずなんだけど。株式情報を隣町へ伝書鳩で拡散していたという時代すらあったのに。「本当に必要か? この情報」って思うものも含めて、日々そういった情報を目や耳に入れ続ける。こういった情報のすべてが個々人のあり方、アイデンティティを形成し、何をどう感じ、考え、発信するのかなどの方法を規定? ガイド? する。

自分が中学生のころに「キャラ」という言葉が出始めた。周りの子どもたちが、集団の中での自分の立ち位置を決定するためアイデンティティを固定化しようとする試みだったと思うけど、基本的には限られた、アニメなどを参考に知った素材を取捨選択するようなものだったと思う。それが服装やししゃべり方に影響を与えて。でも、本来はもっと選択権のないような身体的な影響のほうがより深く自身に食い込んでいくのではないかと。生まれた土地のことや、毎日会う友人のしゃべり方(小学生のころ「森君語」という特殊な話し方が教室中に広がって誰もやめられなくなったことがある)、親が作る料理など、思いもよらず目撃してしまった物とか、それらの影響がどンドン混じっていく日々。そもそも自分で規定できるようなものじゃないのかも? と思ったり。もしくはそれが「文化」、「まぜまぜ」られて行く日々、か。

なんかシュールだよな? ジュリエット・礼子・ナツプ

日本語のカタカナは外来語に使われる。例えば英語の「Banana」とカタカナの「バナナ」は同じ黄色い果物を表すのに使われるように、名詞は多くの場合、そのままの意味を保つ。しかし、より概念的なものを表現する言葉がカタカナになると、その言葉に含まれる意味が変化すると感じる人が多い。これらの外来語は、カタカナを通して日本語の一部となり、それによって異なる身体や文化を通り抜ける。その過程で、言葉は変容し、あるものは言葉から消え去り、別のものが言葉にくっつくようになる。

私の日本人の友人は、「シュール」という言葉をカジュアルな感じでよく使っていた。私はこの言葉を便利な新しい日本語だと思い、半年ほどかけて文脈からその意味を学び、自分でも使い始めた。ある日、友人に「しゅうるってどう書くの? 」と尋ねると、驚いたことに「カタカナでシュール」と返ってきた。英語以外の言語からの借用語かもしれないと思い、すぐにググってみた。それが英語の「surreal」から来ていると知ってショックを受けた。「シュール」が「surreal」であることをずっと理解していなかったことを恥ずかしく思うと同時に、それが「surreal」であることを知らずに、「surreal」という概念を学び、理解し、体験してきたことに、ある種の喜びを感じた。

しかし、この経験をよく考えてみると、日本語の「シュール」には英語とは違うニュアンスがあると感じた。「シュール」は、(良い意味で)変とか奇妙という意味で使われることがあり、英語の「シュール」よりも広義の意味を持っているのかもしれない。カタカナではこのようなことがよく起こり、英語圏出身の日本語話者は混乱することが多い。カタカナの借用語は他の単語に変化し、いつの間にか独自の生命を持ち、英語の正確な意味を保つことができない。私は最近、言語、特に英語が異文化によって侵食されたり変容したりする柔軟性を見出し、そしてなぜそのようなことが起こるのかを考えることを楽しむようになった。

KEXサポーター制度について

最後に、KYOTO EXPERIMENTは2023年度より、寄付支援制度として「KEXサポーター」を始動していることをお伝えしたい。このフェスティバルにおける経済的な状況は大きな変化を迎えており、2022年はクラウドファンディングを実施した。今年からは、より継続的に支えていただける方法として、サポーター制度を新設した。この制度を通して、KYOTO EXPERIMENTという実験的な表現のプラットフォームを今後お支えいただければ幸いである。

KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター
川崎陽子 塚原悠也 ジュリエット・礼子・ナツプ

A Message from the Directors

Kyoto Experiment 2023 explores ideas related to *maze maze*, a Japanese term pronounced “ma-ze ma-ze” and literally meaning “mix mix.” *Maze maze* forms the key to open doors behind which we find various kinds of questions. It is not a thematic label intended to cover everything in the festival, but rather something that we hope will prove useful for obtaining a range of perspectives on the lineup.

Major prompts that led us to this framing of *maze maze* were the ideas about language (including body language), inheritance, and identity that we can see in several of the works included in the Shows program. We discussed how these concepts don't pose singular questions about authenticity, but rather intermix different things. Conversely, the situation that we find ourselves in today at home and abroad seems increasingly divided in various ways and dominated by stark dichotomies. *Maze maze* is a framing for the festival that we hope can form a pivot in such circumstances for reflecting on mutability, fluidity, and plurality.

When thinking about identity and attributes, we tend to start with nationality, ethnicity, and language. Reflecting on those points of departure in terms of *maze maze* may allow us to interpret contemporary society in alternative ways.

The festival programs feature a lineup of works dealing with questions and subjects related to language as a second language, forms of body language like dance and gesture, and how these are passed down to others, and also concepts of cultural purity and how culture changes as it transmits and circulates. More broadly, perhaps we consider how cultural and social identities are constructed or deconstructed, and then the ways in which power structures and hierarchies impinge on this.

Rather than giving a commentary on the organization of the program or each of the works in the lineup, we would like to treat the rest of this text as a set of notes about the thoughts that *maze maze* has inspired for the three of us. We hope this helps audiences enjoy the festival's programs (Kansai Studies, Shows, and Super Knowledge for the Future) while intermixing them with their own ideas.

Whither Authenticity and Standards? Yoko Kawasaki

I want to write about Kansai dialect, which is the most familiar example of *maze maze* for me.

During my childhood in Sapporo, I would use something close to standard Japanese outside the home (Sapporo has its own dialect but girls tend to speak in what is effectively standard Japanese) and Kansai dialect at home. My family was originally from Kyoto and Kansai dialect was our lingua franca. We moved many times and though I lived in Sapporo from infancy until junior high, I was actually born in Mie. As a result, answering the question of where I'm from requires a bit of clarification. Being asked about my hometown often feels like my interlocutor is checking what kind of regional or cultural identity I have, so I'm unsure which place I should say is my hometown in that sense.

That aside, I thought I'd maintained a perfect division between how I spoke in and outside the home, but when I went to high school in Kyoto, where it felt fine to use the same vernacular in and out of the home, a classmate told me that my Kansai dialect was a bit strange. I then realized for the first time that my Kansai dialect was no longer as “authentic” as I had flattered myself. But this is hardly surprising considering that Mie has its own regional accent and vocabulary, and that standard Japanese was my language of choice for social interactions outside the home in Sapporo. Though I subsequently strove to mimic the way my classmates spoke, my Kansai dialect probably remained something of a hodgepodge. Much later, I found myself wondering just what is “standard” Japanese in the first place and learned it's a concept that emerged during the process of modernization in Japan, and though it was initially a little daunting to understand that nothing stays “authentic,” that there's no predefined “standard,” it now seems to have given me a degree of freedom.

Like a Virus! Yuya Tsukahara

The pandemic's rampage across the planet and instant impact on our lifestyles was indicative in various ways. Though premised on physical interaction, the virus spread rapidly around the world, to such an extent that I even saw on the news that it reached the depths of the Amazon, astounding me that someone coughing can extend that far. Put the other way around, all manner of values and information zip around our planet today even faster than a virus. Even though there was once a time when information on stocks and shares spread to neighboring towns via carrier pigeon. Day by day, we see and hear such information, including even things we doubt we actually need. All of that information shapes who we are as individuals and our identity, determining (or guiding) what and how we feel, think, and disseminate.

Around the time I was in junior high, people starting using the word *kyra*. I think it was an attempt by the kids around me to consolidate their identity and so establish their own status within a group; something fundamentally limited, akin to filtering the stuff they picked up from anime and so on. And this then influenced how people dressed and spoke. But wouldn't a more physical kind of influence, something you can't choose, ordinarily affect you more deeply? The place where you are born. The way you speak to the friends you meet on a daily basis (when I was at elementary school, for instance, a special way of talking became popular and no one was able to stop using it). The food your parents cook for you. The things you just happen to see. The impact these have on you are all added to the mix. Maybe these are ultimately things we can't control ourselves. Or perhaps that's “culture,” or day after day of *maze maze*.

Isn't That Kind of Surreal? Juliet Reiko Knapp

In Japanese, katakana is used for foreign loanwords. For example, banana is バナナ (ba-na-na) and, of course, denotes the same yellow fruit as it does in English. Nouns often retain their exact meaning. However, when words that are used to describe something more conceptual get translated into katakana, I often feel that the meaning or connotations attached to that word changes. These outside words become part of the Japanese language through katakana and, by doing so, pass through different bodies and cultures. During this process, they are transformed and while some things fall away from the words, other things become attached.

I had a Japanese friend who would often use the word *shu-ru* in a kind of casual way to describe things, situations, clothes, or music. I considered this a useful new Japanese word and learned its meaning, perhaps over six months or so, from the context in which it was used. I also started to use it myself. One day I asked my friend how *shu-ru* was written in Japanese and to my surprise they responded that it was written in katakana (シュール). I wondered what the original foreign loanword was, thinking it might come from a language other than English, and immediately googled it. I was shocked to learn it came from the English “surreal.” At first, I felt embarrassed that I hadn't understood that *shu-ru* meant “surreal” all this time, but simultaneously felt delighted in some way that I had been able to learn, understand, and then experience the concept of surreal without knowing that it was, in fact, “surreal.”

After thinking about this experience more carefully, however, I came to believe that there was a nuance to the Japanese *shu-ru* that seemed different than the English, and yet I still find it hard to describe what this is in words. If I was to try, I think the Japanese katakana *shu-ru* can be used in place of “unreal” or “weird” (in a good way), and in this sense has perhaps taken on a broader, more undefinable meaning than its English counterpart. I think this often happens with katakana words, much to the frustration of many Anglophone speakers of Japanese. Loanwords in katakana morph into other words, somehow taking on a life of their own and unable to retain the exact English meaning away from home. I have recently started to enjoy looking for and thinking about the malleability of language, the way in which languages, particularly English, are transformed by different cultures, and then considering how and why that happens in that particular way.

KEX Supporters

In closing, we would like to mention the KEX Supporters donations scheme, which was launched in 2023. The economic circumstances of the festival have reached a critical stage, prompting us to hold a crowdfunding campaign in 2022. This year, we established a new donor system as a more sustainable way for people to support the festival. If you are able, we hope you consider using the system to support us so that we can continue our efforts as an experimental platform for the arts.

Yoko Kawasaki Yuya Tsukahara Juliet Reiko Knapp
Co-directors, Kyoto Experiment

KYOTO EXPERIMENT を構成する3つのプログラム consists of three programs

本フェスティバルの特徴は、3つの異なるアプローチでプログラムが構成されていること。アーティストの視点で関西地域をリサーチし、未来の創作のヒントを探る「Kansai Studies」、世界各地の実験的な舞台作品を上演する「Shows」、作品や現代社会に関連するトークやワークショップが体験できる「SKF」があり、どれから参加しても、どれかひとつの参加でもOK。自由に興味や関心、思考を広げてみてください！

The festival is unique in that it is composed of three programs each with a different approach. "Kansai Studies" researches the Kansai region from an artist's perspective and aims to cultivate a foundation for future creation; "Shows," is a lineup of experimental performing arts from around the world; and "Super Knowledge for the Future [SKF]," is a series of talks and workshops that explore the relationship between experimental performing arts and various different topics beyond the world of art. Feel free to start anywhere and experience any one or several of the programs as you wish!

12

1 カンサイ・スタディーズ Kansai Studies

京都発の国際フェスティバルとして、自分たちが立脚する「地域」について自覚的に捉え、フィールドワークを通して探求するプログラム。アーティストが中心となり、地域住民やプロデューサー、研究者と一緒に、京都や関西の文化を継続的にリサーチしていきます。活動を通じて生まれた思考の軌跡やプロセスは特設ウェブサイトに蓄積され、誰もがアクセスできるオンライン図書館として公開。未来のクリエイターや企画のためのナレッジベースや実験場、アイデアソースとなることを目指します。

As an international festival based in Kyoto, this program focuses on the region upon which the festival stands and explores it through fieldwork. Artists take the lead in the program, researching the Kansai region's culture in team with local residents, producers, and researchers. Thoughts and observations derived from this research are published on the Kansai Studies website and archived in a way that allows viewers to follow their development. This is intended to be an "online library" accessible to all, which may one day serve as a source of knowledge and inspiration, as well as a testing ground, for future creators and projects.

13

2 ショウズ Shows

国内外から先鋭的なアーティストを迎え、いま注目すべき舞台芸術作品を上演するプログラム。京都および関西における舞台芸術の変遷と動向に注目しながら、ダンス、演劇、音楽、美術といったジャンルを越境した実験的作品を紹介します。

This program invites forward-thinking artists from Japan and overseas, staging works of performing arts that we think should be experienced right now. Closely observing the shifts and trends in the performing arts scene in Kyoto and the Kansai region, the program introduces experimental works that transcend the genre boundaries of dance, theater, music, and visual art.

13

3 スーパー・ナレッジ・フォー・ザ・フューチャー Super Knowledge for the Future [SKF]

アーティストは未来を予見する?! とりわけ実験的な舞台芸術作品と社会を対話やワークショップを通してつなぎ、新たな思考や対話、フレッシュな問題提起など、未来への視点を獲得していくプログラム。実験的表現が映し出す社会課題や問題をともに考え、議論し、現代社会に必要な智恵や知識を深めていきます。ここで獲得できるスーパー知識(ナレッジ)は、予測不能な未来にしなやかに立ち向かうための拠り所となるはずです!

Can artists foresee the future? The "SKF" program connects society with experimental performing arts through talks and workshops in an attempt to spark new ideas and dialogues, a fresh awareness of issues, and perspectives on the future. Think, discuss and debate together on various social problems and issues addressed by experimental works. We hope the "Super Knowledge" acquired will equip you to flexibly confront the unpredictable future!

KYOTO EXPERIMENT 2023 の楽しみ方

Tips & Hacks for KYOTO EXPERIMENT 2023



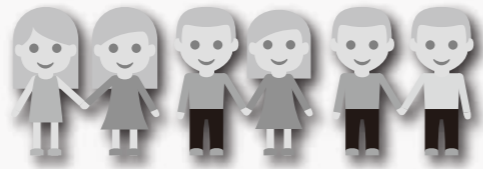
世界各地の話題作を一挙に楽しめる“舞台芸術フェス”こと、KYOTO EXPERIMENT。

はじめて訪れる方にも、常連のみなさんにも存分に満喫いただけるよう、フェスティバルをより楽しむためのヒントや最新ニュースをご紹介します。

Kyoto Experiment is a performing arts festival where you can experience contemporary works from all over the world. Here are some tips (for both first-timers and regulars!) on how to enjoy the festival!

Meeting Point

まずはフェスティバルの総合案内へ



「ミーティングポイント」は、フェスティバルと観客のみなさんとの交流拠点&インフォメーションセンターです。今年「ミーティングポイント 四条烏丸」と「ミーティングポイント ローム・スクエア」の2つの拠点が会期中にオープン。まずはここを訪ねて、情報収集するのがおすすめです。スタッフによるプログラム案内やオリジナルグッズの販売をはじめ、四条烏丸のスペースでは、KYOTO EXPERIMENTの過去作品の映像上映やラジオ配信、チケット販売も。無料のトークイベントも開催予定です。ぜひお立ち寄りください！

☞ ミーティングポイント 四条烏丸

住所 京都市下京区烏丸通四條下る水銀屋町637
第五長谷ビルB1F (地下鉄四条駅 3番出口直結)
開場日時 フェスティバル会期中の木・金・土・日・祝日の
12:00-19:00
※9.30(土)のみ12:00-18:00

☞ ミーティングポイント ローム・スクエア

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13
ロームシアター京都
開場日時 フェスティバル会期中の土・日・祝日の
13:00-18:00

※入場無料。イベントがある日はオープン時間を延長することもあります。

The "Meeting Point" is Kyoto Experiment's exchange hub and information center. This year, we open two locations during the festival's run: "Meeting Point Shijo Karasuma" and "Meeting Point ROHM Square." Visitors can get information and recommendations about the festival program from our staff as well as buy original merchandise, and at the Shijo Karasuma space we screen previously shown works and broadcast radio programs, in addition to selling tickets. We also plan to host several free talk events. Please stop by!

☞ Meeting Point Shijo Karasuma

Address: B1F, 5th Hase Bldg. 637 Suiginya-cho, Shimogyo-ku Kyoto (Directly connected to Shijo Station exit 3, Kyoto City Subway Karasuma Line)
Open: 12:00-19:00 on Thursdays, Fridays, Saturdays, Sundays and public holidays during the festival period
*9.30 (Sat) only 12:00-18:00.

☞ Meeting Point ROHM Square

Address: 13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto
Open: 13:00-18:00 on Saturdays, Sundays and public holidays during the festival period.
Admission Free, Opening hours may be extended on event days.

Festival Share Cafe is Back!

「感想シェアカフェ」が4年ぶりに復活!



作品の上演後に、集まった人たちで自由に感想を話し合うイベントが「感想シェアカフェ」。KYOTO EXPERIMENTの名物でしたが、コロナ禍の中断で、今年なんと4年ぶりの開催となります！同じ作品を鑑賞していても、その体験は人それぞれ違うもの。自分が感じたことを言葉にして語り、作品とともに鑑賞した人の話に耳を傾けることで、新しい気づきを見つけたり、多彩な視点にふれてみてください。お互いの思いや考えを「シェアする(=分かちあう)」ことで、ひとつの鑑賞体験がより豊かに膨らんでいくはず。参加無料。

スケジュール

- 9.30(土) ウィチャヤ・アートマート / For What Theatre (p.38)
- 10.1(日) チェルフィッチュ (p.40)
- 10.7(土) アリス・リボル / Cia. REC (p.42)
- 10.8(日) バック・トゥ・バック・シアター (p.44)
- 10.21(土) デイナ・ミシェル (p.52)
- 10.22(日) マリアーノ・ペンソッティ / Grupo Marea (p.54)

※公演終了後の開催で、約1時間を予定。ウェブサイトのプログラムページから予約受付中ですが、当日の飛び入り参加もOK

Festival Share Cafe is an event where audience members can gather to freely share perspectives after watching a performance. After being suspended due to the pandemic, this year it is back after four years! Even when watching the same performance, everyone has a different experience. Through expressing yourself as well as listening to the stories of other audience members who have experienced the same performance, come into contact with all kinds of perspectives and discover something new. Free to join.

Schedule

- 9.30 (Sat) Wichaya Artamat / For What Theatre (p.38)
- 10.1 (Sun) chelfitsch (p.40)
- 10.7 (Sat) Alice Ripoll / Cia. REC (p.42)
- 10.8 (Sun) Back to Back Theatre (p.44)
- 10.21 (Sat) Dana Michel (p.52)
- 10.22 (Sun) Mariano Pensotti / Grupo Marea (p.54)

This event will be held after the performance and will last approximately one hour. Reservations are now being accepted through the website's program page, but you are welcome to jump in on the day of the event!



Free Programs & Events

無料イベント、割引もあるんです!



ふだん劇場に行かない方にとって、いきなりフェスティバルのチケットを買うのは、ちょっぴりハードルが高いかも!? そんな方はまず、無料で観られる作品、気軽なトークイベントに参加して、フェスティバルの雰囲気を体験してみたいかが? たとえば、サムソン・ヤン(香港)の作品はギャラリーで発表する展示作品で、誰でも無料で鑑賞できます(☞p.56)。また、観客参加型のトークやワークショップを行うプログラム「Super Knowledge for the Future[SKF]」には、無料やワンコインで参加できる企画もたくさん(☞p.25)。

なお、上演プログラム(Shows)では、25歳以下の方は学生と同じ割引料金が適用されます。おトクなセット券もいろいろあります。詳しくはp.94をご覧ください!

If you don't often go to the theater, buying a ticket can sometimes be a bit of a hurdle! Why not get a taste of the festival first at one of the following free exhibitions or talks? Hong Kong artist Samson Young's exhibition is free to visit (☞ p.56) and our "Super Knowledge for the Future [SKF]" program that consists of a variety of talks and workshops, has much on offer for free or just one coin (☞ p.25). Also make sure to check out the discounts on tickets for our Shows program. Those under 25 can get the same discount rate as students and there are also various ticket sets and passes. See p.95 for details.

Hear from the Artists!

アーティストの生の声を聞こう!



エクスペリメント(実験)——と題した芸術祭だけあって、演目のなかには斬新なテーマや驚きの演出、ときには現代社会に対する鋭い示唆も含んだものも。KYOTO EXPERIMENTでは、アーティスト自らが作品について語るさまざまな機会を用意しているので、作品に込めた思いや創作秘話にふれてみてください。

☞ ポスト・パフォーマンス・トーク

作品上演後の舞台上、アーティストを招いてミニトークを実施。p.36-57の作品紹介で「★マーク」がついた公演を探して。

☞ Super Knowledge for the Future [SKF]

今年は4組の海外アーティストが、SKFプログラムにてトークやワークショップを行います。詳細は、p.25-33で確認を。

As expected from an art festival with 'experiment' in its title, some of our performances tackle unconventional themes, are directed in surprising ways, or have unusual and sharp takes on issues related to contemporary society! At the festival there are various opportunities to hear about the work from the artists themselves; listen to the ideas and inspiration for their works as well as the stories behind how they were created.

☞ Post-show talk

After the performance, the artist is invited to give a short-talk on stage. Look for performances marked with a ★ on each of the pages (p.36-57) introducing the works.

☞ Super Knowledge for the Future [SKF]

This year, four international artists from the Shows lineup will hold talks and workshops as part of this program! For details, see p.25-33.

Child Care Services

お子さま連れの方もぜひ。託児サービスあります



劇場は、すべての人にとって開かれた場所。小さなお子さま連れの方にも、安心してゆったり舞台鑑賞をお楽しみいただけるよう、フェスティバルでは託児サービスのある公演回を設けています。ご利用には事前予約が必要ですので、詳細はウェブサイトでご確認ください。



対象公演 p.36-57で♡マークがついた全6公演。ウェブサイトを一覧を掲載しています。

料金 ¥1,500(1公演、お子さま1名あたり。0歳2カ月の乳児からお預かり可能)

締切 各公演の7日前まで(各公演 先着5名まで)

委託先 株式会社スマイルライフ 京都オフィス

A theater is a place open to everyone. For certain performances we offer childcare services so that those with small children can also relax and enjoy the festival. Advance reservations are required so please check the festival website for details.

Applicable Performances: All 6 performances marked with a ♡ on p.36-57. Please see the festival website for a list.

Price: ¥1,500 (per performance, per child. Infants from 0 years and 2 months old can be entrusted)

Deadline for Reservations: 7 days before each performance (up to 5 people per performance)

Childcare Company: Smile Life Co., Ltd. Kyoto Office

Enjoy More Experiments!

注目の舞台&イベントは、他にもたくさん!!



KYOTO EXPERIMENTでにぎわう10月の京都、楽しみはこれだけではありません。同時期にフェスティバルのパートナー団体や、京都などで活躍するアーティストたちが、演劇や現代アート、ダンス、ライブ、朗読、パフォーマンスなど、さまざまな舞台公演を繰り広げます。その数、なんと30以上! フェスティバルと合わせてハシゴを楽しむのもおすすめです。

☞ フリンジ: More Experiments (p.78)

☞ 提携プログラム (p.80)

There are lots of Kyoto Experiment performances and events during October but that's not all there is to enjoy in Kyoto. During the same period, the festival's partner organizations and local artists present a wide range of theater, contemporary art, dance, live music, readings and performances. This year we introduce over 30 performances! Create your own schedule and watch multiple shows in one day.

☞ Fringe: More Experiments (p.78)

☞ Partner Programs (p.80)



カンサイ・スタディーズ

Kansai Studies

特設サイト: kansai-studies.com

フェスティバル会期中に開催されるパブリックイベントの詳細は、
KYOTO EXPERIMENTウェブサイトおよびKansai Studies特設サイトにて後日お知らせします!

A public event is planned for Kansai Studies.
Please see the festival website and the Kansai Studies website!

リサーチメンバー: 今村達紀、谷竜一、野咲タラ、迎英里子、山田淳也

コーディネーター: 山本佳奈子

ウェブサイト制作・ロゴデザイン: 松見拓也

Reserach Members: Tatsunori Imamura, Ryuich Tani,
Tara Nosaki, Eriko Mukai, Junya Yamada

Coordinator: Kanako Yamamoto

Website Direction / Logo Design: Takuya Matsumi

鋭意進行中!

5つのリサーチプロジェクト Five Research Projects Underway!

Kansai Studies は、フェスティバルが根ざす関西圏を対象としたリサーチプログラム。アーティストの視点で地域の文化や風土をフィールドワークし、未来の芸術表現を豊かにする「原石」を掘り起こしていくものだ。2020-2022年度は、リサーチメンバーに建築家ユニットの dot architects、演出家の和田ながらを迎え、生活に身近な「水」「食事」「循環」をテーマに実施。KYOTO EXPERIMENT 2022では、3年間の集大成として演劇作品の上演を行った。

2023年度からは、新メンバーでのプログラムが始動。公募で集まった5名が現在、各自が設定したテーマでリサーチを行っている最中だ。リサーチ中に起こったあらゆる出来事や発見、思考はテキストや映像で記録され、特設ウェブサイトですぐ公開・アーカイブされていく。ここではその一部を抜粋して紹介するが、最新記事はそれぞれのQRコードからアクセスしてほしい。フェスティバル会期中には、リサーチの経過報告を兼ねたパブリックイベントを開催する。続報にご期待を!

Kansai Studies is a research program about the Kansai region, where the festival is located. Participants excavate the "raw gems" that enrich future artistic expression through artist-driven fieldwork about local cultures and environments. The first term (2020-2022) featured architect group dot architects and director Nagara Wada as research members, and focused on the everyday themes of "water," "food," and "circulation." As a culmination of their three years of research, they staged a theater performance at Kyoto Experiment 2022.

2023 marks the beginning of the second term. Selected through an open call, five team members are now doing research along their chosen themes. The various events, discoveries, and ideas that come up during their research are documented as texts and videos, which are continually uploaded and archived on the project website. Here we introduce extracts of these texts, however you can read the articles in full by scanning each of the QR codes. During the festival's run we also host a public event that also serves as a research progress report.

1 「路上の園芸とグラフィティなどについて」

今村達紀

「描かれたものを追って写真を撮って地図にマッピングしていくと、グラフィティによって自分の体が動かされた過程が記録されます。いつかそこにいた人の痕跡で動かされていくのはこのリサーチの楽しさだと思っています」

"Street Gardening and Graffiti" Tatsunori Imamura

"By finding and following graffiti painted and drawn on the street, taking photographs and mapping it, you also record the process by which your body has moved and traveled. The fun part of this research is the feeling of being forced to move according to the traces of the people who were once there."



今村達紀

振付家・ダンサー。愛媛大学理学部生物地球科学科卒業。堆積学専攻。同大卒業後、愛媛大学医学部で病理切片と電子顕微鏡の試料作成に携わる。2008年京都に移住。描く軌跡、音の響き、動きの軌跡にフォーカスしたイベント「echo」を不定期に行っている。2014年4月1日から毎日どこかで呼吸を止めて踊っている。
https://www.youtube.com/channel/UCTM_8yLxIN-9ZT8K7p6pV7w/videos

Tatsunori Imamura

Choreographer and dancer. Imamura graduated from Ehime University, Faculty of Science, Department of Biogeosphere Science, with a major in Sedimentology. After graduating, he was involved in preparing tissue slices and electron microscope samples at the Faculty of Medicine at Ehime University. He moved to Kyoto in 2008. He organizes an event called echo, which focuses on drawing trajectories and experiencing sound reverberations. Since April 1st, 2014, he can be found holding his breath and dancing somewhere every day.
www.youtube.com/channel/UCTM_8yLxIN-9ZT8K7p6pV7w/videos



2 「まだ詩になっていない場所をさがす」

谷 竜一

「関西の近現代詩の歴史とシーンの変遷について調べたいと思います。ただ、これは歴史の調査というよりは、近代から現代において、なにが詩としてうたわれてきたのか＝なにがまだうたわれていないのか、について、なにかしらの発見ができればいいなと思っています」

"Finding Places Which are Not Yet Poems" Ryuich Tani

"I would like to research the history of modern and contemporary poetry in Kansai and the evolution of the scene. However, rather than historical research, I hope to discover something about what has as well as what hasn't been celebrated as poetry in the modern and contemporary periods."



谷 竜一

詩人・演劇作家・芸術労働者。1984年福井県大飯郡高浜町生まれ。高校時代に詩作を始め、山口大学在学中に舞台芸術ユニット「集団：歩行訓練」を立ち上げ、演劇等の作品を制作。大学院修了後、京都芸術センターアートコーディネーター、京都府地域アートマネージャー（山城地域担当）を経て、2021年から京都芸術センタープログラムディレクター。近作に、BEBERICA theatre company「あかちゃんとおとなのための演劇ペイペーションアター「水の駅」」（2022、演出）など。バンド「swimm」のメンバーでもある。

Ryuich Tani

Poet / Theatermaker / Cultural Worker. Tani was born in 1984 in Takahama, in Fukui Prefecture. He began writing poetry during high school and later founded the performing art unit The Group: Walkin'Trainin' while attending Yamaguchi University. Since then, he has continued to create theater works. After completing his master's, he served as an art coordinator at KYOTO ART CENTER and later became the Kyoto Prefecture regional art manager, before being appointed as Program Director of the center in 2021. His recent works as a theatermaker include Akachan to otona no tameno engeki baby theater [Theater for Babies and Adults]: Mizu no eki (direction, 2022) with BEBERICA theatre company. He is also a member of the band "swimm".



3 「各地域における農耕牛の記憶について」

野咲タラ

「……人間にとっての牛の関わり方には、大きく3つの種類があることを知る。牛乳を提供してくれる乳牛、お肉を提供してくれる肉牛、それから労働力を提供してくれる使役牛だ。使役牛は田んぼを耕したり荷物を運んだりして、人間の生活を支えてくれた。機械が誕生し、耕運機や自動車が登場するまでは」

"Memories of Agricultural Cattle in Various Regions" Tara Nosaki

"...I've learnt that there are three main ways in which humans interact with cows. Dairy cows that provide milk, beef cows that provide meat, and working cows that provide labor. Working cows supported humans by plowing rice fields and transporting heavy goods until the advent of machines, cultivators and automobiles."



野咲タラ

小説・ZINE作り。制作物にウリ科野菜ハヤトウリを通して国内外の各地域の文化を調べた日々の記録「ハヤトウリzine」、徳島阿波水軍の木造船技術が近代に家具づくりに転用された話を調べた紀行文「木造船のその後」(共に2023)、Kaguya PlanetにSF短編小説「透明な鳥の歌い方」を寄稿(2022)などがある。

Tara Nosaki

Nosaki writes and creates short stories and zines. Among her works are Hayato uri zine [Chayote zine] (2023), a daily record of her research on the culture of various regions in and outside of Japan that uses hayato uri, a vegetable from the gourd family; Mokuzousen no sono go [After the Wooden Ships] (2023), a travelog investigating how technology from wooden ship building in the Tokushima Awa Navy was adapted into the modern art of furniture building; and Toumei na tori no utakata [How the Transparent Bird Sings] (2022), a science fiction short story contributed to the platform Kaguya Planet.



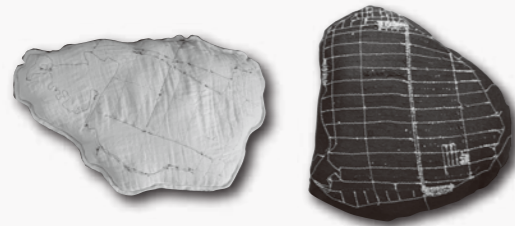
4 「関西にある水場を埋めてできた土地についてのリサーチ」

迎 英里子

「琵琶湖の内湖、ポートアイランド、大阪湾を主なリサーチ対象と想定しています。干拓によって変わった景色や、どのような経緯で人々が移り住んでいったのか。人が住む・利用する土地が出来上がる工程を追いかけることは、その土地の歴史を知ることに繋がります」

"Research on Reclaimed Land in Kansai" Eriko Mukai

"My main research areas are the inner lake of Lake Biwa, Port Island in Kobe and Osaka Bay. How did the land reclamation in each of these areas change the landscape and how did people move here? I think following the process of how the land on which people live and use was created leads to knowing the history of the land."



琵琶湖東部の干拓地の形状や現在の道路、水路を刺繍したぬいぐるみ(本人作)。
Stuffed toys embroidered with the shape of reclaimed land (including the current roads and waterways) in the eastern part of Lake Biwa. (Made by the artist.)

迎 英里子
アーティスト。1990年兵庫県生まれ。2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻彫刻修了。犀首や石油の採掘、水蒸気の循環など、世の中に存在する不可視の現象=システムをモチーフとし、そのメカニズムを等身大の装置へ変換し、動作させることでシステムを実際に作動させるパフォーマンス作品を制作している。主な展覧会に、国際芸術祭「あいち2022」(2022、墨会館・小信中島公民館、愛知)、ARTS&ROUTES-あわいをたどる旅-(2020、秋田県立近代美術館)など。
<https://mukaieriko.com/>

Eriko Mukai
Artist. Born in Hyogo Prefecture in 1990. In 2015, she completed her master's degree in sculpture at the Kyoto City University of Arts. From animal slaughter and oil extraction to the circulation of water vapor, Mukai utilizes invisible phenomena and systems that exist in the world as a motif in her work, creating performance pieces where she converts these mechanisms into life-size installations and sets their systems into motion. Notable exhibitions include *Aichi Triennale 2022* and *ARTS & ROUTES -Awai wo tadoru tabi-* (2020, Akita Museum of Modern Art).
<https://mukaieriko.com/>



スーパー・ナレッジ・フォー・ザ・フューチャー

Super Knowledge for Future [SKF]

5 「慰霊の文化についてのリサーチ」

山田 淳也

「関西圏の墓地などの先祖信仰、土着信仰についてリサーチしたい。私が現在住んでいる兵庫県豊岡市の墓地は立地には変わった特徴がある。必ずと言っていいほど、山にめり込むようにして斜面を利用して存在している。また、城崎地域の山には風化した小さな仏像や祠のようなものがかなりの頻度で点在していたりする」

"Research on the Culture of Memorials and Monuments for the Dead" Junya Yamada

"I would like to research cemeteries and other ancestral and indigenous beliefs in the Kansai region. The cemeteries in Toyooka City, Hyogo Prefecture, where I currently live, are often found in an unusual location. They are always located on the slopes of mountains. In addition, the mountains in the Kinosaki area are quite often dotted with small, weathered Buddhist statues and shrines."



山田 淳也
劇作や演出、踊りなど。「ばく」という集まりで集団創作をしている。芸術文化観光専門職大学在学。既存の概念を再解釈、再利用する上演「 」により、既存のこぼれや秩序を引っ掻き回す。演劇の解体と再利用の先に、今まで気が付かなかったネットワークと上演を開拓することを目的に活動している。主な作品に戯曲「ばへやんマーケット」、複合パフォーマンス「Anima(とばりと母系)」、芸能「野良(演舞)」などがある。twitter @fclclatena

Junya Yamada
Engaged in playwriting, directing, and dance, Yamada is currently studying at the Professional College of Arts and Tourism. He is also involved in collaborative co-creation through the group Baku. Through performances like " ", which reinterprets and reuses existing concepts, Yamada aims to disrupt established language and order. Beyond deconstructing and repurposing theater, he aims to explore undiscovered networks and performances. Notable works include the play *Paheyan Market*, the combined performance *Anima (Tobari to Boke)*, and the Japanese performing art piece *Nora (Enbu)*. twitter @fclclatena



出演アーティストによる貴重なトークやワークショップから、上演作品がテーマとする現代社会やカルチャーについてのレクチャー、まち歩きツアーまで。舞台芸術と観客をつなぎ、未来への新しい視点や思考を獲得していくプログラム。Showsと合わせて参加し、作品理解を深めるのはもちろん、「今気になること」を知るための単発参加もお気軽に。無料講座も多数あり。

This program offers new perspectives and thoughts for the future. It includes lectures on contemporary society and culture, a walking tour of Kyoto and talks and workshops by this year's artists. Listen or take part together with a Shows program to deepen your understanding of the works, or simply dive in and attend a single session. Much of the program is also free to attend!

2023 SKFプログラム



©Wichaya Artamat



©Renato Mangolin



河野隼也

上映会・トーク

★イベント ウィチャヤ・アートマート 『父の歌(5月の3日間)』 上映会&トーク

タイ演劇界の最注目作家であるウィチャヤ・アートマート。KYOTO EXPERIMENT 2023での世界初演となる新作発表(☞ p.38)を控え、2021 SPRINGでオンライン配信した作品の上映会とトークを開催する。本作は、ある姉弟の亡くなった父をめぐる会話から、個人と政治の関係性を描き大きな反響を得た。配信用に制作された映像を通してアートマート作品の魅力を経験し、ゲストやアーティストの言葉に耳を傾けてみよう。

日時	9.24(日)15:00-17:30
会場	The side
ゲスト	ウィチャヤ・アートマート、ササビン・シリワーニット、片岡樹(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)
聞き手	KYOTO EXPERIMENT共同ディレクター
言語	日本語、タイ語(逐次通訳あり)
料金	500円(1ドリンク付き)
予約	ウェブサイトより申込(先着順)

まちあるきツアー

伝承でたどる妖怪まちあるき 平安神宮～真如堂～相国寺

いにしえから語り継がれる不可思議な存在、「妖怪」。平安時代の京都には、鬼や物の怪(もののけ)など多くの妖怪が出没したと言われる。しかし、こうした伝承の存在は、さまざまな言い伝えが混ざり合うことで、今に伝わる姿に変容したのではないだろうか。今回のまちあるきでは、「化ける」をテーマに伝承の地をめぐる。化けるといえば、狐。平安神宮から出発し、「九尾の狐」にまつわる石の置かれた真如堂を経て、相国寺へ。歩みを進めるなかで、あなたに妖怪はどう映るか?

日時	10.1(日)10:00-12:00
集合場所	ミーティングポイント ローム・スクエア [解散場所:相国寺付近(予定)]
所要時間	約2時間(予定)
案内人	河野隼也(妖怪文化研究家、妖怪造形家)
料金	1,000円
予約	ウェブサイトより申込(定員20名・先着順) ※開始時間の10分前にはご集合ください ※天候により内容が変更になる場合があります ※動きやすい服装と靴でお越しください

トーク

アリス・リポル 特別トーク

今回、『Lavagem(洗淨)』を日本で初演するアリス・リポル(☞ p.42)。ブラジルはリオデジャネイロを拠点とし、スラム街・ファヴェーラの若者たちとともに活動するリポルにとって、コミュニティとの関係性は創作の要と言える。2日目の上演後に行う本トークでは、アーティストとして活動する人に向け、リポルがこれまで発表してきた作品やその創作プロセスを解説し、コミュニティと関わりながら作品をつくることについて参加者と対話を行う。

日時	10.7(土)16:30-18:00
会場	ロームシアター京都 ノースホール ホワイエ
ゲスト	アリス・リポル
聞き手	KYOTO EXPERIMENT共同ディレクター
対象	アーティストとして活動している方
言語	英語(日本語逐次通訳あり)
料金	無料
予約	ウェブサイトより申込(定員20名・先着順)

主催: KYOTO EXPERIMENT、ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業【アートキャラバン2】) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
事業名: JAPAN LIVE YELL project



ライブラリー

インキュベーション キョウト 「シアター?ライブラリー?」

ロームシアター京都 ノースホールに、シアターとライブラリーを融合させた期間限定の“ライブラリー”が登場する。本を読む、パフォーマンスを観る、トークに参加するなど、過ごし方はさまざま。同空間で開催する「Super Knowledge for the Future [SKF]」プログラムもあるため、その他のイベント内容含めスケジュールなどの詳細を、ロームシアター京都のウェブサイトでもチェックしてほしい。

日時	10.12(木)-10.16(月) 10:00-20:00
会場	シアター?ライブラリー? (ロームシアター京都 ノースホール)
構成・演出	福井裕孝
空間設計	REUNION STUDIO (木村慎弥、安川雄基、石田知弘)
入室料	1日パスポート100円 5日間パスポート500円 ※こども(18歳以下)無料

主催: ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、KYOTO EXPERIMENT、京都市、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業【アートキャラバン2】) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
事業名: JAPAN LIVE YELL project



ワークショップ

バック・トゥ・バック・シアター ワークショップ ブリトニーの無意識

『影の獲物になる狩人』(☞ p.44)の日本初演後、バック・トゥ・バック・シアターがその創作プロセスを紹介するワークショップを開催。障害のある俳優陣を有するカンパニーが、普段どのように共同創作に取り組んでいるかを知ることのできる機会となる。アーティストから同カンパニーの活動に興味のある人まで、障害のある・なしにかかわらず、すべての人にひらかれる場は、インクルーシブであること、参加者の間になんの違いも障壁もないことを体感させるだろう。タイトルの「ブリトニー」は、ポップスターのブリトニー・スピアーズのこと。即興のワークを通して、セレブリティへの無意識の憧れやオブセッションについて探求する。

日時	10.9(月・祝)11:00-12:30
会場	ゲーテ・インスティテュート・ヴィラ鴨川 ホール
ファシリテーター	バック・トゥ・バック・シアター芸術監督、アンサンブル・メンバー
対象	10歳以上の方
言語	英語(日本語逐次通訳あり)
持ち物	タオルまたはブランケット
料金	1,000円
予約	ウェブサイトより申込(定員12名・先着順)

共催: ゲーテ・インスティテュート大阪・京都

ワークショップ

シアター?ライブラリー?関連企画① 「アイデンティティの“まぜまぜ”は可能か?」

アイデンティティは自分を取り戻す手がかりになったり、人間や社会について深く考えるきっかけになる反面、利害のために誘導されたり、政治的に利用されたりもする。舞台芸術において、パフォーマーが生身の自分とは違う人間を演じるのは当たり前のことだったが、近年そうしたことを「文化的盗用」であるとして非難する動きもある。いわば、他人のアイデンティティを演じてはいけない、「まぜまぜ」してはいけない、ということである。こうした問題について、どのように考えたらいいのか。事例も参照しながらみんなで話し合ってみよう。

日時	10.12(木)18:30-20:30
会場	シアター?ライブラリー? (ロームシアター京都 ノースホール)
ファシリテーター	吉岡洋(美学者)
対象	本ワークショップで扱うトピックについて、事前に用意するテキストあるいは動画に関心を持ち、自分から問いを用意できる方
料金	無料(シアター?ライブラリー?への入室は有料)
予約	ウェブサイトより申込(定員20名・先着順)

トーク

シアター?ライブラリー?関連企画② 「ことばの混交の果てに—— 『クレオール主義』30年」

今福龍太著『クレオール主義』刊行から30年余。異なる言語や文化形態が移動・交差・混交するなかで、ハイブリッドな価値観や表現が社会に与えるインパクトについて描いた先駆的な書物である。一方でこの30年、画一化された情報が共有される速度は加速し、その真偽が政治や社会状況に多大な影響を与える時代に私たちは生きている。「世界の政治社会の趨勢は反-混合、反-混血へと逆行している」とする著者の現在の視座に立ち、『クレオール主義』から30年後の現代社会についての新たな見通しを映像や音を交えて縦横に語るトークイベント。
☞ p.64で今福龍太氏のコラムを掲載しています。

日時	10.14(土)15:30-17:00
会場	シアター?ライブラリー? (ロームシアター京都 ノースホール)
ゲスト	今福龍太(文化人類学者・批評家)
料金	無料(シアター?ライブラリー?への入室は有料)
予約	ウェブサイトより申込(定員20名・先着順)

トーク

芸術文化とファンドレイジング ——観客・サポーターとの未知の 関係性!?

文化政策やアート×ビジネス思考の専門家を迎えたトークイベント。KYOTO EXPERIMENTは近年、新型コロナウイルス感染症拡大や国際情勢の変化、京都市の行財政改革などの影響を受け、財政的に厳しい状況を抱えている。そのなかで、民間や企業からの支援・協賛も含めた運営のあり方を模索中だ。KYOTO EXPERIMENTに限らず、芸術文化の公共性とそれを支える構造はいま、大きな転換点を迎えているのではないだろうか。本トークでは、そんな状況をふまえて、アートと社会のこれからの「共創」について考えたい。

日時	10.17(火)19:00-20:30
会場	ミーティングポイント 四条烏丸
出演	大澤寅雄(合同会社文化コモンズ研究所代表)、 砂川敬(京都市文化芸術政策監)、富樫佳織 (京都精華大学メディア表現学部 准教授)、 KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター
モデレーター	山本麻友美(京都芸術センター副館長/ 京都市文化政策コーディネーター)
料金	無料
予約	ウェブサイトより申込(予約優先)

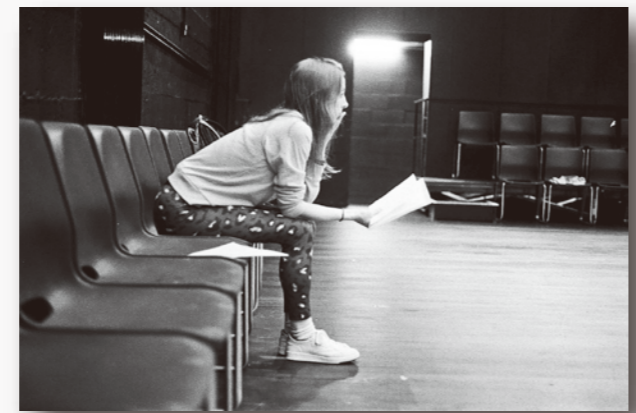
協力:京都市アート×ビジネス推進事業

ワークショップ

ルース・チャイルズ ワークショップ

ポストモダンダンスの巨匠振付家であるルシンダ・チャイルズが、ジャドソン・ダンス・シアターでの活動時に行っていた振付リサーチに基づくワークショップ。これを、姪のルース・チャイルズ(☞ p.50)がファシリテーターとなって実施する。1970年代のルシンダのダンスにみられる、3つの基本的な要素——「スコアの使用」「空間における軌跡」「音楽を伴わないリズム」。このワークショップでは、これらの要素を体感するべく、今回上演される作品のうち『Calico Mingling』(1973)と『Katema』(1978)のオリジナル・スコアを共有。実際に身体を動かし、ルシンダの作品をたどる試みである。

日時	10.16(月)19:00-20:30
会場	京都芸術センター フリースペース
ファシリテーター	ルース・チャイルズ
対象	ダンサー、パフォーマーとしてトレーニング している方
言語	英語(日本語逐次通訳あり)
持ち物	筆記用具、スニーカー
料金	1,000円
予約	ウェブサイトより申込(定員20名・先着順)



ルース・チャイルズ ©Mehdi Benkler



©Takuya Matsumi



ラジオ

KEXラジオ

ミーティングポイントから毎週配信するラジオプログラム。KYOTO EXPERIMENTスタッフ、渡邊裕史のDJによる「コミュニティラジオ」では、各作品の制作秘話から最新イベント情報までを紹介する。上海を拠点にするキュレーター、アーティスト、ドラマトゥルクのオフエリア・ジアダイ・ホァンと協働して配信する「Future Dictionary」では、世界の芸術関係者の共通言語である英語ではなく、英語以外の言語におけるさまざまなアートの概念と、それにつながるローカルな芸術の実践について考える。

☞ コミュニティラジオ	
日程	10.5(木)、12(木)、19(木)各日12:30-13:30
DJ	渡邊裕史(KYOTO EXPERIMENT)

☞ Future Dictionary	
日程	10.4(水)、16(月)各日19:00-19:30
出演	オフエリア・ジアダイ・ホァン(キュレーター)、 ドラマトゥルク、アーティスト[上海]
企画	オフエリア・ジアダイ・ホァン、協力:KYOTO EXPERIMENT

配信会場 ミーティングポイント 四条烏丸
※Instagram(@kyotoexperiment)からライブ配信。その後、Spotifyなどでもアーカイブ配信あり

トーク

メディアとしての染織—— 歴史・テクノロジー・アート

1688年に京都・西陣で創業した細尾は、西陣織の歴史を受け継ぎ、きもの文化の伝統を守り続けるとともに、西陣織の技法を踏襲しつつ、独自の織物を制作している。土地の風土・歴史、時の社会・権力構造とも密接につながり発達してきた染織文化。細尾では、2019年にHOSOO GALLERYを開設。その歴史をふまえながら、現代のテクノロジーやアートなど多領域を横断した織物の研究開発や、HOSOO STUDIESと称したりサーチ活動について、細尾真孝とキュレーターの井高久美子が語る。

日時	10.21(土)11:00-12:30
会場	ミーティングポイント 四条烏丸
出演	細尾真孝(株式会社細尾 代表取締役社長)、 井高久美子(インディペンデント・キュレーター)
料金	無料
予約	ウェブサイトより申込(予約優先)

協力:HOSOO GALLERY

公募

批評プロジェクト 2023

実験的舞台芸術の批評・評論を学ぶプロジェクト。参加要件は、対象演目の『影の獲物になる狩人』(☞ p.44)を鑑賞し、レビューを書いて応募すること。ここから選出された応募者(若干名)は演劇批評家の森山直人による個別指導を受け、内容をブラッシュアップすることができる。完成原稿はKYOTO EXPERIMENTのウェブサイトに掲載予定。芸術批評やライティングを学んでみたい人はぜひチャレンジいただきたい。応募要項はウェブサイトを確認を(参加無料)。
☞ 昨年の選出作品はp.68に掲載されています。

メンター	森山直人(演劇批評家)
応募締切	10.30(月)23:59

2023 SKF Programs

Please note that all events are in Japanese unless otherwise stated.



Alice Ripoll ©Renato Mangolin



Wichaya Artamat ©Bea Borgers

Screening / Talk

★Pre-festival Event

Wichaya Artamat This Song Father Used to Sing (Three Days in May) Screening and Discussion

Wichaya Artamat is currently among the most sought after playwrights in the Thai theater scene. As we anticipate the premiere of his new work at Kyoto Experiment 2023 (p.38), we invite you to join us for a screening and discussion of the piece originally presented online in Spring 2021. This work—which follows a brother and sister's conversation about their late father—received a positive response from audience members for its depiction of the relation between the personal and political. Experience Artamat's captivating voice through a film originally created for presentation online, and tune in to the thoughts of the artist and special guest.

Date	9.24 (Sun) 15:00-17:30
Venue	The side
Guest	Wichaya Artamat, Sasapin Siriwanij, Tatsuki Kataoka (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)
Host	Kyoto Experiment Co-directors
Language	Japanese and Thai (with consecutive Japanese interpretation)
Fee	¥500 (one drink included)

Reserve through the festival website.
(first come, first served)

Walking Tour

Yokai Walking Tour: Follow the Folklore through Heian Jingu Shrine, Shinyo-do Temple, and Shokoku-ji Temple

Since ancient times, stories of the mysterious *yokai* (supernatural creatures from Japanese folklore) have been passed down through generations. It is said that during the Heian period (794-1185), Kyoto was the stomping ground of various *yokai*, such as *oni* (demons) and *mononoke* (supernatural creatures). These legendary beings may have transformed into their current forms through the blending of various oral traditions over time. In this walking tour, we explore the lands of folklore as we delve into the theme of "*bakeru* (transformation)", a concept which is often associated with the fox. We start first with Heian Jingu Shrine, then make our way to Shinyo-do Temple, where a stone linked to the nine-tailed fox awaits. Afterwards, we head to Shokoku-ji Temple. As you make your way through the journey, how will the *yokai* reveal themselves to you?

Date	10.1 (Sun) 10:00-12:00
Meeting Place	Meeting Point at ROHM Square
Ending Point	Near Shokoku-ji Temple (TBC)
Duration	Approximately 2 hours
Guide	Junya Kouno (Yokai Culture Researcher, Yokai Creator)
Fee	¥1,000
Capacity	20 (first come, first served)

Reserve through the festival website.

Talk

Alice Ripoll Special Talk Event

This year, Alice Ripoll premieres her work, *Lavagem*, for the first time in Japan (p.42). Ripoll, who is based in Rio de Janeiro, Brazil, works in collaboration with young people from the slums known as favelas. Her relationship with the community plays an essential role in her artistic process. This talk event is aimed at artists and takes place straight after the second performance. Ripoll will discuss her previous works and creative process, opening up a dialogue about art and community engagement.

Date	10.7 (Sat) 16:30-18:00
Venue	North Hall Foyer, ROHM Theatre Kyoto
Guest	Alice Ripoll
Host	Kyoto Experiment Co-directors
Participants	Practicing Artists
Language	English (with consecutive Japanese interpretation)
Fee	Free admission
Capacity	20 (first come, first served)

Reserve through the festival website.

Organized by Kyoto Experiment, ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto City, GEIDANKYO (Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations)
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council, "JAPAN LIVE YELL project"



Library

Incubation Kyoto "Theater? Library?"

Experience the "Library," which fuses the theater and library experiences, in the North Hall of ROHM Theatre Kyoto for a limited time. Visitors can enjoy an array of activities in the space, such as reading books, watching a performance, or participating in a talk event. A number of Super Knowledge for the Future (SKF) events are also hosted in the same space. For more information about events and the full schedule, please visit the ROHM Theatre Kyoto website.

Date	10.12 (Thu)-10.16 (Mon) 10:00-20:00
Venue	Theater? Library? (North Hall, ROHM Theatre Kyoto)
Composition & Direction	Hiroataka Fukui
Space Design	REUNION STUDIO (Shinya Kimura, Yuki Yasukawa, Tomohiro Ishida)
Entrance fee	¥100 for 1-day, ¥500 for 5-day passport (Free for 18 and under)

Organized by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto Experiment, Kyoto City, GEIDANKYO (Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations)
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council, "JAPAN LIVE YELL project"



Workshop

Back to Back Theatre Workshop Brittney Unconscious

After the Japan premiere of *The Shadow Whose Prey the Hunter Becomes* (p.44), Back to Back Theatre offers a workshop to present their creative process. Join us for an opportunity to learn how the company engages in the process of co-creation with people with disabilities. This workshop welcomes artists as well as those who are simply curious about the company's activities; it is open to everyone, regardless of level of ability or disability. Through this workshop, participants will experience an inclusive space that breaks down the barriers and differences between them. *Brittney* in the workshop title comes from the pop star Brittney Spears. This workshop explores unconscious-desire and celebrity obsession through improvisation.

Date	10.9 (Mon) 11:00-12:30
Venue	Goethe-Institut Villa Kamogawa Hall
Facilitator	Artistic director of Back to Back Theatre, ensemble members
Participants	Aged 10 years and over
Language	English (with consecutive Japanese interpretation)
Fee	¥1,000
Capacity	12 (first come, first served)

Please bring a towel or a blanket with you.
Reserve through the festival website.

Co-organised by Goethe-Institut Osaka Kyoto

Workshop

Is it possible to "maze maze" identity?

The concept of "identity" can be used as a tool for self-discovery and a catalyst to ponder deeply about humanity and society. However, it can also be utilized for personal gain or exploited for political reasons. Within the performing arts, performers often portray characters which differ from their real-life identities. However, there is a recent shift whereby this can be seen as a form of cultural appropriation. How do we portray another person's identity or maze maze (mix up) different identities? How can we approach these issues? Drawing on real-life examples, we invite you to discuss this complex topic together.

Date	10.12 (Thu) 18:30-20:30
Venue	Theater? Library? (North Hall, ROHM Theatre Kyoto)
Facilitator	Hiroshi Yoshioka (Aesthetician)
Participants	Recommended for people interested in the texts and videos prepared in advance about the topics covered in this workshop, and for those who can prepare their own questions.
Capacity	20 (first come, first served)

Free admission. Please note there is an entrance fee to "Theater? Library?" (100 yen for 1 day / free for children under 18)

Reserve through the festival website.

Talk

Beyond the Hybridity of Language: 30 years since *The Heterology of Culture*

About 30 years have passed since Ryuta Imafuku published *The Heterology of Culture: A Manifesto of Creolism*. This pioneering work explores the impact of hybrid values and forms of expression on a society where different languages and cultural forms shift, intersect, and intertwine. And yet in the past 30 years, the sharing of standardized information has accelerated; we live in an age where the (in)accuracy of this information has a significant impact on politics and society. The author's present belief is that there is a regressive trend in the world against hybridity and cultural mixing. In this talk event, we touch upon the author's current perspectives, incorporating visual and auditory elements to provide a fresh outlook on contemporary society. Read an article by Ryuta Imafuku on p.64!

Date 10.14 (Sat) 15:30-17:00
Venue Theater? Library? (North Hall, ROHM Theatre Kyoto)
Guest Ryuta Imafuku (Anthropologist and Critic)
Capacity 20 (first come, first served)

Free admission. Please note there is an entrance fee to "Theater? Library?" (100 yen for 1 day / free for children under 18)

Reserve through the festival website.

Workshop

Ruth Childs Workshop

This workshop is based on the choreographic research of master choreographer of post-modern dance Lucinda Childs, during her time with the Judson Dance Theater. Her niece, Ruth Childs (p.50), facilitates. There are three fundamental elements found in Lucinda's choreography from the 1970s: the use of a score, a spatial itinerary, and rhythm without music. In this workshop, we invite participants to experience these elements as we share the scores of *Calico Mingling* (1973) and *Katema* (1978), both showing at Kyoto Experiment. Join us as we attempt to trace Lucinda's works together through physical movement.

Date 10.16 (Mon) 19:00-20:30
Venue Multi-purpose Hall, KYOTO ART CENTER
Facilitator Ruth Childs
Participants Dancers and performers undergoing some form of training
Language English (with consecutive Japanese interpretation)
Fee ¥1,000
Capacity 20 (first come, first served)

Please bring a pen and paper and sneakers.
Reserve through the festival website.

Talk

Fundraising for Arts and Culture: Possible Relationships between Audiences and Supporters

This talk event features experts in cultural policy and business within the realm of art. In recent years, Kyoto Experiment has been facing financial challenges due to factors such as the pandemic, changes in the international landscape, and the city of Kyoto's financial reforms. Given this situation, we are currently exploring new modes of operation, seeking support and sponsorship from private entities and corporations. This is not unique to Kyoto Experiment, as the public nature of art and culture, along with the structures that sustain it, is currently facing a crucial turning point. In light of these circumstances, this discussion seeks to contemplate the future of "co-creation" between art and society.

Date 10.17 (Tue) 19:00-20:30
Venue Meeting Point at Shijo Karasuma
Guest Torao Ohsawa (Institute for Culture Commons), Takashi Sunagawa (Senior Policy Administrator for Culture and Arts of Kyoto), Kaori Togashi (Kyoto Seika University Media Faculty of Media Creation Associate Professor), Kyoto Experiment Co-directors
Moderator Mayumi Yamamoto (KYOTO ART CENTER Arts Advisor/ Kyoto City Cultural Policy Division Coordinator)

Reserve through the festival website (limited capacity)

With the cooperation of Kyoto City Art x Business Promotion Project



Ryuta Imafuku

Talk

Dyeing and Weaving as Media: History, Technology, and Art

Founded in 1688 in the Nishijin district of Kyoto, HOSOO continues the legacy of Nishijin textiles and preserves the tradition of kimono culture while also creating their own unique techniques which incorporate Nishijin weaving. The development of dyeing and weaving has evolved in a deep connection with the local environment and its history, alongside societal structures and power dynamics. In this conversation with Masataka Hosoo and curator Kumiko Idaka, we reflect on this rich history while we discuss HOSOO and its collaborations with contemporary art and technology, as well as the activities of HOSOO GALLERY, which opened in 2019.

Date 10.21 (Sat) 11:00-12:30
Venue Meeting Point at Shijo Karasuma
Guest Masataka Hosoo (CEO, Hosoo Co.,Ltd.), Kumiko Idaka (Independent Curator)
Fee Free admission

Reserve through the festival website (limited capacity)

With the cooperation of HOSOO GALLERY

Open Call

Performing Arts Criticism Project 2023

This project invites participants to learn about reviewing and writing commentary on experimental theater. For a chance to take part in the project, watch the performance *The Shadow Whose Prey the Hunter Becomes* (p.44) and submit a review. A select few individuals will receive one-on-one guidance from theater critic Naoto Moriyama to help improve their work. The finished articles will be uploaded to the Kyoto Experiment official website. An opportunity not to be missed if you are interested in learning about art criticism and writing!

Last year's selected article is printed on p.68.

Instructor Naoto Moriyama (Theater Critic)
Deadline for applications 10.30 (Mon) 23:59

Radio

KEX Radio

We bring you weekly radio programs from the Meeting Point. In "Community Radio", Kyoto Experiment staff member Hiroshi Watanabe introduces everything from behind-the-scenes insights on each production to the latest updates on events. In "Future Dictionary", Shanghai-based curator, artist, and dramaturg Ophelia Jiadai Huang explores topics in languages other than English, the lingua franca of the art world. Listen in as we discuss various artistic concepts and local art practices.

Community Radio

Date 10.5 (Thu), 12 (Thu), 19 (Thu) 12:30-13:30
DJ Hiroshi Watanabe (Kyoto Experiment)

Future Dictionary

Date 10.4 (Wed), 10.16 (Mon) 19:00-19:30
Featuring Ophelia Jiadai Huang (Curator, Dramaturg, Artist [Shanghai])

Future Dictionary is a project initiated by Ophelia Jiadai Huang in collaboration with Kyoto Experiment.

Venue Meeting Point at Shijo Karasuma

Live streamed on the festival Instagram @kyotoexperiment. Archive available on Spotify and other platforms at a later date.



©Kira Kynd



HOSOO GALLERY ©Kotaro Tanaka

Kyoto Experiment
SKF
Shangha
A
O
I



ショウズ


Shows

Showsにプログラムされている11演目の概要を紹介。
The next pages introduce each of the eleven artists and their work in the Shows program.

35

アイコンについて / Symbols

-  上演日時 / Date
-  上演時間 / Duration
-  会場 / Venue
-  上演言語 / Language
-  料金 / Price
-  鑑賞についての諸注意 / Notes

 各作品やアーティストに関連するイベント
Selected events related to the work or artist

イ・ラン

Moshimoshi City:

1から不思議を生きてみる | 뚜벅뚜벅, 1도 모르는 신기속으로

拠点：ソウル（韓国） オーディオ・パフォーマンス | 新作


Lang Lee

Moshimoshi City — One Mystery At a Time

Based in Seoul, Korea | Audio Performance | New Work



© Lang Lee


 体験期間 / Period:
9.30 (Sat)-10.22 (Sun)

受付は、開催期間の金・土・日・祝日11:00-18:00
Reception: 11:00-18:00 on Fridays, Saturdays, Sundays and public holidays during the festival period.

 60-90 min


 日本語・韓国語・英語（選択可）
Available in Japanese, English or Korean

#まちあるき #エイリアンをインストール #想像をませませ
#audio-tour #alien-perspective #otherworldly
#everydaylife

 東九条エリア各所
(受付場所: コミュニティカフェほっこり)
Higashi Kujo area
(Reception at Community Cafe Hokkori)

「ミーティングポイント 四条烏丸」でも受付可能です (時間はp.16へ)

Reception is also available at Meeting Point Shijo Karasuma during opening hours (☞ p.16)

 音声を再生して聞いていただくオーディオ・パフォーマンス作品です。受付後はフェスティバル期間中のご自身のタイミングで体験いただけます。ルートには住宅地も含まれますので、夜間の体験はお控えいただくなどマナーを守ってご参加ください。音声再生用のスマートフォン、イヤホン・ヘッドホンなどをご用意ください。音声再生機器の貸し出しも可能です。(要事前予約・有料・詳細はウェブサイトへ)

Audiences can experience the work at any time after reception and during the festival period. Please note the route goes through residential areas so please be respectful and refrain from walking the route at night. Please bring a smartphone and headphones to listen to the audio recordings. Customers without a smartphone may rent an audio device for a fee. (reservation is required, please see the festival website for details)



見知らぬ土地に降り立った、 非地球人のまなざし

コロナ禍のKYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN開催時に始動したプログラム「Moshimoshi City」。京都市内各所を舞台に、作家が架空のパフォーマンスを執筆し、観客は現地へ赴いてそのテキストを「声」で聞く。想像力をもって、実在しない作品を脳内に立ち上げる実践だ。

今年度の舞台は、東九条エリア。近年開発が進むこの地を、韓国を拠点にシンガーソングライターや文筆家として、社会への体感を等身大の声と言葉で表現するイ・ランが見つめる。同地域のコミュニティカフェで働くアーティストとオンラインでつないだり、現地を訪れたりするなかで、変わりゆく街を再発見しながら、他者が地域へ溶け込むことを思考するプロセスは、私たちに何を示すだろうか。

観客は地球外から来た生物の目線に立ち、土地に生きる人間たちの自然な振る舞い方を、日韓英3言語のテキストを手がかりに模索することになる。

クレジット

作・演出・録音: イ・ラン
出演: イ・ラン(韓国語)、浜辺ふう(日本語)、ムン・ホヨン|문호영(英語)
翻訳: 浜辺ふう(日本語)、ムン・ホヨン|문호영(英語)
リサーチアシスタント: 山口恵子

製作: KYOTO EXPERIMENT

協力: 希望の家(京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン)、コミュニティカフェほっこり、Books × Coffee Sol., THEATRE E9 KYOTO、スウィート・ドリームス・プレス
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(国際芸術交流支援)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造[舞台芸術を通して考える身体/歴史/アイデンティティ]
主催: KYOTO EXPERIMENT

イ・ラン | 이랑

1986年、韓国ソウル生まれのマルチアーティスト。2012年ファーストアルバム『ヨンヨンソン』で音楽デビュー。2021年のサードアルバム『オオカミが現れた』ではダイナミックなサウンドと新しいヴォイシングを組み合わせ、数々の音楽賞を受賞した。作家・エッセイスト・イラストレーターとしても活躍、エッセイ集『悲しくてかっこいい人』ほか著書多数。2022年に漫画家いがらしみきおとの往復書簡集『何卒よろしくお願いたします』を日本で上梓。真摯で嘘のない言葉、フレンドリーな姿勢が共感を呼んでいる。

An extraterrestrial's view of an unfamiliar world

Moshimoshi City, which launched at Kyoto Experiment 2021 Autumn amidst the pandemic, is a program in which artists conceive imaginary performances to be experienced by audiences through audio at various locations in Kyoto City. The project is an attempt to generate otherwise non-existent performances using the power of the imagination.

This year's venue is limited to one area, the Higashi Kujo neighborhood, which has been undergoing redevelopment in recent years. Lang Lee, a singer-songwriter and writer based in Korea, employs life-size voices and words to represent social experiences. Through visiting the area and also connecting online with an artist who works at a local community cafe, Lee considers how others blend into the area while rediscovering the changing neighborhood. What will this process reveal to us?

Putting the audience into the shoes of an extraterrestrial being, Moshimoshi City explores the daily habits of earthly people through an audio text in Japanese, Korean, and English.

Credits

Text, Direction and Audio Recording: Lang Lee
Cast: Lang Lee (Korean), Fu Hamabe (Japanese) and Ho Young Moon (English)
Translation: Fu Hamabe (Japanese), Ho Young Moon (English)
Research Assistant: Keiko Yamaguchi

Produced by Kyoto Experiment

In co-operation with Kibo no Ie (The Kyoto City Networking Salon for Community Welfare and Multicultural Exchange), Community Cafe Hokkori, Books × Coffee Sol., THEATRE E9 KYOTO and Sweet Dreams Press
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council, Japan Foundation for Regional Art Activities [Thinking about the body, history and identity through the performing arts]
Presented by Kyoto Experiment

Lang Lee

Born in Seoul, Korea in 1986, Lee is a singer/songwriter, essayist, author, and filmmaker. In 2012 she released her first album "Yon Yonson" [윤윤슨] and in 2021 her third album "There is a Wolf" [늑대가 나타났다], which combines dynamic sounds with new voicings; and won numerous music awards. Lee is also active as an essayist, author and illustrator. Her writing is published widely in Japan and is often described as open, sincere and honest; evoking sympathy in her readers.



ウィチャヤ・アートマート / For What Theatre

ジャグル&ハイド (演出家を探すんだかわからない7つのモノたち)

拠点: バンコク (タイ) | 演劇 | 新作

Wichaya Artamat / For What Theatre Juggle & Hide (Seven Whatchamacallits in Search of a Director)

Based in Bangkok, Thailand | Theater | New Work



©Rueangrith Suntuksit

9.30 (Sat) 14:00 ★◆
10.1 (Sun) 13:00 ♥ / 17:00

★ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-show talk
◆ 感想シェアカフェ / Festival Share Cafe (p.17)
♥ 託児あり / Childcare Service (p.19)

京都芸術センター 講堂
Auditorium, KYOTO ART CENTER

タイ語 (日本語・英語字幕あり)
Thai with Japanese and English surtitles

70 min (予定 | TBC)

9.24 (Sun) ウィチャヤ・アートマート 上映会&トーク (p.26)
Screening and Discussion with
Wichaya Artamat (p.30)

開演後は途中入場不可。12歳以上推奨。一部暴力的な映像が含まれますので予めご了承ください。

Audiences may not enter after the performance has started. Recommended for ages 12 and above. Please note this performance contains violent video footage. Viewer discretion is advised.

#国際共同制作 #政治と表現 #タイ演劇最前線
#metaphor-rebellion #freedom-of-expression
#politics #speech-or-sound

メタファーに秘匿された、 小道具たちのアイデンティティ

政治と個の生い立ち、表現との関わりを問うタイ演劇界の最注目演出家、ウィチャヤ・アートマートが、KYOTO EXPERIMENT 2021 SPRING に引き続き2度目の登場。サウンドデザインに荒木優光、ドラマトウルクに塚原悠也を迎えた国際共同制作作品として今回、新作を上演する。アートマートはこれまでの作品のなかで、政治的なメッセージの検閲を回避するメタファーとして、さまざまな小道具を舞台に上げてきた。しかし、それは小道具がもつ“物”としてのアイデンティティを、演劇表現を通して抑圧してきたことにはならないか？

今作に俳優は出演せず、出演するのは、ある日の日付、額縁、歌、てるてる坊主、木、ピザ、扇風機などの小道具たち。アートマート本人は、各作品を生み出した政治的出来事や各作品における小道具たちの役割をたどりながら、自らの独裁的な振る舞いを省みる。アートマートは、小道具たちに意味を押し付けてきたことを考え、それらに「応答」する余地を与える。

遊び心がありながら転覆的な演出は、タイ国家のみならず、知らず知らずのうちに大きな権威構造に飲み込まれる自己・他者のありよう、そして過酷で不条理な状況を問い、乗り越える問題提起の方法へのアプローチを示唆するだろう。

クレジット

コンセプト・演出: ウィチャヤ・アートマート | 脚本: パティポン・アサワマハポン、ウィチャヤ・アートマート | アート&テクニカルディレクション: ポーンパン・アラーウイラシッド、ルアングリット・サンティスック | ドラマトウルク: 塚原悠也
サウンドデザイン・音響操作: 荒木優光 | マシーン製作: ラボンバット・ドゥワンブローイ
テクニカル・オペレーション: ビティ・ブンスム | 舞台監督: パティポン・アサワマハポン
オブジェクト・オペレーション: スラット・ゲオシークラム | プロデューサー: ササピン・シリワニット
プロジェクトマネージャー: トンチャイ・ビマバンシー
制作: 瀬藤朋 (京都芸術センター)
日本語字幕翻訳: 福富渉

協力: バンコク・アート&カルチャー・センター
レジデンス協力: 京都芸術センター
共同製作: KYOTO EXPERIMENT、独立行政法人国際交流基金、For What Theatre
助成: 公益財団法人セゾン文化財団 (国際プロジェクト支援「KYOTO EXPERIMENT × For What Theatre Juggle & Hide [Seven Whatchamacallits in Search of a Director.]」)
共催: 独立行政法人国際交流基金
主催: KYOTO EXPERIMENT

本作は令和5年度国際交流基金舞台芸術国際共同制作事業として制作されました。

ウィチャヤ・アートマート / For What Theatre

演出家・For What Theatre 共同設立メンバー。1985年、タイ・バンコク生まれ。Bangkok Theatre Festival in 2008 のプロジェクトコーディネーターを経て、2009年 New Theatre Society に加わり、実験的なアプローチで注目される演出家に。社会が歴史をどのように記憶するのか、またいかに忘れてしまうかを探究することに強い関心を持つ。2014年 For What Theatre を共同設立。代表作『父の歌 (5月の3日間)』は2019年の初演以来、世界各地で上演を続けている。

The identities of props concealed in metaphors

Thailand's most sought-after director, Wichaya Artamat—who questions the relations between politics, an individual's upbringing, and artistic expression—joins us for the second time following his piece for Kyoto Experiment 2021 Spring. This new work is also an international co-production with Masamitsu Araki as sound designer and Yuya Tsukahara as dramaturg.

In previous works Artamat has used various props on stage as metaphors to avoid the censorship of political messages. However, could this approach not be read as a way of oppressing the identities of props as “things” through theatrical expression?

For this work, no actors are present on stage. The performers are a number of props: a particular date, a frame, a song, a *teru teru bozu* (hand-made doll which is believed to bring good weather), a tree, a pizza, and a fan. Artamat himself reflects on his own dictatorial behaviors by tracing the political incidents that gave birth to each of his pieces and the roles these props play in them. He considers how he has forced meaning on to them, and, in this work, allows them space to “respond.”

His playful yet subversive approach to directing this work suggests ways of asking questions in order to overcome harsh and unreasonable situations: not only in regards to the Thai government, but also any individual or wider society that is unwittingly subsumed by larger authoritarian structures.

Credits

Concept and Direction: Wichaya Artamat | Text: Pathipon Adsavamahpong, Wichaya Artamat | Art and Technical Direction: Pornpan Arayaveerasid, Rueangrith Suntuksit | Dramaturg: Yuya Tsukahara | Sound Design and Operation: Araki Masamitsu | Mechanics Creation: Laphonphat Duongploy
Technical Operation: Piti Boonsom | Stage Manager: Pathipon Adsavamahpong
Object Operation: Surat Kaewseekarn
Producer: Sasapin Siriwanij | Project Management: Thongchai Pimapunsi
Production Coordinator: Tomo Setou (KYOTO ART CENTER)
Japanese surtitles: Sho Fukutomi

In co-operation with Bangkok Art and Culture Centre (BACC)
Residency support: KYOTO ART CENTER
Co-Produced by Kyoto Experiment, The Japan Foundation and For What Theatre
Supported by The Saison Foundation (International Project Support Program / Kyoto Experiment × For What Theatre Juggle & Hide [Seven Whatchamacallits in Search of a Director.]
Co-Organized by The Japan Foundation
Organized by Kyoto Experiment

This work was produced for the Japan Foundation's International Creations in Performing Arts 2023.

Wichaya Artamat / For What Theatre

Born in Bangkok, Thailand in 1985, Artamat is a theater director and co-founding member of For What Theatre. After working for Bangkok Theatre Festival 2008 he joined the New Theatre Society in 2009 and has become a director recognized for his experimental approach. He is especially interested in exploring how society remembers and unremembers its history. His most prominent work *This Song Father Used to Sing (Three Days in May)* has been performed around the world since its premiere in 2019.

チェルフィツチュ

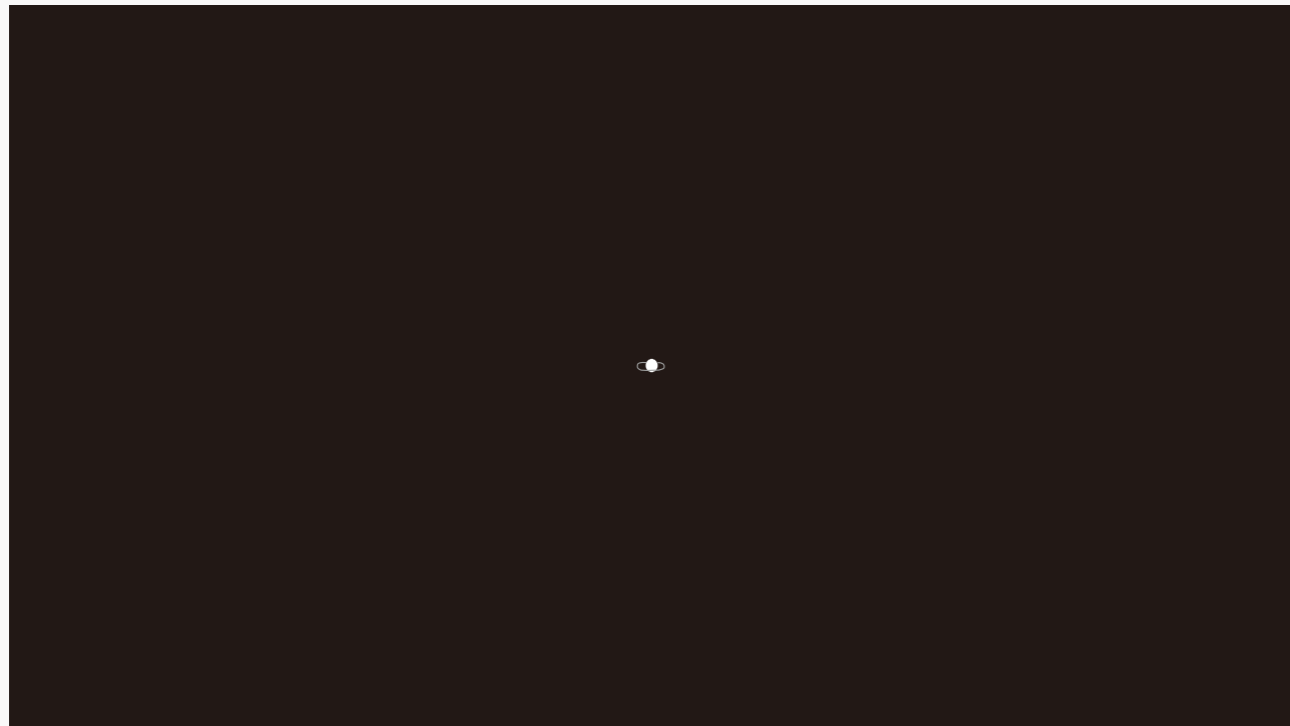
宇宙船イン・ビトゥイーン号の窓

拠点：東京（日本） 演劇 | 新作

chelfitsch

The Window of Spaceship 'In-Between'

Based in Tokyo, Japan Theater | New Work



©Tujiro Maki / Masanao Hirayama

🕒 9.30 (Sat) 18:00
10.1 (Sun) 13:00 ◆♥ / 18:00
10.2 (Mon) 14:00 / 19:00
10.3 (Tue) 14:00 ★ / 19:00

★ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-show talk
◆ 感想シェアカフェ / Festival Share Cafe (p.17)
♡ 託児あり / Childcare Service (p.19)

🕒 100 min

#言語のまぜまぜ #演劇の本質 #ハイブリッド
#native #(un)standardizing #hybridity

📍 ロームシアター京都 ノースホール
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

🗺️ 日本語(英語字幕あり)
Japanese with English surtitles

👉 More Events
10.1 (Sun) 13:00 日本語を使った演劇ワークショップあり(無料)
Theatrical workshop using Japanese
Free admission



いくつものリアリティが交差する、 まだ見ぬSF演劇

舞台はある国が消滅したあとの世界。文化を残すというミッションを掲げ、宇宙船イン・ビトゥイーン号に、4人の乗組員と1体のアンドロイドが乗り込んだ。銀河を漂う船内では、それぞれの思い出を振り返る対話が“ある言語”で繰り返される――。

チェルフィツチュ主宰の岡田利規は、日本語を母語としない俳優が、発音や文法が「正しくない」という理由で、演技力を評価されない日本演劇のありように着目する。2021年には、演劇における日本語の可能性をひらくことを目指し、ノン・ネイティブ日本語話者との協働プロジェクトを始動。本作はその一環として行われたワークショップやトークイベント、オーディションを経て選出した俳優とともに作り上げられた。

言語の定義とは？ 文化や社会、政治と結びつく言語の純粋性は可能か？ 多彩な背景をもつ俳優が日本語で演じる姿に、私たちは自問するだろう。チェルフィツチュ最新作の関西初上演をお見逃しなく。

クレジット

作・演出：岡田利規 | 出演：安藤真理、徐秋成、ティナ・ロズネル、ネス・ロケ、ロバート・ツェツシエ、米川幸利オン | 舞台美術：佐々木文美
音響：中原楽 (LUFZUG) | サウンドデザイナー：佐藤公俊
照明：吉本有輝子 | 照明オペレーター：吉田一弥 | 衣裳：藤谷香子
舞台監督：川上大二郎 (スケラホ)
演出助手：山本ジャスティン伊等 (Dr. Holiday Laboratory) | 英語翻訳：オガワアヤ
宣伝美術：牧寿次郎 | アートワーク：平山昌尚
プロデューサー：黄木多美子 (precog)、水野恵美 (precog)
プロジェクトマネージャー：遠藤七海
プロジェクトアシスタント：村上瑛真 (precog)

製作：一般社団法人チェルフィツチュ
共同製作：KYOTO EXPERIMENT
企画制作：株式会社precog

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(国際芸術交流支援)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造[舞台芸術を通して考える身体/歴史/アイデンティティ]
主催：KYOTO EXPERIMENT

チェルフィツチュ

岡田利規が全作品の脚本と演出を務める演劇カンパニーとして1997年に設立。2007年『三月の5日間』で初の国外上演を果たして以降、世界90都市以上で公演。海外の有名フェスティバル・劇場の委嘱および国際共同製作も多数。KYOTO EXPERIMENT 2019では「人間中心主義からの逸脱」をテーマに美術家の金氏徹平をセノグラフィアーに迎え『消しゴム山』を初演。2023年5月、ウィーン芸術週間にて、新作音楽劇『リビングルームのメタモルフォーシス』を作曲家 藤倉大との協働で制作、世界初演を迎えた。

A brand-new Sci-Fi play where multiple realities intersect

Set in a world where a certain country has vanished, four crew members and one android board the spaceship 'In Between' to embark on a mission to preserve their culture. While drifting across the galaxy, they recount memories together in a certain language.

Toshiki Okada, founder of the theater company chelfitsch, turns his attention to the state of Japanese theater, where actors whose native language is not Japanese are not appreciated due to their "incorrect" pronunciation or grammar. The company began collaborating with non-native Japanese speakers in 2021 in hopes of opening up new possibilities for the Japanese language in theater. This new piece is created with actors who were selected through workshops, talk events, and auditions held as part of that initiative.

How is language defined? Is purity possible in language that connects cultures, societies, and politics? This performance in Japanese by actors of diverse backgrounds is sure to provoke such questions. The Kansai premiere of chelfitsch's new production is unmissable.

Credits

Playwright and Director: Toshiki Okada | Cast: Mari Ando, Qiucheng Xu, Tina Rosner, Ness Roque, Robert Zetzsche, Leon Kou Yonekawa | Set Design: Ayami Sasaki | Sound Designer: Raku Nakahara (LUFZUG) | Sound Creator: Kimitoshi Sato | Lighting Designer: Yukiko Yoshimoto | Lighting Operator: Kazuya Yoshida
Costume: Kyoko Fujitani | Technical Director: Daijiro Kawakami (Scale Laboratory) | Assistant Director: Justin Karera Yamamoto (Dr. Holiday Laboratory) | Translation: Aya Ogawa | Publicity Design: Jujiro Maki | Artwork: Masanao Hirayama | Producer: Tamiko Ouki (precog), Megumi Mizuno (precog)
Production Manager: Nanami Endo | Assistant Production Manager: Ema Murakami (precog)

Produced by chelfitsch
Co-produced by Kyoto Experiment
Planning and Production Management by precog co., LTD.

Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council, Japan Foundation for Regional Art Activities [Thinking about the body, history and identity through the performing arts]
Presented by Kyoto Experiment

chelfitsch

chelfitsch is a theater company founded in 1997 by Toshiki Okada, who writes and directs all of its productions. After making its international debut in 2007 with *Five Days in March* the company has presented its works in over ninety cities. Many of the company's works have also been commissioned or co-produced by the world's leading theaters and performing arts festivals. In May 2023 at Wiener Festwochen, the company premiered *Metamorphosis of a Living Room*, a new form of musical theater created in collaboration with the composer Dai Fujikura.



アリス・リポル / Cia. REC

Lavagem (洗淨)

拠点：リオデジャネイロ (ブラジル) ダンス | 日本初演

Alice Ripoll / Cia. REC

Lavagem

Based in Rio de Janeiro, Brazil Dance | Japan Premiere



©Christopher Mavric

🕒 10.6 (Fri) 19:00 ★
10.7 (Sat) 14:00 ◆♡

★ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-show talk
◆ 感想シェアカフェ / Festival Share Cafe (p.17)
♡ 託児あり / Childcare Service (p.19)

🕒 60 min

🗨️ 開演後は途中入場不可。12歳以上推奨。
Audiences may not enter after the performance has started. Recommended for ages 12 and above.

📍 ロームシアター京都 ノースホール
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

👉 More Events
10.7(Sat) アリス・リポル 特別トーク(p.27)
Alice Ripoll Special Talk Event (p.31)

#水と泡 #身体と思考のまぜまぜ #綺麗 #汚い
#できそうでできない
#politics #soap-and-water #clean #dirty

見えざる分断を問う、 遊びに富んだ身体のムーブメント

バケツや水、石鹸の泡など日常の道具を使った、6人のパフォーマーによるダンス。個々の身体はアクロバティックに重なり合い、互いにしがみつきバランスをとる。その動作を、観客は協働や相互扶助、関係性のなかで生じるフラストレーションなどの表象としてとらえていく。

「Lavagem」は、ポルトガル語で「洗淨」を指し、また「マネーロンダリング」や「洗脳」を意味する表現にも用いられる言葉だ。国の歴史下で維持される性差別や人種差別、反社会的な力に追い詰められるアイデンティティ。またコロナ禍で世界的に顕著になった、エッセンシャルワークの従事者とその恩恵を受ける人々とのヒエラルキー。本作は「洗淨」の対象となるべきものとは何か?と、見えざる分断を問いかける。

自身の地域やルーツを掘り下げ、政治的・社会的なメッセージを独自の身体表現に転換させるアリス・リポル。リオデジャネイロのスラム街・ファヴェーラの若者たちと結成したグループ、Cia.RECの最新作であり、日本初となる舞台に注目してほしい。

クレジット

演出:アリス・リポル|原案:アラン・フェレイラ|出演:アラン・フェレイラ、ヒルティニョ・ファンタスティコ、カティアニー・コレイア、ロムロ・ガルヴァン、トニー・ヘヴァートン、タミレス・コスタ|制作:アラン・フェレイラ、ヒルティニョ・ファンタスティコ、カティアニー・コレイア、ロムロ・ガルヴァン、トニー・ヘヴァートン、トゥアニー・ナシメント|演出補佐(ツアー版):レナト・リニャレス|制作統括:ナターシャ・コルベリーノ(Corbelino Cultural)|制作アシスタント、美術アシスタント:タイス・ベイシヨト、制作アシスタント:ミレーナ・モンテイロ|アーティストティック・アシスタント:ローラ・サミー写真:レナト・マンゴリン|美術デザイン:ラケル・セオ|ヘア&メイク:クレベル・デ・オリベイラ|衣裳デザイン:パウラ・シュトレッハー|照明デザイン:トマス・リバス
ツアープランニング:ART HAPPENS|サポート:Rafael Machado Fisioterapia
共同製作:クンステンフェスティバルデザール、PACT Zollverein, Kaserne Basel, ウィーン芸術週間、ユリダンス、Festival de la Cité Lausanne Passages Transfestival, Romaeuropa Festival and Teatro di Roma - Teatro Nazionale, フェスティバル・ドートンヌ・ア・パリ|謝辞:アレクサンドル・ベルフォル、スラミタ・コスタ、ジュリアナ・フランサ、アンドレ・オリヴェイラ、ワラス・フェレイラ、ジュリエット・シュルツ、マウリシオ・リマ、ペドロ・ベント、タミレス・カンジダ、デロ・パウロ、ディウリー・パトリック、レナ・サントス・デ・シケイラ、カミラ・ロシヤ、Centro Coreográfico da Cidade do Rio de Janeiro(アルノルド・ペレイラ・デ・ソウザ、アニタ・タンデタ、カミラ・モウラ、レナト・リンハレス、セシリア・リポル、アンドレア・カベラ)、Casa de Mistérios e Novidades

インキュベーション キョウト

主催:KYOTO EXPERIMENT、ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市、公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
助成:文化庁文化芸術振興費補助金(統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業(アートキャラバン2))|独立行政法人日本芸術文化振興会
事業名:JAPAN LIVE YELL project

アリス・リポル / Cia.REC

振付家、リオデジャネイロ生まれ。心理学専攻を経て、ダンスに重点を移す。リオデジャネイロの振付・身体機能訓練センターである Escola Angel Vianna を卒業後、振付家として活動を始める。ダンサーが自分の経験や内なる記憶を表現できる場を提供するリサーチを通して、コンテンポラリーダンスとブラジルのアーバンダンスを融合させる。REC と SUAVE の2つのコレクティブを主宰。世界各地のフェスティバルや劇場で作品を上演している。

Playful physical movements question invisible divisions

In a dance by six performers using everyday materials such as buckets, water, and soap bubbles, individual bodies layer in an acrobatic fashion and maintain their balance by clinging onto each other. These acts can be seen as representations of frustration and other emotions that occur in collaborations, mutual aid, and interpersonal relationships.

The word "lavagem" means "to clean" in Portuguese, and is also used to describe acts like money laundering and brainwashing. The work questions invisible divisions: identities pushed to the margins by antisocial forces and the sexism and racism maintained under the framework of national history; hierarchies between essential workers and those who reap the benefits, made globally salient with the coronavirus pandemic. And while considering these divisions, it asks what is it that needs to be "cleaned"?

Alice Ripoll is an artist who digs deep into her own locality and roots to convert political and social messages into unique forms of physical expression. We invite you to witness *Lavagem*, her latest work with Cia. REC—a group formed with young people from Rio de Janeiro's favelas (slums)—and her first performance staged in Japan.

Credits

Director: Alice Ripoll | Original idea: Alan Ferreira | Performers: Alan Ferreira, Hiltinho Fantástico, Katiany Correia, Rômulo Galvão, Tony Hewerton, Tamires Costa | Creation: Alan Ferreira, Hiltinho Fantástico, Katiany Correia, Rômulo Galvão, Tony Hewerton, Tuany Nascimento | Assistant Director (on tour): Renato Linhares | Production Director: Natasha Corbelino (Corbelino Cultural)
Production Assistant and Set Assistant: Thais Peixoto | Production Assistant: Milena Monteiro | Artistic Assistant: Laura Samy | Photos: Renato Mangolin
Set Design: Raquel Theo | Hair and Make-up: Cleber de Oliveira | Costume Design: Paula Ströher | Light Designer: Tomas Ribas | Tour Planning: ART HAPPENS | Supported by Rafael Machado Fisioterapia | Co-produced by Kunstfestivalsdesarts, PACT Zollverein, Kaserne Basel, Wiener Festwochen, Julidans, Festival de la Cité Lausanne, Passages Transfestival, Romaeuropa Festival and Teatro di Roma - Teatro Nazionale, Festival d'Automne à Paris. Special thanks to Alexandre Belfort, Sulamita Costa, Juliana França, André Oliveira, Wallace Ferreira, Juliete Schultz, Mauricio Lima, Pedro Bento, Tamires Candida, Dilo Paulo, Diewry Patrick, Lenna Santos de Siqueira, Camila Rocha, Centro Coreográfico da Cidade do Rio de Janeiro (Arnoldo Pereira de Souza, Anita Tandeta, Camila Moura, Renato Linhares, Cecilia Ripoll, Andrea Capella), Casa de Mistérios e Novidades

Incubation Kyoto

Organized by Kyoto Experiment, ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto City GEIDANKYO (Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations)
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council, "JAPAN LIVE YELL project"

Alice Ripoll / Cia.REC

Ripoll is a choreographer from Rio de Janeiro. She initially studied psychology before shifting her focus to dance. After graduating Escola Angel Vianna—a choreographic and motor function rehabilitation center, she started working as a choreographer. Her work combines contemporary dance and Brazilian urban dance through research that offers dancers space to represent their experiences and inner memories. She heads two collectives: REC and SUAVE. Her work has been performed at festivals and theaters around the world.

バック・トゥ・バック・シアター

影の獲物になる狩人

拠点：ジーロング（オーストラリア） 演劇 | 日本初演

Back to Back Theatre

The Shadow Whose Prey the Hunter Becomes

Based in Geelong, Australia Theater | Japan Premiere



©Jeff Busy

10.7 (Sat) 15:30
10.8 (Sun) 15:30 ★◆♥

- ★ ポストパフォーマンストーク / Post-show talk
- ◆ 感想シェアカフェ / Festival Share Cafe (p.17)
- ♡ 託児あり / Childcare Service (p.19)

60 min

12歳以上推奨
Recommended for age 12 and above.

ロームシアター京都 サウスホール
South Hall, ROHM Theatre Kyoto

英語(日本語・英語字幕あり)
English with Japanese and English surtitles

More Events
10.9 (Mon) バック・トゥ・バック・シアター ワークショップ(p.27)
Back to Back Theatre Workshop (p.31)

More Events
批評プロジェクト 2023(p.29)
Performing Arts Criticism Project 2023 (p.33)

#正しさ? #言語のまぜまぜ #言語の力
#correctness #power-of-language #speech-or-sound

"当事者"はあなたであり、
私でもある

知的障害のある俳優を中心に、インクルーシブシアターの先駆けとして30年以上にわたり活動するバック・トゥ・バック・シアター。世界で反響を呼ぶ同カンパニーを、関西で初紹介する。

舞台とはある市民集会。障害のある活動家が3人、人工知能の危険性に警鐘を鳴らすべく席についている。「このミーティングは、礼節を持って穏やかに進めなければいけません。みんなが互いを尊重しなければいけません。個人攻撃はしないこと。場を和やかに保ちましょう」。そして、活動家たちは語り出す。「大丈夫?」「何を言うんだっか思い出せないの」「こんな感じじゃない?—私たちは、障害がある人たちの集まりです……」「抑圧や理不尽と闘っています」「頭が真っ白だわ」。

コミカルにもシニカルにもとれる、障害のある当事者のやりとりは、自らの偏見・偏向こそが世界を救うための最大の障害になるという現実、そして、他者へのリアリティの欠如を浮き彫りにする。観客が突きつけられるのは、「正しさとは何か?」という問いかもしれない。

クレジット

作:マーク・ディーンス、マイケル・チャン、ブルース・グラッドウィン、サイモン・ラハーティ、サラ・メインウェアリング、スコット・プライス、ソニア・チューベン
演出:ブルース・グラッドウィン|出演:サイモン・ラハーティ、サラ・メインウェアリング、スコット・プライス|作曲:ルーク・ハワード・トリオーダニエル・ファルギア、ルーク・ハワード、ジョナサン・シオン|音響デザイン:ラクラン・キャリック|照明デザイン:アンドリュー・リビングストーン(bluebottle)|映像デザイン:リアン・ヒンクリー(lowercase)
衣裳デザイン:大谷汐|AIナレーション:ベリンダ・マクローリー|脚本監修:メリッサ・リーブス
クリエイティブ・ディベロップメント:マイケル・チャン、マーク・カフバートン、マーク・ディーンス、リアン・ヒンクリー、ブルース・グラッドウィン、サイモン・ラハーティ、ビビン・レイサム、アンドリュー・リビングストーン、サラ・メインウェアリング、ヴィクトリア・マーシャル、スコット・プライス、ブライアン・ティリー、ソニア・チューベン
舞台監督:アラナ・ホガード|音響エンジニア:ユージン・マッキノン|カンパニーマネージャー:エリン・ワトソン|プロダクションマネージャー:パオ・グアンサヴァン|ツアーマネージャー:ターニャ・ベネット|製作総指揮:ティム・スティッツ

本作は、キャリッジ・ワークス、世界演劇祭(テアター・デア・ヴェルト)Düsseldorf 2020、キアー財団、ティン・リード財団、アンソニー・コスター財団による共同委嘱として、そしてクリエイティブパートナーシップ・オーストラリアのPlus 1プログラム、ジーロング・アーツ・センター、アーツ・センター・メルボルン、メルボルン国際芸術フェスティバル、the Une Parkinson Foundation、パブリック・シアター(ニューヨーク)、アーツ・エマーソン(ボストン)の助成を受けて制作しました。本作の一部は、マサチューセッツ州で2019年に開催された、サンダンスTheatre Labで創作されました。

特別協力:オーストラリア大使館
助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(国際芸術交流支援))|独立行政法人日本芸術文化振興会
主催:KYOTO EXPERIMENT

バック・トゥ・バック・シアター

オーストラリアの地方都市ジーロングを拠点に30年以上活動。障害のあるユニークな俳優陣の思考や経験から、新しい形のコンテンポラリーパフォーマンスを構築し、すべての人に通じる社会的・政治的問題を提起し続けてきた。世界各地のコミュニティと積極的なコラボレーションも展開し、障害のある人々のソーシャルインクルージョンの向上や優れた芸術性に焦点を当て続けている。

This matter concerns you,
as it does me

Pioneers of inclusive theater Back to Back Theatre have been producing works for over 30 years that center actors with intellectual disabilities. This marks the first time this internationally renowned company is introduced to the Kansai region.

The theater work takes place at a public meeting, where three activists with disabilities participate to caution about the dangers of artificial intelligence. They say, "This should be a civil and calm meeting, everyone should respect each other, no personal attacks and keep everything nice." The activists continue: "Are you alright?" "I can't remember what I need to say." "Something like - 'We are a group of people with disabilities ...'" "Fighting oppression and injustice." "My mind's blank."

The interactions between these people with disabilities can be read as comical and cynical; they illuminate the reality that our prejudices and biases are the greatest hindrances to saving the world, as well as our lack of imagination concerning others' lives. This work confronts its audience with the question: what really is correct or right?

Credits

Authors: Mark Deans, Michael Chan, Bruce Gladwin, Simon Laherty, Sarah Mainwaring, Scott Price, Sonia Teuben | Director: Bruce Gladwin | Performers: Simon Laherty, Sarah Mainwaring, Scott Price | Composition: Luke Howard Trio - Daniel Farrugia, Luke Howard, Jonathon Zion | Sound Design: Lachlan Carrick | Lighting Design: Andrew Livingston (bluebottle) | Screen Design: Rhian Hinkley (lowercase) | Costume Design: Shio Otani | AI Voice Over: Belinda McClory | Script Consultant: Melissa Reeves | Creative Development: Michael Chan, Mark Cuthbertson, Mark Deans, Rhian Hinkley, Bruce Gladwin, Simon Laherty, Pippin Latham, Andrew Livingston, Sarah Mainwaring, Victoria Marshall, Scott Price, Brian Tilley, Sonia Teuben
Stage Manager: Alana Hoggart | Sound Engineer: Eugene MacKinnon
Company Manager: Erin Watson | Production Manager: Bao Ngo-uansavanh
Touring Producer: Tanya Bennett | Executive Producer: Tim Stitz

The Shadow Whose Prey the Hunter Becomes has been co-commissioned by Carriageworks, Theater der Welt, Düsseldorf 2020, the Keir Foundation, the Thyne Reid Foundation and The Anthony Costa Foundation, supported by Creative Partnerships Australia through Plus 1, with development support from the Geelong Arts Centre, Arts Centre Melbourne, Melbourne International Arts Festival, the Une Parkinson Foundation, The Public Theater (New York City) and ArtsEmerson (Boston).
The Shadow Whose Prey the Hunter Becomes was developed, in part, at the 2019 Sundance Theatre Lab at MASS MoCA.

With the special cooperation of: Australian Embassy Tokyo
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council.
Presented by Kyoto Experiment

Back to Back Theatre

Based in Geelong, Australia, Back to Back Theatre has been creating work for over thirty years. The company creates new forms of contemporary performance imagined from the minds and experiences of a unique ensemble of actors with a disability, giving voice to social and political issues that speak to all people. They collaborate with communities around the world, with a focus on artistic excellence and elevated social inclusion for people with disabilities.



山内祥太&マキ・ウエダ

汗と油のチーズのように酸っぱいジュース

拠点：神奈川／石垣島（日本） パフォーマンス | 新作

Shota Yamauchi & Maki Ueda

Sweaty-oily Sour-cheesy Juice

Based in Kanagawa & Ishigaki Island, Japan Performance | New Work



©Shota Yamauchi

10.7 (Sat) 18:00
10.8 (Sun) 13:00 / 18:00
10.9 (Mon) 15:00 ★

★ポストパフォーマンストーク / Post-show talk

60-90 min (予定 | TBC)

上演中、演出の一部として会場内に匂いを発生させます。予めご了承ください。本作品は、チケット購入者を対象として、希望される方に作品の一部にご参加いただけます。詳細はウェブサイトでご確認ください。

Please note that scents will be diffused throughout the space during the performance. It is possible for ticket holders to participate in a part of this work. Please see our website for more details.



THEATRE E9 KYOTO

日本語(英語字幕あり)
Japanese with English surtitles

#嗅覚 #あなたも参加できます #初舞台作品
#人間パフューム
#love-juice #gross #human-perfume #participatory

愛する“匂い”と身体が 交じり合うとき

ステージ上には、ガラス製の蒸留器と大型水槽が細いチューブによって繋ぎ合わされた舞台装置がある。これは人間の体臭を抽出するための蒸留装置だ。

登場人物は蒸留器を使って、観客から集めた体臭を香水へと作り変え、それを水槽の中で様々な香料と混ぜ合わせることで“匂いのジュース”を作り上げる。そして、この匂いのジュースに身体を浸し、匂いと戯れ、愛する匂いそのものになろうと試みる——。劇場に立ち込める、えも言われぬ匂い。作品の進行と共に、劇場に漂う匂いは徐々に変化してゆく。最後には、一体どんな匂いが劇場を覆っているのだろうか。

デジタル技術と身体表現を掛け合わせる次世代メディアアーティスト、山内祥太の新作は自身初の舞台作品だ。2021年の作品《舞姫》で、人間と仮想空間上のゴリラとの擬似的なセックスを表現し、人がもつ動物的な感覚としての触覚を模索した山内。その興味は、感情や記憶と結びつく“匂い”に派生し、嗅覚アーティストであるマキ・ウエダとの協働で本作へと結実する。

観客から集められた人間の匂いと、愛する匂いのエピソードが共鳴することで、匂いの楽園が誕生する。その光景は観客に人間の理性と動物性とは、嗅覚を通して複雑に混在する瞬間を見せてくれるだろう。

クレジット

構成・演出：山内祥太、マキ・ウエダ | 出演：小倉笑、藤田彩佳、三好彼流
振付アドバイザー：振子びじん | 音楽：小松千倫 | 衣装協力：ENFÖLD, Kurage
舞台監督：北方こだち | 照明：渡辺佳奈 | 音響：林実菜
制作：武田侑子、奥山愛菜 / 木元太郎 (THEATRE E9 KYOTO)

製作：山内祥太
共同製作：KYOTO EXPERIMENT
特別協力：田中利孝
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(国際芸術交流支援)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
主催：KYOTO EXPERIMENT

山内祥太
1992年岐阜県生まれ。インターネットが普及した1995年以降のリアリティと共に育った世代として、自己と世界の関係性や、自分の認識する世界と現実の間にある裂け目を、映像やパフォーマンス、3D印刷、VRなど、多彩なメディアを通して表現する。

マキ・ウエダ
嗅覚アーティスト。1974年東京生まれ。嗅覚アートという新ジャンルを開拓し、牽引する世界的アーティスト。2009年よりオランダ王立美術学校 & 音楽院の学部間学科Art Scienceや、ロッテルダム美大ウィレム・デ・コーニングアカデミー等で観をとる。2022年、世界的な嗅覚アートの殿堂、アート・アンド・オルファクショナル・アワード サダキチ・カテゴリーで最優秀賞を受賞。

When the “Smell of Love” intertwines with the body

Atop the stage sits a device that uses thin tubes to combine a glass distiller and a large water tank—it is a distillation machine for extracting the body odor of humans.

Using the distiller, the performers transform body odors collected from audience members into a perfume which is then blended with various fragrances in the large water tank to create “smell juice”. The performers soak themselves in the juice, playing with the smell and attempting to become the “smell of love” itself. An extraordinary indescribable scent lingers in the air. As the work progresses, the scents in the theater gradually change. What smell will envelop the venue by the end?

Emerging contemporary media artist Shota Yamauchi works at the intersection of digital technology and physical expression; this new piece is his theater debut. In his 2021 *Maihime*, Yamauchi explored animalistic tendencies in a human's sense of touch, depicting a pseudo-sexual encounter between a human and a virtual gorilla in virtual space. His curiosity has extended into the realm of “smell,” which is closely tied to emotion and memory, leading to a collaboration with olfactory artist Maki Ueda for this new work.

A paradise of smells is born from mixing the body odors collected from audience members and various “smells of love.” Through the performance, encounter a moment when human reason and animalistic nature intricately coexist through the sense of smell.

Credits

Concept and Direction: Shota Yamauchi, Maki Ueda
Performers: Emi Ogura, Ayaka Fujita, Karu Miyoshi
Choreography Advisor: Pijin Neji | Music: Kazumichi Komatsu
Costume provided by ENFÖLD, Kurage
Stage Manager: Kodachi Kitagata | Lighting: Kana Watanabe
Sound: Mina Hayashi
Production Coordinators: Yuko Takeda, Aina Okuyama / Taro Kimoto (THEATRE E9 KYOTO)

Produced by Shota Yamauchi
Co-produced by Kyoto Experiment
With the special cooperation of Toshihiko Tanaka
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council
Presented by Kyoto Experiment

Shota Yamauchi
Born in 1992 in Gifu. As part of the generation that grew up with a post-1995, internet version of reality, Yamauchi seeks to illuminate the relationship between the self and the world, and rifts between the world we perceive and reality through a range of different media such as video, performance, 3D printing and VR.

Maki Ueda
Ueda is an olfactory artist born in Tokyo in 1974. She is an internationally-renowned artist pioneering and leading a new genre of art called olfactory art. Since 2009 she teaches at The ArtScience Interfaculty at The Royal Academy of Art and the Royal Conservatoire in The Hague, Willem de Kooning Academie among others. She won the Art and Olfaction Awards Sadakichi category in 2022.



中間アヤカ

踊場伝説

拠点：神戸（日本） ダンス | 新作

Ayaka Nakama The Odoriba Legend

Based in Kobe, Japan Dance | New Work



48

🕒 10.9 (Mon)-10.14 (Sat) 11:00-20:00
10.15 (Sun) 11:00-18:00
※休演日/No performance: 10.12 (Thu)

中間アヤカによるレパートリー作品の上演のほか、上記期間内にさまざまなイベントが展開されます。入退場自由。
各日の公演・展示のスケジュール詳細はウェブサイトへ。

In addition to the performance of Ayaka Nakama's repertory work various events will be held during the above period.
Re-entry to the performance at any time.
Please see the festival website for a detailed day by day exhibition and performance schedule.



📍 養正市営住宅6棟跡
Site of Yosei Municipal Housing Building 6

⚠️ 雨天決行。雨具は各自でお持ちください。荒天などの影響により、公演内容を変更または中止する場合があります。会場にはいくつか椅子をご用意しますが、立見となる可能性もございます。各自で持ち運び可能な椅子をお持ちいただいても構いません。
This work will go ahead rain or shine! Please bring your own rain gear. Please note performances may be changed or canceled due to weather conditions. The festival will prepare some seating at the venue however you may be required to stand if seating is full. Audiences are also welcome to bring their own portable chair.

#伝説のアーカイブ #新たな伝説 #オリジナルとは
#archive-dance #festival-in-festival
#how-is-history-made

現代における「伝説」は、 どのように生まれるか？

関西コンテンポラリーダンス界において生み出され、語り継がれてきた、ダンスにまつわる数々の「伝説」=不確かな異常体験。近年、国際的なフェスティバルでの活躍もめざましい中間アヤカが手がける本作は、史実には残らず口伝でしか掬い取れない、そうした現象の一端を起点としている。

クリエイションは、ある種の社会学的アプローチのもと進められている。関西ダンス史における伝説を知る人々数名への聞き取り、当時の社会情勢や踊りに関する伝説のリサーチ、年表等の制作を通じて「伝説」の構造をひもとき、現象のアーカイブ化、展示やパフォーマンスへと再構築していくというものだ。今回、京都市内の空き地に仮設される「劇場」がその発表の場となる。

ある地域、あるコミュニティにおいて、空間や時間さえも超えて人々に思い起こされる「ダンス」はどのように可能か。大きな試みの初動を、まずは目撃してほしい。

クレジット

構成・出演・レパートリー作品振付：中間アヤカ | ドラマトゥルク：藤澤智徳
インタビュイー：内山大、きたまり、冬樹、土師洋之、村上和司、水野立子、
Monochrome Circus | セノグラフィ：ガラージュ（渡辺瑞帆、瀬尾憲司、
小田切駿） | 演奏：狼バンド | 舞台監督：大田和司 | 照明：藤原康弘
音響：西川文章 | 新作ダンス振付：冬樹 | 「RED MAN today」振付：村上和司
「RED MAN today」出演：遠藤リョウノスケ、村上和司
映像作品出演：松田ミネタカ、石山樹野 | 記録・機関紙発行：山田航大
施工協力：稲永英俊 | 制作：柴田聡子、眞鍋準介

協力：かもがわデルタフェスティバル、京都学生演劇祭2023、
NPO法人DANCE BOX

製作：中間アヤカ

共同製作：KYOTO EXPERIMENT

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（国際芸術交流支援）） | 独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造 [舞台芸術を通して考える身体/歴史/アイデンティティ]、公益財団法人セゾン文化財団
主催：KYOTO EXPERIMENT

中間アヤカ

1992年別府生まれ、ダンサー。英国Rambert School of Ballet and Contemporary Danceで学んだ後、文化庁・NPO法人DANCE BOX主催「国内ダンス留学@神戸」1期に奨学生として参加。これまでに黒沢美香、木村玲奈、contact Gonzo、チェルフィッチュらの作品に出演。2019年にArtTheater dB Kobeにて初演した中間アヤカ&コレオグラフィ『フリーウェイ・ダンス』は、国内外で上演を続ける。第16回(2022)神戸長田文化奨励賞受賞、セゾン文化財団2023年度セゾン・フェロー。

How are modern legends born?

Numerous legends (unconfirmable anomalous experiences) related to dance have been created and passed down within Kansai's contemporary dance scene. This year, internationally active Ayaka Nakama presents a new piece which takes as its starting point these phenomena, which, left undocumented in history, can only be captured through oral traditions.

This piece is created through a kind of sociological approach: interviewing people familiar with the legends of Kansai dance history, researching the social climate of the time and the legends around dance, deconstructing these legends by charting a chronology, archiving the phenomena, and reconstructing exhibitions and performances. The work is presented at Gekijo, a temporary theater constructed on a vacant lot in Kyoto City.

How can a dance transcend space and time and be remembered by a certain community or people living in a particular region? We hope you'll join us to witness the beginnings of this huge experiment!

Credits

Composition, Performance and Choreography for Repertory Piece: Ayaka Nakama
Dramaturg: Tomonori Fujisawa | Interviewees: Hajime Uchiyama, Kitamari, Fuyuki, Hiroyuki Haji, Kazushi Murakami, Ritsuko Mizuno and Monochrome Circus | Scenography: Garage (Mizuho Watanabe, Kenji Seo, Hayao Odagiri) | Music Performance: Wolves Band | Stage Management: Kazushi Ota | Lighting: Yasuhiro Fujiwara | Sound: Bunsho Nishikawa
Choreography for a new dance work: Fuyuki
Choreography for "RED MAN today" : Kazushi Murakami
Performance for "RED MAN today" : Ryonosuke Endo, Kazushi Murakami
Performance in video works: Minetaka Matsuda, Kino Ishiyama
Archive and Official Publication: Kota Yamada
Cooperation in construction: Hidetoshi Inanaga
Production Management: Satoko Shibata
Production Coordinator: Shunsuke Manabe

In co-operation with Kamogawa Delta Festival, Kyoto Student Theater Festival 2023 and DANCE BOX

Produced by Ayaka Nakama

Co-produced by Kyoto Experiment

Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council, Japan Foundation for Regional Art Activities [Thinking about the body, history and identity through the performing arts], The Saison Foundation

Presented by Kyoto Experiment

Ayaka Nakama

Nakama is a dancer born in Beppu in 1992. After training at the Rambert School of Ballet and Contemporary Dance she took part as a scholarship student in a dance study program in Kobe organized by the Agency for Cultural Affairs and NPO Dance Box. She has worked with Mika Kurosawa, Reina Kimura, contact Gonzo and Toshiki Okada (chelfitsch) among others. Her work Freeway Dance (2019), which premiered at Dance Box continues to be performed in Japan and abroad. In 2022, she won the 16th Kobe Nagata Culture Encouragement Prize. She is a Saison Foundation 'Saison Fellow I' from 2022-2023.

ルース・チャイルズ&ルシнда・チャイルズ

ルシнда・チャイルズ 1970年代初期作品集:

Calico Mingling, Katema, Reclining Rondo, Particular Reel

拠点: ジュネーヴ (スイス)、ニューヨーク (アメリカ) ダンス | 日本初演

Ruth Childs & Lucinda Childs

Lucinda Childs 1970s Early Works:

Calico Mingling, Katema, Reclining Rondo, Particular Reel

Based in Geneva, Switzerland & New York, U.S. Dance | Japan Premiere



©Mehdi Benkler

🕒 10.13 (Fri) 20:15
10.14 (Sat) 20:15
10.15 (Sun) 20:15

🕒 65 min

⚠️ 開演後は途中入場不可。12歳以上推奨。
Audiences may not enter after the performance has started. Recommended for ages 12 and above.

📍 京都市京セラ美術館 中央ホール
Central Hall, Kyoto City KYOCERA
Museum of Art

👉 More Events
10.16 (Mon) ルース・チャイルズワークショップ (p.28)
Ruth Childs Workshop (p.32)

#伝説のアーカイブ #ポストモダンダンス #ミニマリズム
#archive-dance #postmodern-dance #minimalism

歴史を理解する最善の方法は、 起こったことを踊ること

ポストモダンダンスの源流を、伝説となった世代から現代へ継承することはできるのか——?KYOTO EXPERIMENT 2022で始動した、ヴァン クリーフ & アーペル「Dance Reflections」とのコラボレーションプロジェクト。第2弾はポストモダンダンスの巨匠振付家、ルシнда・チャイルズの作品を現代に蘇らせる、姪で新進気鋭の振付家、ルース・チャイルズを招聘する。

2015年、ルシндаは1960年代の代表的なソロ3作品をルースに託した。その公演で成功を収めた2年後、ルースは引き続き1970年代に創作された4つのパフォーマンスを原作とし、叔母の振付に新たな命を吹き込む。これらはルシндаが好んで採用した創作プロセスにおける要素——「スコアの使用」「空間における軌跡」「音楽を伴わないリズム」を体現するものだ。この4作品は1970年代以降さほど上演されず、そのラディカルリズムは次代に享受されてこなかった。継承を試みたルースは綴る。「私自身とほかのダンサーたちにとって、理解するための最善の方法は、起こったことを踊ること。観客にとっては、起こったことを見ること、そして聞くことです」。

クレジット

Katema, Particular Reel
振付: ルシнда・チャイルズ | ダンス: ルース・チャイルズ | アシスタント: タイ・ブーマーシャイン | テクニカルディレクション&照明デザイン: ジョアナ・オリヴェイラ | 衣裳: セヴェリーヌ・ベッソン

Calico Mingling, Reclining Rondo

振付: ルシнда・チャイルズ | ダンス: ルース・チャイルズ、マース・クルメンナッハ、ステファニー・バイユ、ポーリン・ヴァッセルマン | アシスタント: タイ・ブーマーシャイン | テクニカルディレクション&照明デザイン: ジョアナ・オリヴェイラ | 衣裳: セヴェリーヌ・ベッソン | 製作: Scarlett's | 委託製作・運営・宣伝: リセ・ルクレール、セシリア・ルブラーノ | 共同製作: La Bâtie Festival de Genève, Arsenic - Centre d'art scénique contemporain, ローザンヌ

助成: ジュネーヴ市、プロ・ヘルヴェティア・スイス・アーツ・カウンシル、Fondation Suisse des Artistes Interprètes SIS, Fond Mécénat SIG, ネスレ芸術財団、スタンリー・トーマス・ジョンソン財団、エルンスト・ゲナー基金、Corodis、ロトリー・ロマン、ジュネーヴ州、Pourcent culturel Migros

協力: 京都市京セラ美術館
謝辞: セルジュ・ローラン (ヴァン クリーフ & アーペル ダンス & 文化プログラム ディレクター) 京都公演助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (国際芸術交流支援)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
主催: KYOTO EXPERIMENT, Dance Reflections by ヴァン クリーフ & アーペル

ルース・チャイルズ

ダンサー・振付家。1984年ロンドン生まれ。アメリカでダンスと音楽を学んだ後、ジュネーブに移住し、研鑽を積み、La RibotやGilles Jobinなどの振付家とともに活動を始める。2014年に自身のカンパニーScarlett'sを設立。2015年からは、叔母である振付家ルシнда・チャイルズの初期作品の再演プロジェクトに取り組んでいる。現在、CCN2-Centre chorégraphique national de Grenobleのアソシエイトアーティスト(2023-2024)。

ルシнда・チャイルズ

1940年生まれ。1963年にニューヨークのジャドソン・ダンス・シアターで振付家としての活動を開始。マース・カニングハムの薫陶を受け、1970年代のアメリカのポストモダンダンスをリードする一人となる。1973年に自身のカンパニーを設立以来、多くの作曲家やビジュアル・アーティスト、世界有数のダンスカンパニー、オペラハウスとのコラボレーションを行う。近年の受賞に、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞やthe Samuel J. Scrippsなどがある。

The best way to understand dance history is to dance what happened

Is it possible to pass down the origins of post-modern dance from its legendary generation to a contemporary one? For the second year of this collaboration project with Dance Reflections by Van Cleef & Arpels—which began at Kyoto Experiment 2022—we invite the up-and-coming choreographer Ruth Childs, who has been working on reprising pieces by her aunt, master choreographer Lucinda Childs.

In 2015 Lucinda Childs passed down three of her iconic solos from the 1960s to Ruth. Two years after this first successful collaboration, Ruth Childs continues to breathe new life into her aunt's choreographies through four performances originally created in the 1970s. These works embody three cornerstones of the creative process espoused by the pioneer of post-modern dance: use of a score, a spatial itinerary and rhythm established without music.

These radical works have been rarely performed since the 70s, meaning that the generation that followed was unable to appreciate their unique characteristics. Ruth writes: "For myself and other dancers the best way to understand is to dance what happened, and for the audience the best way to understand is to see and hear what happened."

Credits

Katema, Particular Reel
Choreography: Lucinda Childs | Dance: Ruth Childs | Assistant: Ty Boomershine
Technical Direction & Light Design: Joana Oliveira | Costumes: Severine Besson

Calico Mingling, Reclining Rondo

Choreography: Lucinda Childs | Dance: Ruth Childs, Marthe Krummenacher, Stéphanie Bayle, and Pauline Wassermann | Assistant: Ty Boomershine
Technical Direction & Light Design: Joana Oliveira | Costumes: Severine Besson
Production: Scarlett's | Delegated production, Administration, and Touring: Lise Leclerc and Cécilia Lubrano | Co-production by La Bâtie Festival de Genève, Arsenic-Centre d'art scénique contemporain and Lausanne

With support from City of Geneva, Swiss Arts Council Pro Helvetia, Fondation Suisse des Artistes Interprètes SIS, Fond Mécénat SIG, Nestlé Foundation for art, Stanley Thomas Johnson Foundation, Ernst Göhner foundation, Corodis, Loterie Romande, State of Geneva and Pourcent culturel Migros

In co-operation with Kyoto City KYOCERA Museum of Art | Special acknowledgement to Serge Laurent (Van Cleef & Arpels' Director of Dance & Culture Programs) | Performance in Kyoto supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council
Co-presented by Kyoto Experiment and Dance Reflections by Van Cleef & Arpels

Ruth Childs

Dancer and choreographer born in 1984 in London. After studying dance and music in the U.S. Ruth moved to Geneva to finish her training and work with choreographers including La Ribot and Gilles Jobin. In 2014 she founded her own company Scarlett's. Since 2015, she is working on a revival project of the early works of her aunt, the choreographer Lucinda Childs. Ruth is currently the associate artist at CCN2-Centre chorégraphique national de Grenoble (2023-2024).

Lucinda Childs

Born in 1940, Lucinda Childs began her choreographic career in 1963 at the Judson Dance Theater in New York. Trained by Merce Cunningham, she became one of the leaders of American postmodern dance in the 1970s. She created her own company in 1973 and has collaborated with many composers and visual artists as well as major dance companies and opera houses. Recently she has received awards such as The Golden Lion of the Venice Biennale and the Samuel J. Scripps / American Dance Festival Award.



DANCE REFLECTIONS BY VAN CLEEF & ARPELS
http://www.dancereflections-vancleefarpels.com/en

ダイナ・ミシェル

MIKE

拠点：モントリオール（カナダ） パフォーマンス | 新作

Dana Michel

MIKE

Based in Montreal, Canada Performance | New Work



©Carla Schleiffer

10.20 (Fri) 18:00 ★
10.21 (Sat) 18:00 ◆
10.22 (Sun) 16:00 ♡

★ ポスト・パフォーマンストーク / Post-show talk
◆ 感想シェアカフェ / Festival Share Cafe (p.17)
♡ 託児あり / Childcare Service (p.19)

180 min

上演中の入退場自由。12歳以下は保護者の同伴が必要。
Re-entry to the performance at any time. Audiences aged 12 and under must be accompanied by an adult.

京都芸術センター 講堂
Auditorium, KYOTO ART CENTER

#仕事の身振り #アイデンティティのまぜまぜ #仕事と人生
#life&work #individual&society
#how-is-history-made

人生を「仕事」に費やすなかで、「自分」はどう存在し得るか

彫刻、ヒップホップ、映像表現、心理学などから影響を受け、独自のダンス言語によってさまざまな潜在的な社会慣習を打ち破る振付家、ダイナ・ミシェル。新作にして日本初となるライブパフォーマンスは、誰もが人生の大半を費やす「仕事」と個のアイデンティティ——ワーク・ライフ・バランスをテーマとする。膨大なタスクは本来の「自分」を追いやり、個は「仕事をする私」としてあらざるを得ない。では、人生のなかに「自分」はどれだけ存在するのだろうか？

2022年には城崎・京都で滞在制作を行い、多様な現場で仕事に従事する人々の姿、個々の信念や精神性がどのように構築されるのかを考察。そのプロセスを経て、自身の身体と「仕事」にまつわるオブジェクトを用い、即興的なパフォーマンスとして結実するダンス作品は、観客の目にいかに映るか。出入り自由の空間で、3時間にわたり展開される身体表現の迫力を体感してほしい。

クレジット

創作・出演：ダイナ・ミシェル | アーティストック・アクティベーター：ビバ・デローム、エリー・フューリー、ピーター・ジェームス、ハイディ・ルイ、トレイシー・モーリス、ロズコ・ミシェル、カーリン・パーシル、ヨアン・ソラン | 舞台美術コンサルタント、テクニカル・ディレクション：ロマン・ギエ | 音響コンサルタント：ダビッド・ドゥリュイ
製作：SCORP CORPS - ビバ・デローム、ダイナ・ミシェル | ツアーマネジメント：Key Performance - アンナ・スクニカ、クン・フォンオヴ | 共同製作：ARSENIC - Centre d'art scénique contemporain, Centre national des Arts, フェスティバル・トランスアメリック、ユリダンス、クンステンフェスティバルデザール、MDT、モンペリエ・ダンス、ムービング・イン・ノーベンバー、Wexner Center for the Arts of The Ohio State University in Columbus
滞在制作：Alkantara, ANTI Festival, Centre national des Arts, 城崎国際アートセンター、KYOTO EXPERIMENT、クンステンフェスティバルデザール、フランクフルト・ムゾントゥム劇場、Montpellier Danse résidence de création à l'Agora, cité internationale de la danse (助成：BNPパリバ財団)、RIMI/IMIR SceneKunst, Shedhalle (協力：Tanzhaus Zürich、在スイス・カナダ大使館)、The Chocolate Factory
助成：カナダ・カウンシル、ケベック・アーツカウンシル、モントリオール・アーツカウンシル

京都公演協力：ケベック州政府在日事務所
京都公演助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（国際芸術交流支援））| 独立行政法人日本芸術文化振興会
主催：KYOTO EXPERIMENT

ダイナ・ミシェル

振付家・ライブアーティスト。1976年カナダ、オタワ生まれ。20代後半で、コンコーディア大学の BFA プログラムにてコンテンポラリーダンスを学ぶ。それ以前は、マーケティングエグゼクティブ、競技ランナー、フットボール選手としても活躍した。2014年のインパルスダンス（ウィーン）にて Prix Jardin d'Europe、2017年のヴェネツィア・ビエンナーレの innovation in Dance 部門で銀獅子賞受賞など、受賞多数。2023年、カナダにおけるダンスへの顕著な貢献が認められ、カナダ・カウンシルのジャクリン・ルミュー賞を受賞。

How can the "self" exist amid a life dedicated to "work"?

Influenced by the likes of sculpture, electronica, cinematography, and psychology, Dana Michel is a choreographer who disrupts various social conventions through her own unique physical language. Her latest work and first live performance in Japan focuses on the theme of work-life balance—exploring the relation between work, which takes up the majority of everyone's life, and individual identity.

Endless work tasks push the real "self" into a corner and force the individual to be a "working self." How many "selves," then, exist within ourselves? In 2022, Michel carried out a residency in Kinosaki and Kyoto in which she examined people working in a diverse range of fields to see how individual beliefs and spirituality are constructed.

MIKE takes shape as an improvisational performance through Michel's application of this research process and use of her own body and objects related to "work." The piece is performed in a space, where audience members can freely come and go. Experience the power of physical expression that unravels through this three-hour performance.

Credits

Created and Performed by Dana Michel | Artistic Activators: Viva Delorme, Ellen Furey, Peter James, Heidi Louis, Tracy Maurice, Roscoe Michel, Karlyn Percil, Yoan Sorin | Scenographic Consultant and Technical Direction: Romain Guillet | Sound Consultant: David Drury | Production: SCORP CORPS - Viva Delorme, Dana Michel | Distribution: Key Performance - Anna Skonecka, Koen Vanhove | Co-produced by ARSENIC - Centre d'art scénique contemporain, Centre national des Arts, Festival TransAmériques, Julidans Amsterdam, Kunstenfestivaldesarts, MDT, Montpellier Danse, Moving in November, Wexner Center for the Arts of The Ohio State University in Columbus
Creative Residencies: Alkantara, ANTI Festival, Centre national des Arts, Kinosaki International Arts Center and Kyoto Experiment, Kunstenfestivaldesarts, Künstlerhaus Mousonturm, Montpellier Danse résidence de création à l'Agora, cité internationale de la danse with the support of BNP Paribas Foundation, RIMI/IMIR SceneKunst, Shedhalle with the kind support of Tanzhaus Zürich and the Embassy of Canada to Switzerland, The Chocolate Factory

The creation of this work is being made possible thanks to the financial support of Canada Council for the Arts, Conseil des Arts et des Lettres du Québec, Ministère des Relations internationales et de la Francophonie and Conseil des Arts de Montréal.

Performance in Kyoto in co-operation with Délégation générale du Québec à Tokyo
Performance in Kyoto supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council
Presented by Kyoto Experiment

Dana Michel

Born in Ottawa, Canada in 1976, Michel is a choreographer and live artist. Before graduating from the BFA program in Contemporary Dance at Concordia University in her late twenties, Michel was a marketing executive and a competitive runner and football player. She has received numerous awards including the ImpulsTanz Award (Vienna) in 2014 and the Silver Lion for Innovation in Dance at the Venice Biennale in 2017. In 2023 she received the Canada Council for the Arts Jacqueline Lemieux prize for her outstanding contribution to dance in Canada.



Canada Council for the Arts
Conseil des arts du Canada



Québec

マリアーノ・ペンソッティ / Grupo Marea

LOS AÑOS (歳月)

拠点：ブエノスアイレス (アルゼンチン) 演劇 | 日本初演

Mariano Pensotti / Grupo Marea

LOS AÑOS (THE YEARS)

Based in Buenos Aires, Argentina Theater | Japan Premiere



©Isabel Machado Rios

10.21 (Sat) 14:00 ★
10.22 (Sun) 13:00 ◆♡

★ポスト・パフォーマンストーク / Post-show talk
◆ 感想シェアカフェ / Festival Share Cafe (p.17)
♡ 託児あり / Childcare Service (p.19)

105 min

未就学児入場不可
No admission for preschoolers.

京都芸術劇場 春秋座
Kyoto Art Theater Shunjuza

スペイン語 (日本語・英語字幕あり)
Spanish with Japanese and English surtitles

#世代のまぜまぜ #必見の舞台美術 #仕事と人生
#個人と社会
#life&work #individual&society #how-is-history-made

理想と現実、未来と現在は、常に隣り合わせにある

2020年と2050年。2つの時間軸がひとつの舞台の上で映画の画面割りのように現れ、同時に進行していく。一方は2020年。主人公のマヌエルは、貧困地区の少年をとらえたドキュメンタリー映画で脚光を浴び、そのキャリアを飛躍させていく。もう一方は2050年。長く暮らした海外からブエノスアイレスへと戻ってきたマヌエル。そこで、過去にうまくいかなかった人々や場所との関係を再構築しようと試みるのだが……。

本作に描かれるのは、おかしく、そして悲しいひとりの男の人生だ。あるいは、観客席に座る私たちの世界に引き寄せるとしたら、私(たち)が「こうなりたい」と思う自分と、実際に私(たち)がどうなったかの間にある“致命的な違い”を描いたとも言えるだろう。

大掛かりなセットや緻密な会話構成で、演劇の構造を幻想的なフィクションへと昇華するマリアーノ・ペンソッティ。世界30都市以上で公演を行ってきた屈指の劇作家・演出家が、日本で初の劇場公演を行う。その作品世界をじっくりと堪能したい。

クレジット

テキスト・演出: マリアーノ・ペンソッティ | 出演: マルセロ・スビオット、マラ・ベステリ、バルバラ・マソー、パコ・ゴリス、ジュリアン・ケック | ミュージシャン: ディエゴ・バイナー | 美術・衣装デザイン: マリアナ・ティランテ | 音楽: ディエゴ・バイナー | アーティストブック・プロダクション: フロレンシア・ヴァッサー | 照明: デイヴィッド・セルデス | 映像: マルティン・ボリーニ | サウンドエンジニア: エルネスト・ファラ | 舞台アシスタント: ファン・フランシスコ・レイト | 大道具: ゴンサロ・コルドバ・エステベス | 照明操作: ファクンド・ダビド | 音響操作: ガブリエル・ブッソ | ドラマトゥルク: アルヨッシャ・ベグリッヒ | ドラマトゥルク (ミュンヘン・カンマーシュピール): マルティン・バルデス=スタウバー

『LOS AÑOS (歳月)』はルール・トリエンナーレ、ミュンヘン・カンマーシュピール、HAU Hebbel am Ufer劇場、フランクフルト・ムントゥルク劇場、ブエノスアイレス市シアター・コンプレックスとの共同製作です。
助成: ゲーテ・インスティトゥート

<ドキュメンタリー映画>

テキスト・演出: マリアーノ・ペンソッティ | アートディレクション: マリアナ・ティランテ | 製作総指揮: フロレンシア・ヴァッサー
出演: デミアン・ビジャヌエバ・バレラ (子役)
キャスティング・子役指導: マリア・ラウラ・ベルチ | セットコーチ: ビクトリア・アンジェリ | 撮影監督: アルミン・マルケジーニ・ヴァイムラ | カメラマン: ビクトリア・ベレーダ | 照明技術者: アグスティン・コルドバ | 演出助手&編集: イグナシオ・ラゴネ | 制作責任者: ナターシャ・グルフインケル | 制作チーム: コスタンザ・レジェンド、ルシア・デルラシャ | アートチーム: ソフィア・エリオスノフ、ロミーナ・サントルソラ | カラー: HD Argentina

日本語字幕翻訳: 岡本淳子 (大阪大学大学院人文学研究科外国語専攻准教授)
京都公演助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (国際芸術交流支援)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
後援: アルゼンチン共和国大使館
主催: KYOTO EXPERIMENT、京都芸術大学 舞台芸術研究センター

マリアーノ・ペンソッティ / Grupo Marea

アルゼンチンの作家・演出家。1973年生まれ。ブエノスアイレス、スペイン、イタリアでビジュアルアーツと演劇を学び、2005年にGrupo Mareaを共同設立。自らテキストを執筆し、演劇作品および、虚構と現実の対比を目的とした公共空間におけるサイトスペシフィックなパフォーマンス作品を並行して発表。近年の作品に本作『LOS AÑOS』(ルール、2021)のほか、『La Obra』(ウィーン、2023)や『El Público』(アテネ、2019)などがある。世界的に名高い演出家の一人で、世界30以上の都市で上演を行う。

Ideal and reality, future and present, always co-existent

Two timelines—the 2020s and the 2050s—appear on stage like a cinematic split screen and progress simultaneously. In the 2020s the protagonist Manuel garners career-advancing attention for his documentary that portrays a young boy in the slums. In the 2050s Manuel returns to Buenos Aires after living abroad for many years and attempts to rebuild his fraught relationships with various people and places.

The work depicts the humorous and sad life of Manuel—or, to relate it closer to the audience's world, the "vital difference" between what we envision for ourselves and how our realities actually unfold.

Mariano Pensotti is an artist who channels theatrical structure into a kind of wondrous fiction through his use of large-scale sets and intricately crafted dialogue. He has presented his work in over thirty cities, and now stages his first full-scale theatrical performance in Japan. Come revel in the vision of one of the world's finest contemporary playwrights and directors.

Credits

Text and Direction: Mariano Pensotti | Cast: Marcelo Subiotto, Mara Bestelli, Bárbara Masso, Paco Gorriiz, Julian Keck | Musician: Diego Vainer | Set and Costume Design: Mariana Tirantte | Music: Diego Vainer | Artistic Production: Florencia Wasser | Light Design: David Seldes | Video: Martín Borini | Sound Engineer: Ernesto Fara | Stage Assistance: Juan Francisco Reato | Stage Setup: Gonzalo Córdoba Estévez | Light Operation: Facundo David | Sound Operation: Gabriel Busso | Dramaturgy: Aljoscha Begrich | Dramaturgy Münchner Kammerspiele: Martín Valdés-Stauber

LOS AÑOS is a Coproduction between Ruhrtriennale, Münchner Kammerspiele, HAU Hebbel am Ufer, Künstlerhaus Mousontorum and Complejo Teatral de Buenos Aires.
Supported by Goethe Institut

<Documentary Realization>

Text & Direction: Mariano Pensotti | Art Direction: Mariana Tirantte | General Production: Florencia Wasser | Cast: Demian Villanueva Barrera (kid) | Casting / Coach kid: María Laura Berch | Coach in set: Victoria Angeli | Cinematography / DOP: Armin Marchesini Wehmüller | Camera Operator: Victoria Pereda | Gaffer: Agustín Córdoba | Direction Assistance & Edition: Ignacio Ragone | Head of Production: Natasha Gurfinkel | Production Team: Costanza Leyenda, Lucía Dellacha | Art Team: Sofía Elisonoff, Romina Santorsola | Color: HD Argentina

Japanese surtitles: Junko Okamoto (Associate Professor, Division of Foreign Studies, Graduate School of Humanities, Osaka University)
Performance in Kyoto supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through the Japan Arts Council
Sponsorship: Embassy of the Argentine Republic in Japan
Organized by Kyoto Experiment and Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of the Arts

Mariano Pensotti / Grupo Marea

Born in 1973, Pensotti is an Argentine author and theater director. He studied cinema, visual arts and theater in Buenos Aires, Spain and Italy and co-founded Grupo Marea in 2005. He writes his own literary texts and creates theater works as well as site-specific performances in public spaces with the aim of creating a distinct contrast between fiction and reality. His latest creations include *La Obra* (Wiener, 2023), *LOS AÑOS* (Ruhr, 2021) and *El Público* (Athens, 2019). He is one of the most internationally renowned theater directors and has presented his work in over thirty cities around the world.



サムソン・ヤン

The World Falls Apart Into Facts

拠点：香港 展示

Samson Young

The World Falls Apart Into Facts

Based in Hong Kong Exhibition



©Lily Yiyi Chan

🕒 9.30 (Sat) - 10.22 (Sun)
10:00-20:00

*9.30 (Sat)のみ22:00までオープン
Open until 22:00 on 9.30 (Sat)

¥ 入場無料
Free admission

📍 京都芸術センター ギャラリー南
South Gallery, KYOTO ART CENTER

👉 More Events
9.30 (Sat) 12:30 アーティストによるギャラリーツアー(無料)
Gallery tour by the artist, free admission



#文化の伝播 #オリジナルとは #逆輸入 #ハイブリッド
#cultural-transmission #what-is-original
#reverse-import #hybridity

近寄ってみれば、 だれもが複雑に混ざり合っている

香港を拠点に活躍し、2017年のヴェネツィア・ビエンナーレ香港代表を務めたサウンド・アーティスト、サムソン・ヤン。本作では、中国を代表する民謡「Molihua(茉莉花)」の系譜を辿る。この曲が清朝の時代に大英帝国を経てヨーロッパに伝わり、そこでアレンジされたものが中国に「再輸入」されたという経緯を、文化と政治の両面からリサーチし、映像とオブジェクトのインスタレーションとして制作。また、日本における唐楽(中国から日本に伝来した唐代の音楽で、雅楽の分類のひとつ)など、国と国を超えて作用する文化的系譜に関わるリサーチも、作品には含まれる。今回、ヤンは京都での滞在を通して思索を深め、本作を再構成している。

今日、私たちが“日本的”とらえる文化的系譜の多くは、歴史を振り返れば他国の文化を転用したものや、その影響下にあるものだ。国と文化を結びつけて語るとき、しばしば文化の純粋性や真正性といった概念を入れ込もうとする力が働くが、ヤンはそこにユーモアと疑問符をぶち込んでくれる。

クレジット

作曲・テキスト・美術・映像編集:サムソン・ヤン|パフォーマンス:ジュネーブ・フォン、サムソン・ヤン、香港中文大学合唱団(指揮:レオン・チュー、クリスティ・ウォン)
ナレーション:クリスチャン・ウェイコップ博士|ビデオ撮影:イップ・ユウトン、ザカリー、ラウ・チュン・シン、ファン・カイ・チュク、レオン・ティン・チュン・ジミー、リー・チュン・ワイ、レオン・ホー・シン|プロダクションマネジメント:ジョーンズ・リー
プロダクション:クリスティ・コー、ドナ・ロイ、ピピアン・レオン、チャン・チャク・クワン、レイ・ウォン、ジョーンズ・リー、“ジョナサン”、ヘンリー・フォン、エドワード・ラウ、“ロッキー”、“エレファント”、“ヒム”、シシー・タン|録音:サムソン・ヤン、ティーダ・リー
3D印刷テクニカルサポート:アンドリュー・クロウ(Meta Objects)
スペシャルサンクス:アレックス・レディング、テッサ・ギブリン、タルボット・ライス・ギャラリー、St. Cecilia's Hall, エディンバラ大学リード音楽院

協力:京都大学人文科学研究所
協賛:PORTER'S PAINTS
助成:香港芸術發展局
主催:KYOTO EXPERIMENT

香港芸術發展局は芸術表現の自由を全面的に支持します。このプロジェクトで表明された見解や意見は、香港芸術發展局の立場を代表するものではありません。

サムソン・ヤン

1979年香港生まれ。サウンドやパフォーマンス、映像、インスタレーションなどの領域を自由に横断し活動するアーティスト。CMHK(Contemporary Musiking Hong Kong)創設者、アーティストコレクティブ Tomato Grey メンバー。シドニー大学で音楽、哲学、ジェンダー学を学び、香港大学で MPhil、プリンストン大学で作曲の PhD を取得。音とその文化的政治性を軸に、アイデンティティや国境などの主題を探究し、各国で作品を発表。2017年 第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ香港代表ほか、受賞多数。

A closer look reveals that everyone is a complex blend of cultures

Samson Young is a Hong Kong-based sound artist who represented Hong Kong in the 2017 Venice Biennale. This work traces the genealogy of “Molihua,” a famous Chinese folk song. The song reached Europe via the British Empire during the Qing dynasty, and an arrangement of the song was eventually re-imported into China. Young researched this chronology from both cultural and political angles and presents it as an installation of video and objects. The work also includes research into other cultural genealogies that transcend borders, such as *Togaku*, a category of imperial court music from the Tang dynasty that was introduced to Japan.

A look back at history reveals that what we think of as “Japanese” cultural genealogies today are often adapted from or influenced by the cultures of other countries. When we discuss cultures and countries in relation to each other, we often try to incorporate such concepts as purity and authenticity, but Young disrupts that impulse with humor and curiosity.

Credits

Music Composition, Text, Set Design and Video Editing: Samson Young
Performance: Geneva Fung, Samson Young, the Chinese University of Hong Kong Chorus conducted by Leon Chu and Christie Wong | Voice Over: Dr. Christian Weikop | Videography: Ip Yiu Tung Zachary, Lau Chun Sing, Fung Kai Cheuk, Leung Tin Chun Jimmy, Lee Chun Wai, Leung Ho Sing | Production Management: Jones Lee | Production: Christy Ko, Donna Loy, Vivian Leung, Chan Chak Kwan, Ray Wong, Jones Lee, “Jonathan,” Henry Fung, Edward Lau, “Rocky,” “Elephant,” “Him,” Sissy Tang | Sound Recording: Samson Young, Teeda Lee | 3D-Printing Technical Support: Andrew Crowe (Meta Objects)
Special thanks to Alex Rehding; Tessa Giblin; Talbot Rice Gallery, St. Cecilia's Hall and the Reid School of Music at the University of Edinburgh

In co-operation with Institute for Research in Humanities, Kyoto University
Sponsored by PORTER'S PAINTS
Supported by Hong Kong Arts Development Council
Presented by Kyoto Experiment

Hong Kong Arts Development Council fully supports freedom of artistic expression. The views and opinions expressed in this project do not represent the stand of the Council.

Samson Young

Born in 1979 in Hong Kong, Young is a multi-disciplinary artist who works in sound, performance, video, and installation. He is the founder of CMHK (Contemporary Musiking Hong Kong) and a member of the Tomato Grey artist collective. He studied music, philosophy, and gender studies at the University of Sydney before obtaining an MPhil from the University of Hong Kong and a PhD in music composition from Princeton University. Centering on sound and cultural politics, he explores themes such as identity and national borders. In 2017 he represented Hong Kong at the 57th Venice Biennale and has won numerous awards.

Supported by 香港藝術發展局
Hong Kong Arts Development Council



コラム

Articles

“まぜまぜ”を思考してみる。
Thinking about maze maze

KYOTO EXPERIMENT 2023のキーワードは“まぜまぜ”。
本年度は複数のプログラムで、言語やアイデンティティ、国籍、文化の
混ざり合いに目を向けた作品群が上演される。これに合わせて、3人の
執筆者に自身にとって身近な“まぜまぜ”について論じていただいた。
鑑賞する作品選びや、作品理解を深めるヒントにどうぞ。
もちろん、みなさん自身の周りにある“まぜまぜ”なものに
目を向けるきっかけとしても。

The core concept for this year's festival is the Japanese word *maze maze* literally meaning 'mix mix'. This year's lineup features works that allow us to consider language, identity and culture as *maze maze*; as a mix of things. We asked three writers to contribute articles to our magazine about their own ideas and thoughts surrounding *maze maze*. We hope these articles help you choose a show, deepen your understanding of something you've already seen at the festival, or simply help turn your attention to the various *maze maze* that might surround your own life!

食文化とまぜまぜ

中西裕二

Food Culture and Mixing

Yuji Nakanishi



日本料理の調理法について調べてみると、そこに混ぜるという概念は出てこない。似た言葉で「^あ和える」があるが、これは「からませる」程度のニュアンスなので、「混ぜる」とはちょっと違う。では、日本料理には混ぜる行為は無いのだろうか。実はそんなことはなく、いろいろな要素が混ざった料理を私たちの周りに多く見いだすことができる。だが、ここで注意が必要だ。実は、混ぜられているのは食材や作られた料理そのものではないからである。混ぜているのは料理の型、あるいは料理の概念で、その特徴はハイブリディティ(異種混濁性)なのである。

身近な食べ物としては、まずあんパンがある。これは明治時代初期に考案された菓子パンの元祖だが、発想としては単純で、饅頭の皮をパンに置き換えただけの食べ物だ。しかし、これを考えた人の発想力には恐れ入る。なぜなら、饅頭は和食でありパンは西欧料理、というカテゴリーの違いがありながら、それを易々と乗り越え新たな食の分野を作ったからだ。この、概念の壁を乗り越える作業は、実はかなり難しい。なぜなら、我々の世界はこのカテゴリーを元に構成されているからである。

If one looks at how food is cooked in Japanese cuisine, the concept of mixing doesn't seem to exist. One finds similar words like *aeru* (meaning to dress or toss), but this ultimately connotes only the sense of combining ingredients and isn't quite the same as actually mixing. Does this mean the act of mixing simply doesn't happen in Japanese cooking? Of course not. Quite the opposite, since we frequently find examples of dishes in our everyday lives that blend various elements. But prudence is required here. Because what is actually being mixed are not the ingredients or dishes themselves. What is mixed are gastronomic forms or concepts, characterized by their hybridity.

As an example of a food familiar to us all, let's start with anpan. Originating in the sweet rolls conceived during the 1870s, the idea behind anpan is very simple: it takes a manju, which is a type of small bun filled with bean jam, and replaces the outside coating with bread. We still, however, have to admire the conceptual plasticity of the person who came up with this. Why? Because they took something from Japanese food (manju) and something from Western European food (bread), nimbly transcended those differences, and created a whole new type of food.

カテゴリーを越え新たなものや領域を創造することをイノベーションと呼ぶが、日本の日常的な食事をみると、イノベーションの産物だらけだということを改めて思い知らされる。

あんパンのスタイル、つまり具材をパンで包むという発想はその後、またイノベーションを生む。昭和初期に作られたカレーパンである。具をカレーにし、それが詰まったパンを揚げるというこの食べ物は、食材のルーツを海外に持ちながら、日本にしか存在しない食べ物となっている。だからカレーパンは「洋食＝日本風西洋料理」としか言いようがない。ただ、パンを揚げるという発想は、おそらく揚げ饅頭から来ていると思うし(揚げ饅頭は江戸時代に既にあっただらしい)、カレーパンのように揚げなければ、それは長野県の郷土料理「おやき」(小麦粉などで作った皮で野菜や山菜でできた餡を包み、焼いた食べ物)と似ているため、調理技法は日本的だと言えるかもしれない。

あんパンやカレーパンは和食／西欧料理の壁を越えたイノベティブな食べ物だが、食べる場所の壁を取り払ったものもある。ラーメンやカレーは、そもそも家庭で食べられる料理ではなかったが、インスタントラーメン、カレールウが共に日本で開発された結果、それらは「家庭料理」に変貌した。その延長線上のレトルトカレーも日本で開発され、いまでは有名店のカレーが自宅で食べられるようになっている。

日本の食文化の近代を概観すると、イノベーションとは日常的な現場から出てくること、そして、概念を混ぜることはイノベーションの原点だということが良く分かる。これは、食文化に限ったことではない。文化というものは、ぶつかり合ったり混じったり、それを経験しながらより豊かなものに変貌する。あんパン・カレーパン、そしてラーメンやカレーは、その好例ではないだろうか。

私は朝、朝食の目玉焼きに韓国の辛子味噌、コチュジャンをつけて食べている。辛いものが好きな上、卵料理に最も合う調味料はコチュジャンだと私は信じているからである。だが以前、この話を韓国人留学生にしたところ、「そんな食べ方をする人、韓国にはいないですよ」と笑われてしまった。これが目玉焼きのイノベーションと言えるか分からないが、粹を取り払い、自分の感覚に素直であるところにイノベーションは生まれるのではないだろうか。京都国際舞台芸術祭が、そのような場になり化学反応が起きることを願っている。

中西裕二(なかにし ゆうじ)

1961年生まれ。福岡大学教授、立教大学教授を経て、現在日本女子大学国際文化学部教授。専門は文化人類学、民俗学、宗教学、観光研究。日本とベトナムをフィールドに、主に宗教人類学的視点から研究を進めている。著書として『憑依と呪いのエスノグラフィ』(共著、2002年)、『夢と幻視の宗教史 上巻』(共著、2012年)などがある。

The work of overcoming such conceptual barriers is actually quite a feat. After all, our entire world is constructed out of categories. Transcending them to create new things and fields is regarded as innovation, and any glance at an ordinary Japanese meal reminds us just how chockablock it is with innovation.

The anpan style—that is, the idea of wrapping ingredients in bread—led to subsequent innovations. Curry bread was created in the prewar period. Featuring deep-fried bread with curry inside, curry bread is unique to Japan, notwithstanding the origins of its ingredients in foreign cooking. Our only classificatory recourse, then, is to regard curry bread as an example of *yoshoku* (literally, “Western food,” but actually referring to Western foods made in a Japanese style). The idea of deep-frying bread, however, probably came from *age-manju* (eaten in Japan already in the early modern period) and the cooking method is arguably very Japanese, since if you don't deep-fry it like curry bread, you have something similar to *oyaki* (a food from Nagano that is a grilled bun made from flour and stuffed with a paste made from vegetables and wild plants).

Anpan and curry bread are innovative types of food that transcended the distinctions between Japanese and Western cooking, yet also removed the boundaries that define where food is eaten. Ramen and curry were not originally dishes people ate at home, but that all changed with the invention of instant noodles and curry roux in Japan. And as an extension of this, curry retort pouches were also invented in Japan, enabling consumers to eat even famous restaurants' curries at home.

In any overview of the modern Japanese food culture, it is easy to see how innovation emerges from everyday scenarios, and that mixing concepts is the fount of innovation. Nor is this limited to food culture. What we call culture is, in fact, a series of collisions and intermixing, which then transforms and enriches over the course of that experience. Anpan. Curry bread. Ramen. Curry. These are all prime examples of this.

In the morning, I eat a fried egg with gochujang, a Korean red chili paste. As a fan of spicy food, I believe that gochujang is the best seasoning for eggs. But a Korean exchange student was once very amused by my choice, telling me that no one in Korea eats gochujang that way. I'm not sure if my breakfast counts as an innovation on the fried egg, but innovation certainly comes from thinking out of the box and trusting your gut. I hope Kyoto Experiment will also serve as a place for such innovations and chemical reactions.

Yuji Nakanishi

Born in 1961, Yuji Nakanishi taught at Fukuoka University and Rikkyo University before taking up his current position in the Faculty of Transcultural Studies at Japan Women's University. His research encompasses cultural anthropology, folklore, religion, and tourism, with a particular focus on studying Japan and Vietnam through the anthropology of religion. His publications include *Ethnography as Spirit Possession and Curse* (2002) and the first volume of *Dreams and Illusions: The History of Religion* (2012).

美しく、あいまいで、 雑多な日本の「私」たち 温 又柔

Japan, the Beautiful, the Ambiguous, and the Motley "Us" Wen Yuju

私たちが礼儀と呼ぶものは、しばしば自分より他人の快適さを優先させるよう訓練することを指している。他人の快適さを乱してはいけないし、何が起きているとそんなことをするのは間違っている、という考えだ——レベッカ・ソルニット著『わたしたちが沈黙させられているいくつかの問い』（左右社、2021年）

私は台北で生まれた。両親はどちらも台湾人。幼少時に来日以来、人生のほとんどの月日を東京で暮らしている。普段は、主に小説を書いている。小説に限らず、ものを書く時は日本語を用いる。理由は明白。それでしか書けないからだ。

日本で育ち、日本語で教育を受けた私は非常に礼儀正しいと多くの人が評する。当然だろう。そのように私は躰けられた。特に母は、私が、ほかの人から受け入れられ、可愛がられる人間であるためには、何よりも愛嬌が大切なのだと教えてくれた。母自身が、身をもってそれを示していたところもあった。幸い私は、母に似て、にこやかで可愛らしい子どもだった。おりこうさんだね、としょっちゅう褒められた。まったく母の言う通りなのである。礼儀正しく、愛想もいい私は、大人たち——学校の先生や、近所で暮らす顔見知りの人々、同級生のお母さんなど——に好かれた。

——ユウジュウちゃんはいい子だから仲良くしてもいいってママが言っていた。

経験上、私はよく知っている。私さえ、ここにいさせてもらえてありがたい、と感謝する慎ましさを忘れずにいれば、人々は私（たち）にととても優しい。

「人々」は、ここでは「日本人」と置き換えてもいい。

ご存知のとおり、ここは、「日本人」だらけの国である。

だから私は、「日本人」を不快にしないように、躰けら

What we call politeness often means training that other people's comfort matters more. You should not disturb it, and you are in the wrong to do so, whatever is happening.

Rebecca Solnit, *The Mother of All Questions* (2017)

I was born in Taipei. Both my parents are Taiwanese. I came to Japan when I was very young and have spent almost my entire life in Tokyo. I write novels. And even in my other work, I write in Japanese. The reason is plain enough. It's the only language in which I can write.

Having been brought up in Japan and educated in Japanese, people often remark on how polite I am. Of course I am. That's how I was brought up to be. My mother, in particular, taught me that amiability was paramount if you want to be accepted by others and get in their good books. My mother was no doubt talking from personal experience. Thankfully, I was like her, a genial and winsome child. "What a good girl," people would often say about me. Just like Mom said they would. Polite and sociable as I was, adults liked me, from my school teachers to the folks I knew in the neighborhood or my classmates' mothers.

Mom said you're a well-behaved girl, so I can be friends with you.

I learned this well from experience: as long as I don't forget my modesty, my gratitude for being allowed to stay here, people—or rather, Japanese people—are very friendly to me (us).

As you know, Japan is full of Japanese people. As such, I was brought up aware that I shouldn't make those Japanese people feel uncomfortable. I was very conscious of the fact that my parents, that we, were foreigners. When in Rome, do as the Romans do.

Even now, I have no wish to make others uncomfortable by being rude, nor do I have any desire to completely abandon all the efforts I have made to be

れたようなものだ。父と母は、自分たちが「外国人」であることをわきまえていた。

——郷に入ったら郷に従え。

今も私は、私の不躰さによってほかの人を不快にしたとは思わないし、自分がほかの人たちに受け入れられるための努力を一切合切放棄しようとはまったく思っていない。

ただ、この国の多数派である「人々≡日本人」が、「彼ら≡日本人」にとって「良い外国人」と「悪い外国人」を一方的に「査定」しがちであるという構造については疑問を抱いている。

——あの子は外国人だけれど「いい子」だから仲良くしてもいいよ。

私はずいぶんと長いこと、思い込んでいた。

この国は私のものではない。

自分のものではない国で、つつがなく暮らすためには、この国の「主人」たる多数派の人々が機嫌を損ねたり、不快になるような言動は慎まなくてはならない。

それが、礼儀だと思っていた。

ところが、今や私は、日本人だらけのこの国において大多数を占める「人々≡日本人」の考え方ややり方を尊敬するどころか、堂々とけちをつけることがあるのだ。

たとえば、親のどちらかや祖父母あるいは曾祖父母のうちの誰かが、日本ではない国で生まれた人……

海を渡ってやってきた祖先の髪や瞳や皮膚の色を受け継いだ人……

今では日本に住み着いた父や母や祖父母が以前暮らしていた国で主に奏でられている言語を思わせる響きの名前を持つ人……

こうした人たちの一人ひとりに対して、自分が「日本人」であることを信じて疑うことのない誰かが、ここにいられることを感謝するように暗に求めていたり、今後もここにいたければ慎み深く振る舞え、と仄めかすような場面と出くわすことがあれば、即座に私は、その態度は時代遅れだとせせら笑う。なぜなら、かれやかかのじよや私のものでもあるはずのこの国が、私やかれやかかのじよのことを「良い外国人」なのか「悪い外国人」なのか一方的に「査定」する権利があると無意識に思い込んでいる人々にとってのみ「快適」という状況など、歪んでいるからだ。

というわけで、美しく、あいまいで、雑多なこの日本の紛れもない一員として創作する時の私が一番最初にするのは、長年かけて叩き込まれた礼儀正しさをかなぐり捨てることなのだろう。

温 又柔(おん ゆうじゅう)

小説家。1980年、台北市生まれ。両親とも台湾人。幼少時に来日し、東京で成長する。2013年、port Bによる『東京ヘテロトピア』に参加し東京で生きるアジア人の物語を執筆。2016年、『台湾生まれ 日本語育ち』でエッセイスト・クラブ賞受賞。著書に『空港時光』『魯肉飯のさえずり』『永遠年輕』『祝宴』など。

accepted by others. Nonetheless, I have reservations about the structural way in which the majority of people in Japan (≡Japanese people) tend to unilaterally "assess" which foreigners are "good" and which are "bad" for them (≡Japanese people).

She's foreign but a nice girl, so you can be friends with her.

For so long, I was convinced that Japan is not my country.

To live without mishap in a country that isn't your own, you have to be careful not to say or do anything that would make the majority—the "owners" of the country—uncomfortable, that would result in getting on their bad side. I thought that was politeness.

But now, far from showing respect for the mindset and way of doing things demonstrated by the people (≡Japanese people) who make up the majority in this Japanese-dominated country, I don't hesitate to cavil.

Mindsets toward, for instance, the people one of whose parents or grandparents or great-grandparents was born somewhere other than Japan. Or people whose hair, eyes, or skin color are those of their ancestors who came from another place. Or people whose names resonate with the sounds of the language spoken mainly in the country where their father, mother, or grandparents used to live before settling in Japan.

If I come across a situation in which someone who believes without a doubt that they are "Japanese" implicitly demands the gratitude of each and every one of such people for being here, and implies that they should act with due decorum if they wish to stay in Japan, I immediately sneer at their antiquated attitude. Because it's a truly warped state of affairs if in this country, which is both theirs and mine, the only people whose "comfort" matters are those unconsciously convinced of their right to unilaterally assess if we are "good" or "bad" foreigners.

To wit, when composing my work as an indisputable member of beautiful, ambiguous, and motley Japan, the first thing I do is to throw off the politeness instilled into me over the years.

Wen Yuju

Born in 1980 in Taipei to Taiwanese parents, the novelist Wen Yuju migrated to Japan as a child and grew up in Tokyo. In 2013, she was one of the contributors to Port B's *Tokyo Heterotopia*, writing the stories of Asians living in Tokyo. In 2016, her book *Born in Taiwan, Raised in Japanese* won the Essayist Club Prize. Her other writings include *Airport Time*, *Minced Pork Rice Chirping*, *Eternal Youth*, and *Banquet*.



Photo: Eisuke Asaoka

クレオールから群島へ —— 混ざりあう舌の饗宴

今福龍太

From Creoles to the Archipelago: A Feast of Mixed Tongues Ryuta Imafuku

1991年に混血文化宣揚のマニフェストとして『クレオール主義』の初版を出したとき、新たな移動と混交の動きを見せはじめた世界にはある種の「希望」が兆していた。領土とナショナリズムと国語に封じられた「国家原理」の抑圧から意志的に離脱して、移住と多言語と文化混濁を生きようとするさまざまな動きが、地球上で同時多発的に生まれようとしていたからである。bordercrossing、creole、diasporaといった用語が熱を帯びて語られはじめた。そのとき、「国境」とは国家のテリトリーを守る属領的・排他的なものではなく、新しい生を求めて越境・侵犯するための果敢な冒険と闘争の場に変容していたのである。

そんな状況を世界全体を揺るがしはじめた新たな兆候として感じながら、私は希望とともに『クレオール主義』を書いた。そのとき、クレオールの島マルティニックの黒人詩人エメ・セゼールの詩集『わたし、海藻』のなかのこんな詩句の一閃が、私にとっての大きいなる靈感原となっていた。

「どんな人生にも、北と南があり、東と西がある」(筆者翻訳)*1

すべての方角を自らの生の経路として等しく取りこむ

In 1991, when the first edition of *The Heterology of Culture: A Manifesto of Creolism*, my advocacy for cultural hybridization, was published, signs of a certain hope were evident in a world in which new forms of movement and intermingling were emergent. Simultaneously all across the globe, we saw various kinds of attempts to willingly break away from the oppression of nation-state principles enclosed in territory, nationalism, and national languages, and embrace migration, multilingualism, and syncretism. We started to breathlessly intone terms like "border-crossing," "creole," and "diaspora." At this time, a national border transformed from something territorial and exclusionary that protected the nation-state's dominion into a site of conflict and daring adventure, to be crossed and infiltrated in search of a new life.

I wrote *The Heterology of Culture* in a spirit of hope, sensing the new signs emanating from this new seismic shift all over the world. An immense source of personal inspiration was a line from a poem by Aimé Césaire, a Black poet from the creole island of Martinique, in his 1982 collection *Moi, laminaire*: "In any life there is a north and a south, and the east and the west" (translation: Annette J. Smith, Clayton Eshleman).



Photo: KOSAC



Photo: KOSAC

こと。植民地主義の傷痕が刻印された故郷の島を飛び出し、かつての主人フランスの知的環境のなかで差別を受けつつ奮闘し、そこでの葛藤と矛盾を胸に再び故郷の島へと「帰還＝難破」したセゼール。そんなセゼールの屈折した人生に立って書かれたこの一節を、自由な越境と混濁への意志の表明としてエピグラフに掲げながら、私はこう書いていた。「クレオール主義とは、なによりもまず、私たちの言語・民族・国家にたいする自明の帰属関係を解除し、そのことによって自分という主体のなかに、四つの方位、一日のあらゆる時間、四季、砂漠と密林と肥沃な大平原と海とをひとしく呼び込むことなのだ。固有言語の閉鎖空間を離脱して複数のことばの主体的併用を選択し、民族の境界を踏み越えて混血の理念を実践し、国家という制度からの意志的なエミグレーションをこころみること……」

このメッセージに込めた真実は32年経ったいまも変わらない。いや、安全保障の名のもとに排他的な国家主義が再燃し、社会内部に横たわるさまざまな「違い」を分断して管理する権力は強まり、人々がふたたび幻想の自己同一性のなかに閉じこもりかけているいまこそ、クレオールのヴィジョンが必要なのだ。包摂し一元化する「普遍性」ではなく、解放しつつ多様なつながりを志向する「横断性」への信頼(エドゥアール・グリッサン*2)。大陸にはなく海にこそ忘却された歴史が隠されていること(デレク・ウォルコット*3)。カリブ海の詩人たち、言葉の魔術師たちの、世界を海によって結ばれた

It means to take all directions equally as the course of your life. Césaire left the island of his birth, where the wounds of colonialism were etched into its history, and traveled to France, striving and struggling in the face of discrimination during his studies in a land of former slave owners, before returning to Martinique in a conflicted and ambivalent state of mind—a homecoming that was also a kind of shipwreck. The line from *Moi, laminaire* that reflects the refractions of Césaire's life became the epigraph for *The Heterology of Culture*, expressing my hope for free movement across borders and syncretism. In my book, I wrote the following: "Above all, Creolism is a release from explicit affiliations of language, ethnicity, and nationality, and through this, equally summons within the agency of the self the four directions, all the points of time in a day, the four seasons, the deserts and thick forests, the fertile plains and the sea. It denotes leaving the closed space of the native language and choosing the active combined use of multiple languages, and crossing over ethnic divides to practice a principle of hybridization, and attempting a willing emigration from the institution of the nation-state."

Thirty-two years later, the truth contained in this message remains unchanged. Rather, it is now, when exclusionary forms of statism have revived under the banner of security, and when power dividing and controlling society internally in terms of various "differences" grows in strength, and people are once again entrapped by fictitious identities, that a vision of creoles is needed. Édouard Glissant called for us

「群島」としてあらたにとらえる思想は、私を「クレオール」から「群島」のヴィジョンへとさらに押し出してゆく。そして、言葉こそ、群島のように海の流動に身を任せていなければならない、と。さまざまな生の旅程を経てきた私たちが、その過程で身につけた混濁する豊かな言葉＝舌。その言葉、すなわちクレオールの舌にこそ最後の美と謎が宿り、その美と謎とが、合理化され情報化され画一化され、AIの浅薄なアルゴリズムに吸いとられかけた現代人の言葉を、真に蘇生させる泉となる。セゼールが詩「言葉-マクンバ」でこう高らかに宣言していたように。

「言葉は聖人たちの父／言葉は聖人たちの母／ふと土に言葉を書いたら私のもとにやってきたツヤヘビのような言葉／それさえあれば鰐がひしめく川を渡れる／清冽な言葉さえあれば砂漠を越えてゆける／イグアナの言葉／ナナフシの言葉である繊細な言葉／怒りの覚醒によって火花を散らす影の言葉／稲妻の神シャンゴの言葉／私は海豚の言葉の背に乗って／いまこそたくらみに満ちた遊泳をはじめよう」(著者翻訳)*4

世界という群島に散布され、いまも激烈に混ざりあう生身の言葉たちの豊かな変容と遊動と饗宴のエネルギーを、私たちは信じねばならない。



Photo: KOSAC

参考文献

- *1, 4 Aimé Césaire, "mot-macumba", *moi, laminaire*.... Paris: Éditions du Seuil, 1982
- *2 Édouard Glissant, *Le Discours antillais*, Paris: Gallimard, 1981
- *3 Derek Walcott, "The Sea Is History," in *Collected Poems 1948-1984*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1987

今福龍太(いまふくりゅうた)

文化人類学者・批評家。カリブ海・メキシコ・ブラジルでクレオール文化を研究。奄美・沖縄・台湾を結ぶ遊動型の野外学舎(奄美自由大学)主宰。サンパウロ・カトリック大学や台湾中興大学でも随時セミナーを持つ。著書に『群島・世界論』『ヘンリー・ソロー 野生の学舎』(讀売文学賞)『宮沢賢治 デクノポーの叢知』(宮沢賢治賞・角川財団学芸賞)ほか多数。

to trust not in a universality that subsumes and unifies, but in a transversality that aspires toward liberation and diverse bonds. In his 1979 poem "The Sea Is History," Derek Walcott said that forgotten history was hidden not in the landmass but in the sea. These word sorcerer poets of the Caribbean's new conception of the world as an archipelago interlinked by the sea propelled me from a vision of creoles to the archipelagic. And surely, it's language above all that we must surrender to the currents of the archipelagic sea. We traverse manifold paths in our lives, over the course of which we acquire richly hybrid languages (tongues). It is in these languages, these creole tongues, that we find the last beauty and mystery, a wellspring that truly revives our contemporary language, so rationalized, computerized, and standardized, and siphoned off into the superficial algorithms of AI. In his poem "macumba word," Césaire resoundingly declares:

The word is the father of the saints
 the word is the mother of the saints
 with the word *coursesse* one can cross a river
 swarming with caimans
 sometimes i trace a word in the dirt
 with a fresh word one can cross the desert in a
 single day
 there are swim-stick words for pushing away
 sharks
 there are iguana words
 there are subtle words those are stick-insect
 words
 there are shadow words that awake sparking with
 anger
 there are shango words
 sometimes i sneak a swim on the back of a dolphin
 word
 (Translation: Annette J. Smith, Clayton Eshleman)

We must believe in the verve of the feast, in the rich transformation and movement of living languages scattered over an archipelagic world, still even now intensely intermingling.

Ryuta Imafuku

A cultural anthropologist and critic, Ryuta Imafuku's research focuses on creole cultures in the Caribbean, Mexico, and Brazil. He is the head of Amami Free University, a nomadic, outdoor school that links Amami, Okinawa, and Taiwan. He also teaches at the Pontifical Catholic University of São Paulo and National Chung Hsing University in Taichung, Taiwan. Imafuku's many publications include *The Archipelago-World*, *Henry Thoreau: The Wild School of Unlearning* (Yomiuri Prize for Literature), and *Kenji Miyazawa: The Wisdom of a Good-for-Nothing* (Kenji Miyazawa Prize, Kadokawa Culture Promotion Foundation Prize).

COME

SWEET

DEATH

「批評プロジェクト 2022」選出作品 Performing Arts Criticism Project 2022: Selected Review

KYOTO EXPERIMENTでは、既存の価値観では捉えきれない実験的な作品の見方を考え、作品と鑑賞者、社会をつなぐ批評・評論ができる人材を育成するプロジェクトを実施している。前年度(2022)は、対象作品のレビューを公募し、演劇批評家 森山直人氏の審査で3作品を選出。森山氏の指導を受けて各自がブラッシュアップした作品を、公式サイトで公開した。ここでは、本誌掲載のため最終選出された1作品を紹介する。
芸術作品の解釈はひとつではない。さまざまな批評にふれ、他者の視点を理解したり、作品理解を深めることで、鑑賞体験はより豊かになることだろう。対象演目を鑑賞した人もそうでない人も、ぜひ一読いただければうれしい。

☞ 2023年度も批評プロジェクトを開催します。詳細はp.29へ!
☞ 2023年度の3点の全選出作品、及び審査評は
<https://kyoto-ex.jp/news/2022-criticismproject1/>で公開中

対象作品:
フロレンティナ・ホルツィンガー
『TANZ (タンツ)』
上演日: 2022年10月1日㊥、2日㊦

ヨーロッパで数々の賞に輝いた注目のパフォーマンス作品をアジアで初上演。固定化されたジェンダーの象徴としての「伝統的なバレエ」を題材としながら、女性性の表象やそこからの解放を、ポルノや血みどろ、暴力性、宙吊りやサーカスなどのパロディを交えて描き出した。観る者の固定観念、価値観をも大きく揺さぶる本作は、多くの衝撃とカタルシスを呼び込んだ。

Photo by Ryo Yoshimi

Kyoto Experiment is carrying out a project to develop new talent that can consider ways of interpreting works that cannot be grasped by existing values, connect works to audiences and society, and write criticism. Last year (2022), reviews of a selected performance were gathered through an open call and three reviews were chosen by theater critic Naoto Moriyama. These reviews, fine-tuned under Moriyama's guidance, were then published on the festival website. Here we introduce the review that was finally selected for publication in this magazine.
There is of course more than one interpretation of a work of art. By being exposed to various critiques, understanding the perspectives of others, and deepening one's understanding of the work, one's experience of viewing a work of art is enriched.

☞ The criticism project will be held again in 2023. Go to p.33 for more information!
☞ The three selected reviews for 2022 and the judge's comments can be read at the following link: <https://kyoto-ex.jp/news/2022-criticismproject1/>

Selected Production:
Florentina Holtzinger TANZ
Performed on October 1st (Sat) and 2nd (Sun), 2022

This was the Asia premiere of a much-discussed performance that has won numerous awards in Europe. Taking classical ballet and how it represents certain gender ideals as its theme, the work mixes and parodies pornography, gore, violence and circus style acrobatic performances to depict how femininity is represented and a liberation from this. The work questions established values and social conventions and evokes shock as well as catharsis.

2022 選出作品

「わたしは、あなたとは違うやり方で宙を舞う」 文・田中淳士

Selected Review 2022

I Fly Differently from You Atsushi Tanaka

『TANZ(タンツ)』はダンサー・振付家のフロレンティナ・ホルツィンガーによる、19世紀初頭のロマンティック・バレエについての調査を下敷きに制作された作品だ。本作はバレエと同様に複数の幕で構成され、数々の古典的なバレエの要素が散りばめられている。しかし、ミニマムな舞台装置で構成されたこの舞台で表現されるのは、一般的なバレエの様式美的なオマージュではなく、バレエ作品の眩さから私たち観客がみようとしてみなかつた周縁の物語だ。第一幕ではバレエ教室を舞台に「老教師」によるバレエの基本動作指導の様子を描くことで、バレエの型・制度が風刺される。第二幕ではバレエ作品がホラー映画やアクション映画のように翻案され、サーカスのようなアクロバティックな演技で彩られることで、バレエの型・制度の破壊と再生が描かれる。バレエを題材としつつも、この舞台で提示されるのはバレエとは異なる方法で訓練された「表現する身体」だ。その身体はバレエの美学的型に「従順な身体」から、また観客から欲望をもって眼差される対象としての「見世物にされた身体」から解放された身体だといえる。

女性パフォーマーのみで構成される本作品において、このフェミニズム的な主張が暗喩的に、しかし効果的に示されているのは、第一幕における『春の祭典』と第二幕における『ジゼル』のモチーフの対比だ。まずは第一幕の内容を概観していく。第一幕の舞台は、現代において最高峰と名高い振付家J・ノイマイヤーの振付で『春の祭典』を裸で踊ったプリマ、ベアトリス・シェーンヘルスのバレエ教室だ。そのバレエ教室では、一条まとわぬ姿の「老教師」が、自分の身体をコントロールするための基本的な足のポジションや姿勢についての指導を行っている。しかし、レッスンを進めるうちに「老教師」は女生徒に服を脱ぐことを求め、女生徒たちは「老教師」の指示によって順番に、そして最終的にすべての衣服を脱ぎ捨てることとなる。ここでは自分の身体をコントロー

TANZ was created by dancer and choreographer Florentina Holzinger, based on her research into early nineteenth-century Romantic ballet. Like a ballet, it is structured into different acts and interwoven with various elements from classical ballet. But what unfolds on a minimal stage set is no aesthetic homage to ordinary ballet, but rather a peripheral story that we, blinded by the splendor of ballet, had overlooked. The first act unfolds in a studio where an old ballet mistress is teaching the fundamentals of ballet, the process of which satirizes the formal styles and institutions of ballet. In the second act, the ballet morphs into a kind of horror or action movie, embellished with circus-style acrobatic performances to depict the formal and institutional destruction and rebirth of ballet. Though dealing with ballet, what this work actually presents onstage are bodies that express themselves, and which are trained quite differently from ballet. Those bodies are arguably liberated from the compliant physicality of dancers molded to the aesthetics of ballet, from the body-turned-sideshow-attraction objectified by the desiring gaze of the audience.

Featuring only female performers, the work's feminist assertions are figuratively and effectively shown in the contrast between the first act's use of *The Rite of Spring* and the second act's references to *Giselle*. Let's begin with an overview of the first act. It is set in the studio of the prima ballerina Beatrice Cordua (Schönherr), who once danced *The Rite of Spring* naked in a version by John Neumeier, the renowned, leading figure in contemporary choreography. In the studio, the stark-naked old teacher provides instruction on ballet's fundamental feet positions and postures for controlling the body. As the lesson proceeds, the ballet mistress tells her female students to undress; they follow her instructions, discarding their clothes one by one until they too are completely naked. The meaning of having control over your own body here shifts from the goal of dancing freely to a means of conducting yourself,



“uniform” in order to satisfy herself. We, the audience who have come to watch, know from the start of the performance that the ballet mistress is someone who should personify the desexualization of the human body, and yet we learn that she has already been reduced to an entity attempting to mold bodies into the physical compliance inherent to the Romantic ballet.

In the second act, by contrast, the female students whose self-determination was threatened, who were sacrificed to the institution of ballet, transform into the spirits from the ballet *Giselle* that make a man who enters a forest dance to death, and take revenge on the old teacher. This second act begins with a scene in which the mistress, tied to a chair and deprived of her liberty, is filmed giving birth to a rat, accompanied by a torrent of blood paste. The suffering and dangers experienced by the female students in order to obtain compliant bodies through their ballet lessons are likened to the torment of pregnancy and childbirth, and transferred to the old teacher. The role of the victim switches from the maiden forced to perform the sacrificial dance to the pagan gods to the man forced to dance to death by the forest spirits. But the oppression does not cease here. Unmindful of their teacher who is groaning and losing consciousness, the former students hold a nightmarish feast. One of them saws off the teacher's limbs; the others point guns and rake one another with bullets. The stage is drenched in blood. The women ultimately employ unique means of enabling their bodies to fly like sylph air spirits with power over the wind. There are indications of this assertion of their right to self-determination over their bodies (that is, their right to bodily autonomy) from the first act. At the end of the opening act, for instance, one of the performers suspends her body from the ceiling by her own hair; others climb onto motorbikes hanging in the air and launch themselves from it like stuntmen. In the second act, the performers' assertion of their right to bodily autonomy, and the ostentatious display of this assertion, reaches its apotheosis when one of them sticks wired hooks into their body near the shoulder blades in order to achieve flight. Repeatedly over the course of the performance from the start, these violent forms of expression break down the gaze and affect of others that project an image of women as weightless, evanescent, and nymphlike, and present a sensational physicality diverging from that demanded by the Romantic ballet.

The motorbike is a particularly striking motif within these chaotic scenes. The bikes remain hidden under cloth until the end of the first act, suggesting that they are intended as a way of exposing the male desire that lurks behind ballet training and attempts to control the physical state of dancers. Possessing speed and power in abundance, far more so than the physical capabilities of a human being (and so much so that the speed at times claims the life of the rider),

された「お仕着せを脱げ」というフェミニズム的主張が女生徒たちの衣服を脱がせるが、それは同時に「老教師」が自身を満足させるための「お仕着せ」になってしまっているという皮肉なカリカチュアが存在する。ここにきてわたしたち観客は、「老教師」が身体を非官能化する術を開演時から体現していたはずの存在であったことを知り、しかしすでに彼女はロマンティック・バレエが内包していた従順な身体を訓練しようとする主体へと成り下がっていることを知るのだ。

これに対して第二幕では、自己決定権を脅かされ、バレエ制度の「生贄」に捧げられてきた女生徒たちは、『ジゼル』の「森に迷い込んだ男を死ぬまで踊らせる精霊」にその姿を変え、「老教師」への復讐に転じる。第二幕は、椅子に拘束され自由を奪われた「老教師」が大量の血糊とともにネズミを出産する姿をビデオカメラで撮影されるというシーンから始まる。女生徒たちがバレエ・レッスンによって「従順な身体」を手に入れるために体験した苦痛と危険が、妊娠と出産の苦しみに擬えられ「老教師」に与えられる。そこでは「神への生贄として踊らされる乙女」の犠牲の役割は、「精霊に死ぬまで踊らされる男」へと転化させられる。しかし、これまでの抑圧はそこで留まることはない。気絶しうなされる「老教師」を意に介することなく、元女生徒たちは悪夢のような宴を繰り広げる。ある者は手足をのこざりて切り落とされ、残った者も互いに銃を向け合い、重火器で掃射される。そして舞台は大量の血で汚されることとなる。最終的に彼女たちは独自の方法で、風を司る妖精シルフィードのように宙を舞う身体を得ることを目指し始める。このような「身体の自己決定権」の行使には、第一幕から予兆があった。例えば第一幕終盤では、あるものは自身の毛髪で自身の身体を天井へと吊り上げ、あるものはスタントマンのように天井に吊り下げられたバイクによじ登り身体を投げ出す。そして第二幕において、一人のパフォーマーが肩甲骨付近にワイヤーのついたかぎ針を突き刺し宙を目指すことで、この「身体の自己決定権」の行使、その誇示は最高潮を迎える。これらの暴力的な表現群は、第一幕から重ねて、重力を感じさせない儂い妖精的な女性像を投影する他者の視線・情動を打ち崩し、ロマンティック・バレエに求められたものとは異なるセンセーショナルな身体を提示する。

この狂乱のなかで特徴的なのはバイクというモチーフだ。バイクのモチーフは、第一幕終盤まで布で覆い隠されている。これはバレエ・トレーニングの裏に隠されていた、身体のありようを支配しようとする男性的欲望の暴露とみることができる。実際、人間の身体能力と比したとき、その速さからときに乗り手の命を奪うことさえある過剰なスピードやパワーをもつバイクは、大きすぎる力を与えられた制度的男性中心主義の表象として捉え

and the instructions that should be about gaining the ability to control your own body change into a way of being controlled by others. As each of the protracted, even unrelenting lessons finish, the female students obtain a stylistic template and, at the same time, discard their clothing one by one. The first act is given over almost entirely to these lessons, the directing that conveys this passage of time effectively portraying how the thoughts of the female students are gradually usurped and controlled. With the directing threatening their right to self-determination and demanding their compliance, the female students are assigned roles similar to that of the maiden forced to perform the sacrificial dance to the pagan gods in *The Rite of Spring*.

What these ballet lessons distinctly conveyed as the female students each separately took off their gym clothes was the emerging incongruity of dressed and undressed bodies. The women are consistent in their rejection of the audience's desiring gaze that demands the women show their bodies in a better light—that is, the sensational body that lies behind the aesthetics of ballet. This rejection does not falter even after the women have shed all their clothing. The audience is presented with a fact: naked women stand before them. The same could be said of the old teacher's naked body. As an interface between the self and the outside world, the skin is a barricade that blocks the gaze and affect of others. The skin manifests merely a physical phenomenon, though, not the women's characteristics in psychological terms. We cannot break through the surface of the skin to glimpse their soul. This fact confers the women with the ability to defend their right to self-determination. The material presentation of skin challenges the standards of beauty and physical beauty that we, the audience, have by juxtaposing the female bodies of the supposedly young and attractive women with the older female body of the teacher, and even more effectively desexualizes the gaze that attempts to signify the body as something sensational and historically inherent to ballet.

Having exposed their naked bodies, the old teacher begins filming them pornographically with a video camera. The footage appears on a large LCD onstage in real time, the fragmented close-ups trapping the audience in a state of voyeurism unless they look away from the stage. With the disgruntled faces of the women shown on the screen, the mistress conducts a rapturous critique of their vaginas to bring the first act to a close. Holzinger here takes the sexualization of women, something usually regarded as a male act, and expresses it through someone with an older, female body, thus incorporating fierce critical engagement into the performance. A feminist insistence on desexualizing—that is, taking off the “uniforms” ordained by our male-dominated society in order to achieve self-determination—disrobes the female students, but an ironic caricature simultaneously exists in which the old teacher dons another

ルするというこの意味が、自由に舞うという目的から「身の処し方」という手段へとその意味を変え、自分の身体をコントロールする力を得るためのものであるはずの指導が「他者による身体支配の方法」へと変化する。しつこいほどに時間をかけておこなわれるレッスンを1つ終えるたびに女生徒たちは1つの型を手に入れ、しかし同時に1枚ずつ衣服を脱ぎ捨てていくことになる。第一幕はそのほとんどが各レッスンの描写にあてられており、この時間の経過を感じさせる演出によって、女生徒たちの思考がゆっくりと1つずつ奪われ、支配されていく姿が効果的に描かれている。この演出によって、自己決定権を脅かされ従順であることを求められた女生徒たちは、『春の祭典』の「神への生贄として踊らされる乙女」と同様の役割を付されることとなる。

同時に、このバレエ・レッスンのシーンで特徴的に感じられたのは、女生徒たちがそれぞれバラバラにトレーニングウェアを脱ぎ捨てていく度に、着衣と脱衣の入り混じったチグハグな印象の身体がたちあがってくる点だ。彼女たちは一貫して「身体をより良く見せる」こと、つまりバレエの美学的型の背後にある、センセーショナルな身体を求める観客からの欲望の眼差しを拒絶している。この拒絶は衣装をすべて脱ぎ捨ててからも力を失わない。そこにあるのはただ裸の女性が眼前にいるという事実の提示だ。これは「老教師」の裸体についても同じことが言える。世界と自己との接触面としての皮膚は、他者の視線や情動を阻むバリケードとなる。皮膚があらわすのは心理化された彼女たちの人物性ではなく物質的な現象でしかない。いかなるものも肌の下に押し入り「魂」を覗き見ることはできないのだ。この事実は彼女たちの自己決定権を堅守し力を与える。また、この物質としての皮膚の提示は、彼女たちの若く美しいとされる女性身体と「老教師」の年齢を重ねた女性身体が並置されることで、わたしたち観客の「美しさ」や「肉体美」の基準を揺さぶり、バレエに歴史的に内包されるセンセーショナルなものとして身体を意味づけようとする眼差しを、より一層効果的に非官能化する。

一方で、裸体を晒した女生徒たちを前に、「老教師」はビデオカメラでのポルノグラフィ的な撮影を始める。その映像は舞台上の大型液晶にリアルタイムで投影され、断片化されクローズアップされたその窺視狂的映像から、観客は舞台から目をそらさない限り逃れることはできない状況に置かれる。そして女生徒たちの不満げな表情が液晶に映されるなか、「老教師」が歓喜の声を上げながらヴァギナへの講評をおこなっていくシーンで第一幕は閉幕する。このような一般に男性のものにとらえられている「女性を性的に意味づける」行為を、年齢を重ねた女性の身体を持つパフォーマーに表象させていることは本作品の演出において痛烈な批判性が込められているのではないだろうか。ここでは、非官能化、つまり自己決定権獲得のために男性優位社会で形成

obtain compliant bodies. Stretching the skin—an attempt to escape the closed vessel that is the body by expanding it conceptually—widens the barricade that blocks the gaze and affect of others; in *TANZ*, it aims to liberate the body.

Modern dance pioneer Isadora Duncan criticized the nymphlike bodies of ballet’s that dance weightlessly in the air, à la international ballet star Anna Pavlova in her white tutu and en pointe, calling them “unnatural” and “forced.”² Ballet shoes are especially emblematic of this, warping the shape of a dancer’s feet so much that they bleed. If we follow this train of thought, the hooks used in body suspensions start to take on the same characteristics as ballet shoes. But what bears reaffirming here is that *TANZ* is not intended as a criticism of ballet, to which Holzinger has attested at various times. We are all free to treat our bodies how we like and, much as ballerinas don ballet shoes to defy gravity, the women in *TANZ* stick hooks into their shoulder blades and take flight. In terms of the right to bodily autonomy, *TANZ* is a work that presents new principles in regard to the problematics of the body across dance history.

We may seem very different from what you expect to see on a stage. And yet, we fly freely and in our own ways. This, perhaps, was the message the performers in *TANZ* were whispering to us, the audience. And at that time, we are able to look away from the world unfolding onstage. This, indeed, is our right to bodily autonomy, and that *TANZ* urges us to assert this right is surely what makes it so artistically significant.

は、他者の視線や情動を阻むバリエードの拡張であり、本作品においては、自由な身体の獲得を目指すものとなるのだ。

モダン・ダンスの祖と言われるイサドラ・ダンカンは、世界にバレエを広めたアンナ・パヴロワの純白のチュチュに含まれた姿やポワントにみられる宙を舞う妖精的な身体を「不自然な、強いられた身体」と評した*2。ダンサーの足を変形させ時に血まみれにするバレエシューズはその象徴であるともいえる。そのように考えたとき、サスペンションのためのかぎ針はバレエシューズと同様の性質を持ち始める。しかしここで一度確認しておきたいのは、ホルツィンガーが各所で明言しているように、本作ではバレエを批判することは目的とされていないということだ。誰もが自身の身体を好きに扱う自由があり、バレエダンサーがバレエシューズを履き重力に逆らうように、彼女たちは翼のつけ根をかぎ針で貫き宙を舞うのだ。この身体の自己決定権という点で、本作品はダンス史における身体性の問題に対して新たな理念を提示する作品となっているといえる。

わたしたちの姿はあなたたちが舞台上に期待する姿とはかけ離れているかもしれない。だけどわたしたちは確かに、自分のやり方で自由に宙を舞っている。『TANZ』の公演はわたしたち観客にこうささやくかもしれない。その時、この公演がみせる世界から目を背けることもわたしたちはできる。それこそが「身体の自己決定権」であり、その行使をわたしたちに迫ることこそが、本作品の芸術的意義であるといえる。

引用文献
*1 Stelarc,1995, "Von Psycho- zu Cyberstrategien: Prothetik, Robotik und Tele-Existenz," <i>Kunstforum International</i> , vol. 132: Die Zukunft des Körpers I, Nov. 1995-Jan. 1996.
*2 DUNCAN, Isadora, Sheldon Cheney (ed.), 1928, <i>The Art of the Dance</i> : <i>Isadora Duncan</i> , Helen Hacket (小倉重夫 (訳編), 1977, 『イサドラ・ダンカン 芸術と回想』, 富山房)

田中 淳士
京都大学大学院　人間・環境学研究科博士課程在籍。文化政策研究。

a motorbike can be interpreted as the representation of institutional androcentrism that is bestowed with excessive power. But the bikes are emasculated when the stage for the performance shifts to midair. Suspended from the ceiling with their engines revving, the spinning wheels of the bikes take us nowhere, unable to fulfill their essential function. Even so, the women ride the bikes and make them submit. The performance then comes to a close with the erstwhile students leaving behind eerie signs that they too are transforming into entities endeavoring to train bodies into the physical compliance inherent to the Romantic ballet. That we can see the potential for the feminist insistence on taking off what society has prescribed women must wear to evolve into the act of donning another uniform for the purposes of satisfying oneself as a caricatured composition replete with layers of meaning is because this work is not simply an expression of female opposition to the gaze that sexualizes women, but rather something broader that connects to the theme of liberating the body and making it yours.

I would like to finish with a discussion of the second act’s suspensions, likely the part most striking and shocking for audiences. A body suspension is a performance in which the body is hung in the air by piercing the skin with large hooks that are attached to rigging. In *TANZ*, one of the performers sticks hooks into her body near the shoulder blades—that is, where an angel has their wings—and is suspended some ten meters in the air, where she spins around and around. The performance artist Stelarc, who undertook twenty-five body suspensions on himself in the 1970s and 1980s, once described his performances as the “detection and scrutiny of the body by means of showing its physical parameters and conventional capabilities.”¹ Suspension, though, is also a common part of circus acts and sideshow attractions. While Stelarc has staged his performances as a form of art, there is essentially no difference from the circus or sideshow in terms of the body involved except how the performer perceives what they are doing.

If so, which elements make this performance a work of art? The aforementioned right to bodily autonomy is surely key here. In the form of expression that is suspension, Holzinger perhaps discovered the body-as-sideshow through a different means than ballet, and simultaneously uncovered the potential to break down the division between high culture and entertainment. Stelarc’s demonstration in his suspensions, as described above, of the physical parameters and conventional capabilities of the body arguably has an affinity with the way in which the capabilities of dancers’ compliant bodies are showcased as the accomplishments of ballet training. The reason is that they emphasize the body as something that expresses, rather than is expressed. An act akin to torture is accompanied by pain and risks similar to those experienced by female students through their ballet training that enables them to

ることができるだろう。しかしこのバイクは宙を舞台にしたとき無力化される。天井に吊り上げられエンジンを吹かしながらも空転するタイヤは本来の機能を果たさず、わたしたちをどこかへつれていくことはない。しかし彼女たちはこれを乗りこなし、従順に従わせていく。しかし、今度はそこで元女生徒たちが、ロマンティック・バレエが内包していた従順な身体を訓練しようとする主体へと変化していくような不穏な気配を残して本舞台は幕を下ろす。このような「お仕着せを脱げ」というフェミニズム的主張が自身を満足させるための「お仕着せ」になってしまう可能性を、重層的に孕んだカリカチュアの構図としても観ることができるからこそ、この作品は単に女性を性的に意味づける眼差しへの女性の反抗というだけでなく、「私のものとしての身体の解放」という主題へとつながる広がりを持つものであるといえる。

最後に本作品において、最も印象的であり且つ観客にショッキングな印象を与えるであろう第二幕におけるサスペンション・パフォーマンスについてふれる。サスペンションとは、複数の大きなかぎ針で皮膚を貫き自分の身体を吊り下げるパフォーマンスだ。本作品では、演者の一人が肩甲骨付近、つまり天使の翼の位置にかぎ針を突き刺し、10mほどの高さに身体を吊り下げ空中でぐるくと舞うパフォーマンスがおこなわれた。サスペンションという表現について、70年代から80年代にかけて、25回にわたり自身の身体でサスペンションをおこなった現代美術家のステラークは、自身のパフォーマンスを「身体の肉体的パラメータと通常の能力を示すことによる身体の探知と穿鑿せんさく」であると述べている*1。一方で、サスペンション自体は見世物小屋やサーカスの演目としてしばしば行われるものでもある。ステラークは自身のパフォーマンスを芸術として行っているが、その自己認識を除いてその表現する身体に本質的な違いは存在しない。

では、いかなる要素が本舞台を芸術作品として成り立たせているのだろうか。その際には、これまで度々ふれてきた「身体の自己決定権」が鍵概念となるだろう。ホルツィンガーはサスペンションという表現に、バレエとは異なる方法で「見世物にされた身体」を見出し、また同時にハイカルチャーとエンターテインメントの境界を打破しうる可能性を見出したのかもしれない。先に述べたステラークのサスペンションにおける身体の肉体的パラメータと通常の能力提示は、バレエ・トレーニングの成果としての従順な身体の能力提示と共通性があるといえる。なぜなら、そこでは表現されるものよりも表現する身体に比重が置かれているからだ。この一種の拷問的な行為は、女生徒たちがバレエ・トレーニングによって「従順な身体」を手に入れるために体験した苦痛と危険と同様のものを伴っている。皮膚の伸張、概念拡大によって身体という密閉された器から脱出することの企図

D

dancereflections-vancleefarpels.com



Other Programs

77

DANCE BY
REFLECTIONS
VAN CLEEF & ARPELS

SUPPORTING
CONTEMPORARY
DANCE

R

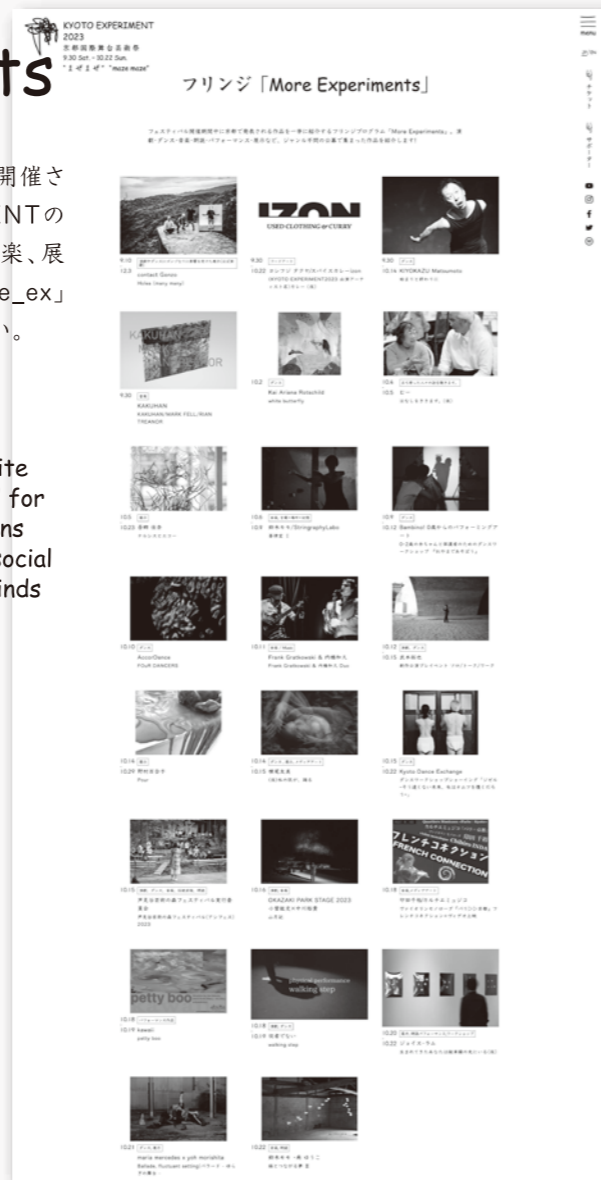
Fringe: More Experiments

フリンジ「More Experiments」は、フェスティバルと同時期に京都で開催される舞台公演やイベントを紹介するプログラム。KYOTO EXPERIMENTのウェブサイトでは、ジャンル不問の公募で集まった、演劇やダンス、音楽、展示、朗読など、全26作品を紹介しています。これらの公演情報は「#more_ex」のハッシュタグでSNSにも投稿されていくので、ぜひ検索してみてください。

10月の京都は、街のあちこちで舞台作品に出会えそうな予感!

Fringe: More Experiments introduces performances and events happening in Kyoto during the festival period. On the festival website you can find a total of twenty six works gathered from an open call for submissions of any genre, including theater, dance, music, exhibitions and readings! You can also search for the hashtag "#more_ex" on social media for more information. This is a great way to experience all kinds of performances all over Kyoto in October!

<https://kyoto-ex.jp/fringe>



ブックフェア Book Fair

参加アーティストの関連書籍や、今年のフェスティバルのキーワード「まぜまぜ」をテーマに集めたKYOTO EXPERIMENTブックフェアを「京都岡崎 蔦屋書店」で開催します。ここでしか購入できない、KYOTO EXPERIMENTオリジナルグッズも販売します。よりフェスティバルを楽しむために、観劇前後にぜひお立ち寄りください。

日程 9.30(土)ー10.22(日)

営業 8:00-20:00

会場 京都岡崎 蔦屋書店

During the festival the Kyoto Experiment Book Fair is held at Kyoto Okazaki Tsutaya Books. In addition to books by and about the artists, there is also a series of recommended books in relation to the festival's key concept maze maze as well as original festival merchandise. Visit the fair to learn more!

Dates: 9.30 (Sat)-10.22 (Sun)

Open: 8:00-20:00

Venue: Kyoto Okazaki Tsutaya Books

関連プログラム Related Programs

舞台芸術を通じた地域活性化のため、KYOTO EXPERIMENTが他団体と共に取り組む2つの人材育成プログラムを紹介。共同ディレクターが講師で登場する講義もあり。詳細はウェブサイトを確認を。

In conjunction with other organizations, Kyoto Experiment is working on two programs aimed at developing the next generation of regional cultural workers in the performing arts. You can also check out the lecture by the festival's co-directors that is part of one of the programs! See the festival website for details.

舞台芸術プロデューズ講座～演劇・ダンス編～ Performing Arts Producer Course – Theater and Dance Edition

主にユース層を対象にした、地域の舞台芸術のプロデューズ・企画制作領域の専門人材の育成プログラム。

期間 2023年10月ー2024年1月 全9回

会場 ロームシアター京都、京都芸術センター

A program to develop the next generation of talent in the field of producing in regional performing arts.

Dates: October 2023-January 2024, total of 9 sessions

Venue: ROHM Theatre Kyoto and KYOTO ART CENTER



インキュベーション キョウト Incubation Kyoto

京都市を拠点とする文化芸術関係団体が協働し、地域の若年層が広い視点でこれからの舞台芸術を考え、志すきっかけとなるための多彩な人材育成プログラムを実施する。

期間 2023年7月ー2024年1月

Kyoto-based arts and culture-related organizations will collaborate to implement a variety of human resource development programs to encourage young people in the region to think about the performing arts from a broad perspective and aspire to become involved in the future.

Dates: July 2023-January 2024

主催: ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、KYOTO EXPERIMENT、NPO法人京都舞台芸術協会、京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)、京都市

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業(地域の中核劇場・音楽堂等活性化)) 独立行政法人日本芸術文化振興会

Organized by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto Experiment, Kyoto Performing Arts Organization, KYOTO ART CENTER (Kyoto Arts and Culture Foundation), Kyoto City

Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan through the Japan Arts Council



主催: ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、KYOTO EXPERIMENT、京都市東山青少年活動センター、THEATRE E9 KYOTO(一般社団法人アーツシード京都)、京都市、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業(アートキャラバン2)) 独立行政法人日本芸術文化振興会 事業名: JAPAN LIVE YELL project

Organized by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto Experiment, Kyoto City Higashiyama Youth Activity Center, THEATRE E9 KYOTO (Arts Seed Kyoto), Kyoto City, GEIDANKYO (Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations)

Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan through the Japan Arts Council, "JAPAN LIVE YELL project"



提携プログラム Partner Programs

KYOTO EXPERIMENTのパートナーによる、舞台公演やイベントを紹介。
詳細はQRコードからウェブサイトへアクセスを。
Performances and events from Kyoto Experiment's partners.
Please access the website from the QR code for details.

演劇 Theater

京都学生演劇祭 2023 Kyoto Student Theater Festival 2023



🕒 9.9 (Sat)-9.16 (Sat)

📍 養正市営住宅6号棟跡地 野外特設舞台
Special outdoor stage, Site of Yosei City Housing Building 6

「今、京都で最もおもしろい舞台をつくる学生劇団はどこか」という問いに答えるべく始まった京都学生演劇祭。13年目を迎える今年、KYOTO EXPERIMENT共同ディレクターのジュリエット・ナップが審査員として参加。従来の概念に捉われず、実験的な創作を試行錯誤しチャレンジした作品および団体に対して「KYOTO EXPERIMENT賞」を授与します。

Kyoto Student Theater Festival was started with the aim of answering the question, "Which student theater company is creating the most interesting performances in Kyoto today?" This year, which marks the festival's thirteenth edition, Kyoto Experiment co-director Juliet Knapp participates as a judge. The "Kyoto Experiment Award" will be given to a work or group that has taken on the challenge of experimenting through trial and error and creating work unbound by conventional concepts.

主催: 京都学生演劇祭実行委員会

Presented by Kyoto Student Theater Festival Executive Committee

イベント Events

かがわデルタフェスティバル 多文化まつり Kamogawa Delta Festival Multicultural Festival



🕒 9.16 (Sat)

📍 養正児童公園「希望の広場」
Kibo no Hiroba, Yōsei Jidō Park

主催: かがわデルタフェスティバル実行委員会

Presented by Kamogawa Delta Festival Executive Committee

演劇 Theater

豊岡演劇祭 2023 Toyooka Theater Festival 2023



🕒 9.14 (Thu)-9.24 (Sun)

📍 豊岡市民プラザ、豊岡市民会館、芸術文化観光専門職大学、城崎国際アートセンター、江原河畔劇場、やぶ市民交流広場、香住区中央公民館ほか
Toyooka Creative Community Plaza, Toyooka Citizens' Hall, Professional College of Arts and Tourism, Kinokuni International Arts Center, Ebara Riverside Theatre, YB fab, Kasumi Ward Central Community Center and other locations

主催: 豊岡演劇祭実行委員会

Presented by Toyooka Theater Festival Executive Committee

イベント Events

OKAZAKI PARK STAGE 2023



🕒 9.30 (Sat)-10.28 (Sat)

📍 ロームシアター京都 ローム・スクエア
ROHM Square, ROHM Theatre Kyoto

企画製作: ロームシアター京都

主催: ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市

助成: 令和5年度 文化庁 文化資源活用推進事業

Planned and Produced by ROHM Theatre Kyoto

Presented by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto City

Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, Fiscal Year 2023

イベント Events

ニュイ・ブランシュ KYOTO 2023 Nuit Blanche Kyoto 2023



🕒 9.30 (sat)-10.28 (Sat)

📍 京都駅ビル、関西日仏学館、京都市内各所
Kyoto Station Building, Institut français du Kansai and various locations around Kyoto City

主催: 京都市、関西日仏学館

プロデュース&コーディネーション: MUZ ART PRODUCE

Presented by Kyoto City, Institut français du Kansai

Production and Coordination: MUZ ART PRODUCE

上映会 Screening

ロームシアター京都 フィルムプログラム ROHM Theatre Kyoto Film Program



🕒 10.13 (Fri)-10.15 (Sun)

📍 ロームシアター京都 サウスホール
South Hall, ROHM Theatre Kyoto

主催: ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市

助成: 令和5年度 文化庁 文化資源活用推進事業

Presented by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto City

Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, Fiscal Year 2023

パフォーマンス Performance

黒木結『鑑賞のプロセス:フランシス・アリス』 Yui Kuroki Appreciation Process: Francis Alÿs



🕒 10.21 (Sat)-10.22 (Sun)

📍 THEATRE E9 KYOTO

主催:鑑賞のプロセス2023
共催:THEATRE E9 KYOTO(一般社団法人アーツシード京都)
助成:京都府文化力チャレンジ補助事業
Presented by Appreciation Process 2023
Co-presented by THEATRE E9 KYOTO (Arts Seed Kyoto)
Supported by Kyoto Prefecture Culture Challenge Support Scheme

演劇 Theater

『公文協アートキャラバン事業 劇場へ行こう 3』参加事業

『老いと演劇』OiBokkeShi『レクリエーション葬』



GO! GO! Theater!! 3 Participating project

Re-Creation Ceremony

🕒 10.22 (Sun)

📍 ロームシアター京都 ノースホール
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

製作:公益財団法人岡山文化芸術創造、「老いと演劇」OiBokkeShi
主催:ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市、公益社団法人全国公立文化施設協会
助成:文化庁文化芸術振興費補助金統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業(アートキャラバン2)|独立行政法人日本芸術文化振興会
Produced by Okayama cultural arts Creation Foundation, "Aging and Theater" company OiBokkeShi
Presented by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art and Cultural Promoting Foundation), Kyoto City, The Association of Public Theaters and Halls in Japan
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan through the Japan Arts Council

イベント/ワークショップ Event / Workshop

Gathering in a better world – Visual Vernacular



🕒 10.22 (Sun)

📍 ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川
Goethe-Institut Villa Kamogawa Hall

主催:ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都
協力:大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館
Presented by Goethe-Institut Osaka Kyoto
In co-operation with Consulate-General of Germany in Osaka-Kobe

オーディオビジュアルコンサート Audio Visual Concert

Ryoji Ikeda ultratronics [live set]



🕒 10.27 (Fri)

📍 ロームシアター京都 ノースホール
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

主催:codex | edition
Presented by codex | edition

上映会/トーク Screening / Talk

太陽劇団『1789』上映 & アリアーヌ・ムヌーシュキンとのトーク Théâtre du Soleil "1789" Screening & Open Discussion with Ariane Mnouchkine



🕒 10.29 (Sun)

📍 京都芸術劇場 春秋座
Kyoto Art Theater Shunjuza

主催:京都芸術大学舞台芸術研究センター、ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
特別協賛:公益財団法人稲盛財団
Co-presented by Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of the Arts, ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)
Special Sponsorship by Inamori Foundation

演劇 Theater

太陽劇団(テアトル・デュ・ソレイユ) 『金夢島 L'ÎLE D'OR Kanemu-jima』



Théâtre du Soleil L'ÎLE D'OR Kanemu-jima

🕒 11.4 (Sat)-11.5 (Sun)

📍 ロームシアター京都 メインホール
Main Hall, ROHM Theatre Kyoto

主催:ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市
共催:京都新聞 特別協賛:公益財団法人稲盛財団
助成:アンステイチュ・フランセ バリ本部 / LVMH
協賛:シャネル合同会社 後援:在日フランス大使館 / アンステイチュ・フランセ、京都市教育委員会
文化庁 劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業
共同招聘:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

Presented by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto City
Co-presented by The Kyoto Shimbun Special Sponsorship by Inamori Foundation
Sponsored by LVMH and supported by Institut français in Paris
Sponsored by CHANEL G.K.
Cooperated by the Embassy of France in Japan/ Institut français du Japon
Supported by The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal
Nominal support by Kyoto City Board of Education
Japan tour jointly organized by Tokyo Metropolitan Theatre, Foundation for History and Culture

交換プログラム Exchange

Watch & Talk

舞台芸術の分野で活躍する新進気鋭のアーティストに、理論と実践の両面から交流の場を提供する国際プログラム「Watch & Talk」を、KYOTO EXPERIMENT 2023 がホストする。数カ国から選出されたメンバーは、ファシリテーターとともに作品を鑑賞。フェスティバルに参加するアーティスト、批評家らとのディスカッションにも参加する。

Kyoto Experiment will host the Watch & Talk international program to offer up-and-coming stage practitioners a platform for in-depth exchange in both theoretical and practical fields. Young artists from several countries are selected and given the possibility of participating in an intensive week of discoveries: accompanied by a facilitator, they will watch and discuss a wide variety of performances, meet professional theatre practitioners from all over the world and take part in debates with artists, critics and specialists of the performing arts who are attending the festival.

運営:Materialise
助成:公益財団法人セゾン文化財団、National Culture and Arts Council(台湾)、Pro Helvetia(スイス)他

Watch & Talk is organised in collaboration with Materialise (HK), with the precious support of The Saison Foundation (JP), National Culture and Arts Council (TW), Pro Helvetia (CH) and other regional partners.



KYOTO EXPERIMENT



TAKENAKA
SOLID WATER

株式会社タケナカは KYOTO EXPERIMENT に映像機材協力しています

株式会社タケナカ 京都営業所

〒612-8415 京都府京都市伏見区竹田中島町 251

TEL 075-647-3111(代) <http://www.takenaka-co.co.jp>

TOKYO OSAKA NAGOYA SHANGHAI

 SYMUNITY GROUP



HASE BUILDING GROUP

OFFICE, WORK SPACE, APARTMENT
EVENT SPACE etc...



株式会社 長谷ビル

604-8152 京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645 TEL 075-213-2020 | FAX 075-213-2010 | hase-building.co.jp

KYOTO EXPERIMENT

京都国際舞台芸術祭

2023

主催

京都国際舞台芸術祭実行委員会
京都市
ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)
京都芸術大学 舞台芸術研究センター
THEATRE E9 KYOTO(一般社団法人アーツシード京都)

助成

文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(国際芸術交流支援)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
一般財団法人地域創造
公益社団法人企業メセナ協議会 社会創造アーツファンド

助成(個別プログラムに対する)

文化庁文化芸術振興費補助金(統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業(アートキャラバン2)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
事業名: JAPAN LIVE YELL project
(アリス・リボル / Cia. REC)

公益財団法人セゾン文化財団
(ウィチャヤ・アートマート / For What Theatre)

香港芸術發展局(サムソン・ヤン)

共同主催

独立行政法人国際交流基金
(ウィチャヤ・アートマート / For What Theatre)
*令和5年度国際交流基金舞台芸術国際共同制作事業として制作

公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
(アリス・リボル / Cia. REC)

Dance Reflections by ヴァン クリーフ& アーベル
(ルース・チャイルズ&ルシнда・チャイルズ)

特別協賛

株式会社社長谷ビル

協賛

株式会社アイ・ディー・エー、有限会社香山建築研究所、
大和リース株式会社、株式会社備繕

特別協力

オーストラリア大使館

後援

アルゼンチン共和国大使館

機材協力

照明機材協力: 株式会社流(RYU)
音響機材協力: 有限会社クワット
映像機材協力: 株式会社タケナカ

協力

Art Collaboration Kyoto、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館、
かもがわデルタフェスティバル、KAGANHOTEL、京都岡崎 葛屋書店、
京都学生演劇祭 2023、京都市京セラ美術館、祇園商店街振興組合、
ケベック州政府在日事務所、ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都、
codex | edition、The side、THE REIGN HOTEL KYOTO、
四糸繁栄会商店街振興組合、豊岡演劇祭2023、ニュイ・ブランシュ
KYOTO 2023、node hotel、BnA Alter Museum、HOSOO
GALLERY、ホテル アンテルーム 京都、MAGASINN KYOTO

サポーター

一般社団法人ベンチ、中井康道税理士事務所

スペシャルサンクス
KEXサポーターのみなさま

主催 / Organized by



ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto



THEATRE
EQ KYOTO

助成 / Supported by



THE SAISON FOUNDATION



共同主催 / Specific individual programs are co-presented by



DANCE REFLECTIONS BY
VAN CLEEF & ARPELS
<https://www.dancereflections-vancleefarpels.com/en>

特別協賛 / Special Sponsorship from



協賛 / Sponsored by



香山建築研究所
KOHYAMA ATELIER



特別協力 / With the special cooperation of



後援 / Sponsorship



機材協力 / With the stage equipment cooperation of



協力 / With the cooperation of



京都国際舞台芸術祭実行委員会

天野文雄(能楽研究者／大阪大学名誉教授)
<p>副委員長:</p> 森川佳昭(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団専務理事)
<p>委員:</p> 安藤善隆(京都芸術大学 舞台芸術研究センター所長／同大学教授) 梅山いつき(演劇研究者／近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授) 小倉由佳子(ロームシアター京都事業課長) 小崎哲哉(ICA京都 REALKYOTO FORUM編集長) 蔭山陽太(一般社団法人アーツシード京都理事／THEATRE E9 KYOTO支配人) 小山田 徹(美術家／京都市立芸術大学教授) 牧澤 憲(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課事業推進担当課長) 山下 聡(公益財団法人京都市芸術文化協会専務理事兼事務局長) 吉岡 洋(美学者／京都芸術大学 文明哲学研究所教授)
<p>監事:</p> 東 憲明(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団／ロームシアター京都副館長) 倉谷 誠(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課長)
<p>顧問:</p> 太田耕人(演劇評論家／京都教育大学学長) 茂山あきら(狂言師／NPO法人京都アーツミーティング理事長／THEATRE E9 KYOTO館長) 篠原資明(京都大学名誉教授) 千 宗室(裏千家家元) 建畠 哲(詩人／美術評論家／京都芸術センター館長) 畑 律江(毎日新聞客員編集委員／大阪芸術大学短期大学部客員教授) 平田オリザ(劇作家・演出家／劇団「青年団」主宰／芸術文化観光専門職大学学長)

(五十音順)

88

京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局

<p>共同ディレクター:</p> 川崎陽子、塚原悠也、ジュリエット・礼子・ナップ
<p>事務局長:垣脇純子</p> 事務局:井上美葉子、門脇俊輔、渡邊裕史
<p>広報:前田瑠佳、豊山佳美、小倉千裕</p> 広報アドバイザー:松本花音(ロームシアター京都)
<p>広報サポート:當間 芽</p> 制作統括:山崎佳奈子(KANKARA Inc.)
<p>制作:勝冶真美、清水 翼(KANKARA Inc.)、武田侑子、眞鍋隼介</p> [ロームシアター京都]垣田みずき、枘谷雄一郎
<p>[京都芸術センター]瀬藤 朋、中谷圭佑、平居香子</p> [京都芸術大学 舞台芸術研究センター]後藤孝典、藤井宏水
<p>[THEATRE E9 KYOTO]奥山愛菜、木元太郎</p> Kansai Studiesコーディネーター:山本佳奈子
<p>ミーティングポイント運営:原田桃望</p> テクニカルディレクター:夏目雅也
<p>テクニカルコーディネーター:北方こだち、小林勇陽</p> テクニカルデスク:さかいまお
<p>事務局インターン:永澤萌絵、山田美季子</p> ドキュメントコーディネート:MUESUM(多田智美、永江 大、鈴木瑠理子)
<p>和文英訳:Art Translators Collective(リリアン・キャンライト、水野響、森本優芽、内山もにか)、ウィリアム・アンドリュース</p>
<p>アートディレクション・デザイン:小池アイ子</p> 映像・写真ディレクション:slide//show(松見拓也、金成基、嶋田好孝、守屋友樹)
<p>ウェブディレクション:bank to LLC.(光川貴浩、早志祐美、松田寛志)</p> ウェブデザイン:吉田健人(bank to LLC.)
<p>ウェブプログラム・コーディング:人見和真(bank to LLC.)、若林成実(bank to LLC.)</p>

アドバイザーボード:

レザ・アフィシナ(アーティスト、「ルアンルパ アーツラボラトリー」ディレクター)
細尾真孝(株式会社細尾 代表取締役社長)
アンナ・ヴァグナー(フランクフルト・ムゾントウルム劇場アーティストティック&マネージング・ディレクター)

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee

Chair <p>Fumio Amano (Noh Researcher / Professor Emeritus, Osaka University)</p>
Vice Chair <p>Yoshiaki Morikawa (Managing Director, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)</p>
Committee Members <p>Yoshitaka Ando (Professor, Director of Kyoto Performing Arts Center) Itsuki Umeyama (Theater Researcher / Associate Professor, Department of Arts, Kindai University) Yukako Ogura (Program Director, ROHM Theatre Kyoto) Tetsuya Ozaki (Editor-in-Chief, REALKYOTO FORUM, ICA KYOTO) Yota Kageyama (Director, Arts Seed Kyoto / Theatre Manager, THEATRE E9 KYOTO) Toru Koyamada (Artist / Professor, Kyoto City University of Arts) Ken Makizawa (Manager, Culture and Arts Planning Section, Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City) Satoshi Yamashita (General Manager and Secretary-General, Kyoto Arts and Culture Foundation) Hiroshi Yoshioka (Aesthetician / Professor, Institute of Philosophy and Science of Kyoto University of The Arts)</p>
Supervisors <p>Noriaki Azuma (Deputy Director, ROHM Theatre Kyoto, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation) Makoto Kuratani (Manager, Culture and Arts Planning Section, Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City)</p>
Advisors <p>Kojin Ota (Theater Critic / President, Kyoto University of Education) Akira Shigeyama (Kyogen Artist / President of NPO Kyoto Arts Meeting / Director, THEATRE E9 KYOTO) Motoaki Shinohara (Professor Emeritus, Kyoto University) Soshitsu Sen (Urasenke Grand Tea Master) Akira Tatehata (Poet / Art critic, Director, KYOTO ART CENTER) Ritsue Hata (Guest Editor, Mainichi Shimbun / Visiting Professor, Osaka University of Arts Junior College) Oriza Hirata (Playwright, Theater Director / Director of Seinendan / President, Professional College of Arts and Tourism)</p>
Names are listed in gojuun order (a system for ordering Japanese kana characters).

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

Co-directors: <p>Yoko Kawasaki, Yuya Tsukahara, Juliet Reiko Knapp</p>
Administrative Director: Junko Kakiwaki <p>Office: Miwako Inoue, Shunsuke Kadowaki, Hiroshi Watanabe Public Relations: Ruka Maeda, Yoshimi Toyoyama, Chihiro Ogura Public Relations Adviser: Kanon Matsumoto (ROHM Theatre Kyoto) Public Relations Support: Mei Toma Chief Production Coordinator: Kanako Yamasaki (KANKARA Inc.) Production Coordinators: Mami Katsuya, Tsubasa Shimizu (KANKARA Inc.), Yuko Takeda, Shunsuke Manabe [ROHM Theatre Kyoto] Mizuki Kakita, Yuichiro Masuya [KYOTO ART CENTER] Tomo Setou, Keisuke Nakaya, Kanoko Hirai [Kyoto Performing Arts Center] Takanori Goto, Hiromi Fujii [THEATRE E9 KYOTO] Mana Okuyama, Taro Kimoto Kansai Studies Coordinator: Kanako Yamamoto Meeting Point Coordinator: Momomi Harada Technical Director: Masaya Natsume Technical Coordinators: Kodachi Kitagata, Yuhi Kobayashi Technical Administration: Mao Sakai Interns: Moe Nagasawa, Mikiko Yamada Text Coordination: MUESUM Co.Ltd., (Tomomi Tada, Dai Nagae, Ruriko Suzuki) English translation from Japanese: Art Translators Collective (Lillian Canright, Hibiki Mizuno, Yume Morimoto, Monika Uchiyama), William Andrews</p>
Art Direction / Design: Aiko Koike <p>Archive Video and Photo Direction: slide//show (Takuya Matsumi, Kim Song-Gi, Yoshitaka Shimada, Yuki Moriya) Web Direction: bank to LLC. (Takahiro Mitsukawa, Yumi Hayashi, Hiroshi Matsuda) Web Design: Kento Yoshida (bank to LLC.) Web Programming / Web Coding: Kazuma Hitomi (bank to LLC.), Narumi Wakabayashi (bank to LLC.)</p>
Advisory Board: <p>Reza Afisina (Artist, Artistic Director of ruangrupa Arts Laboratory) Masataka Hosoo (President & CEO, Hosoo Co.Ltd.) Anna Wagner (Artistic and Managing Director, Künstler* innenhaus Mousonturm, Frankfurt am Main)</p>

KYOTO EXPERIMENT
2023
京都国際舞台芸術祭
magazine

京都国際舞台芸術祭実行委員会
京都市中京区少将井町229-2 第7長谷ビル 6F
Tel 075-213-5839 E-mail info@kyoto-ex.jp
<https://kyoto-ex.jp>

発行日 2023年9月8日

アートディレクション・デザイン: 小池アイ子
デザインアシスタント: 田中ヴェトリ美南海
編集: 山口紀子、前田瑠佳、豊山佳美、川崎陽子、塚原悠也、
ジュリエット・礼子・ナツ、小倉千裕
和文英訳: Art Translators Collective (リリアン・キャンライト、
水野響、森本優芽、内山もにか)、ウィリアム・アンドリュース (p.5,
10-11, 60-67, 70-75)
ドキュメントコーディネーター: MUESUM (多田智美、永江 大、
鈴木瑠璃子)

印刷・製本: 大日本印刷株式会社

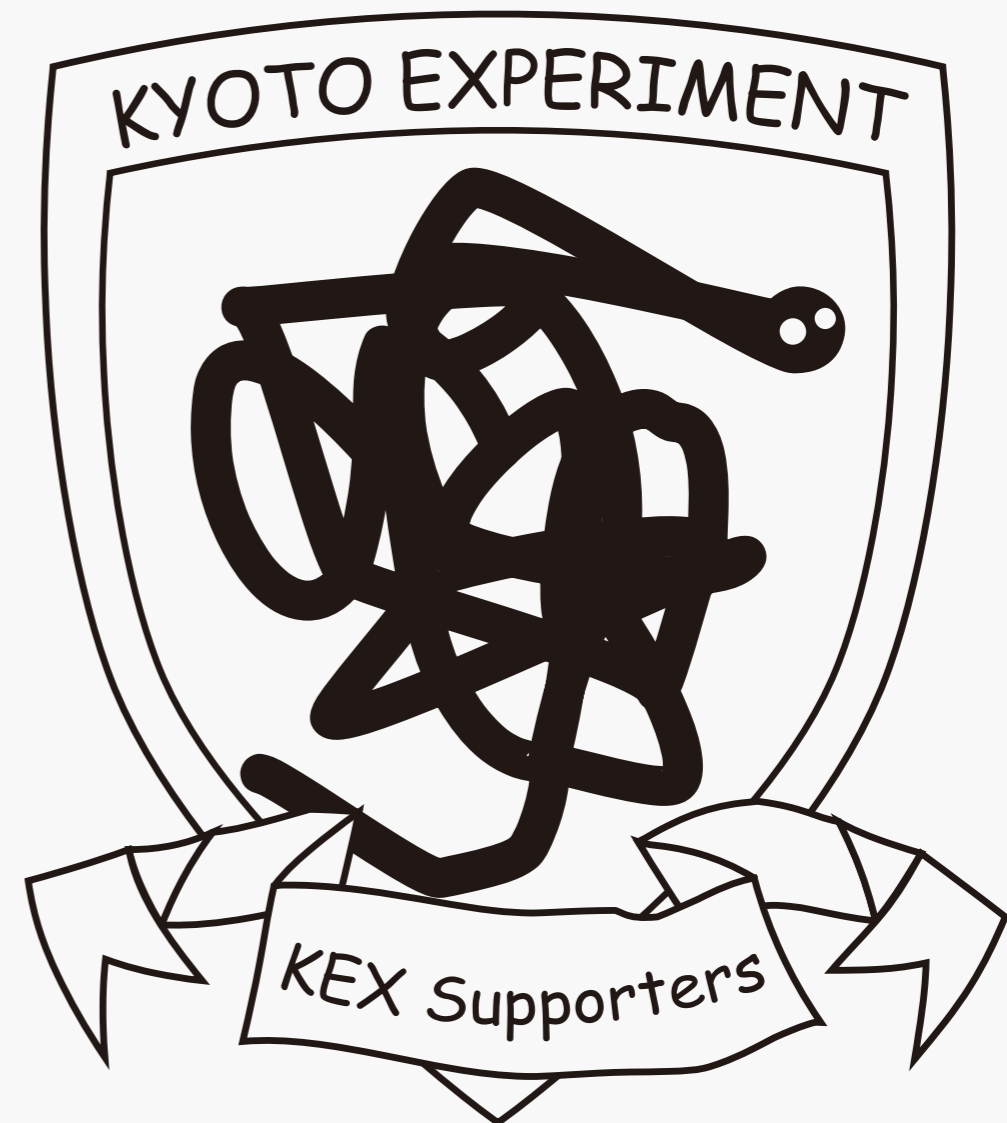
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee
6F, 7th Hase Bldg. 229-2 Shoshoi-cho, Nakagyo-ku Kyoto
Tel +81-(0)75-213-5839 E-mail info@kyoto-ex.jp
<https://kyoto-ex.jp/en>

Published September 8th, 2023

Art Direction & Design: Aiko Koike
Design assistant: Minami Wetli Tanaka
Editing: Noriko Yamaguchi, Ruka Maeda, Yoshimi Toyoyama,
Yoko Kawasaki, Yuya Tsukahara, Juliet Reiko Knapp, Chihiro Ogura
English translation from Japanese: Art Translators Collective
(Lillian Canright, Hibiki Mizuno, Yume Morimoto, Monika Uchiyama),
William Andrews (pp.5, 10-11, 60-67, 70-75)
Text Coordination: MUESUM Co.Ltd., (Tomomi Tada, Dai Nagae,
Ruriko Suzuki)

Printing: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

© KYOTO EXPERIMENT



KEXサポーター追加募集中!
Become a KEX Supporter!

募集期間: 2023.9.20-10.22
You can sign up to become a KEX Supporter from: 9.20-10.22

応援しながらフェスティバルを楽しもう!
フェスティバルがこれからも継続・発展できるよう、
みなさまからのご寄付を引き続き受け付けています。
寄付金は「ふるさと納税」の対象となり、税の控除が受けられます。
クリエイティブな実験の場を、この先の未来にも——
ぜひ、ご支援をお願いします!



プログラムチケット料金 Tickets

前売料金 Advanced Ticket Price	一般 Adult	ユース*1・学生 Youth ¹ , Students	高校生以下 High School Students & Younger	ペア*2 Pair ²	席種 Seating	
イ・ラン Lang Lee	¥2,000	¥1,500	¥1,000	×	参加料 Participation Fee	
ウィチャヤ・アートマート Wichaya Artamat / For What Theatre	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500	自由席 Unreserved	
チェルフイツチュ chelfitsch	¥4,000	¥3,000	¥1,000	¥7,500	自由席 Unreserved	
アリス・リポル Alice Ripoll / Cia. REC	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500	自由席 Unreserved	
バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre	¥4,000	¥3,000	¥1,000	¥7,500	自由席 Unreserved	
山内祥太 & マキ・ウエダ Shota Yamauchi & Maki Ueda	¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500	自由席 Unreserved	
中間アヤカ*3 Ayaka Nakama ³	1 week tickets	¥4,000	¥3,000	¥1,000	¥7,500	入場券 Admission ticket
	1 day tickets	¥2,500	¥2,000	×	¥4,500	入場券 Admission ticket
ルース・チャイルズ & ルシンダ・チャイルズ Ruth Childs & Lucinda Childs	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500	自由席 Unreserved	
ダイナ・ミシェル Dana Michel	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500	入場券 Admission ticket	
マリアーノ・ベンソッティ Mariano Pensotti / Grupo Marea	¥5,000	¥3,000	¥1,000	¥9,500	指定席 Reserved	
サムソン・ヤン Samson Young	入場無料 Free admission			-	-	
Kansai Studies	パブリックイベントを予定しています。詳細はウェブサイトをご覧ください。 A public event is planned for Kansai Studies. Please see the festival website for more information.			-	-	
Super Knowledge for the Future [SKF] ⁴	無料・予約優先 (一部有料)	Free admission Some events require a fee.		自由席 Unreserved	-	
ミーティングポイント Meeting Point	入場無料 Free admission			-	-	

- 1 25歳以下
2 前売のみ
3 中間アヤカ公演は公演期間中に何度でもご入場いただける「1weekチケット」と、ご指定の1日のみご入場いただける「1dayチケット」があります。
4 SKFのプログラムはKYOTO EXPERIMENTウェブサイトよりご予約ください。

- 1 25 and under
2 Advanced tickets only
3 One week tickets for Ayaka Nakama's *The Odoriba Legend* allow the holder to enter as many times as they wish during the performance period. One day tickets allow the holder to enter on one specific day.
4 Please make reservations for the SKF program through the festival website.

当日券について

- ★ 当日券は前売料金+¥500 (高校生以下、イ・ラン公演、中間アヤカ公演1weekチケットは同額)。
- ★ 前売券が完売した場合は、当日券の販売がない公演もあります。
- ★ 当日券の有無については、公演当日に公式Twitterアカウントでご案内します。

Day Tickets

- ★ Day tickets +¥500 (excludes Lang Lee, Ayaka Nakama one week ticket). Day tickets for high school students & younger are the same price as advance tickets.
- ★ If advance tickets for a performance sell out, there may be some cases in which day tickets for that performance are not available.
- ★ Please check our official Twitter account on the day of the performance for information on whether day tickets are available.

ご注意

- ★ 各公演の受付開始は、開演時間の60分前からです。(イ・ラン公演と中間アヤカ公演を除く)
- ★ ユース・学生、高校生以下チケットをご購入の方は公演当日、証明書のご提示が必要です。
- ★ ペアは2枚分の料金です。同一演目・日時の公演を2人で観劇する場合のみ有効です。
- ★ 団体割引(10名以上)を設けております。詳細はKYOTO EXPERIMENTチケットセンターまで。
- ★ 車椅子でお越しのお客様は、各料金の¥500引きとなります。お席の場所を指定させていただく場合がございます。車椅子または障害者手帳をお持ちのお客様の介助者は、1名無料となります。ご予約・お問合せは、KYOTO EXPERIMENTチケットセンターまで。
- ★ 年齢により入場を制限させていただく場合がございます。詳細は各プログラムページをご覧ください。
- ★ 演出の都合上、開演時刻を過ぎると入場できない場合がございます。その際払い戻しはいたしません。
- ★ ご購入後の日時の変更はできません。

Notes

- ★ The venue box office opens one hour before each performance (excludes Lang Lee and Ayaka Nakama).
- ★ Proof of age is required for youth, student and high school student & younger tickets.
- ★ The price of a pair ticket includes two seats. A pair ticket is valid for two persons for the same performance (date and time) only.
- ★ Group rates are available for groups of more than ten people. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center for details.
- ★ A ¥500 discount per ticket is available for customers using a wheelchair. We may guide you to specific seats. One complimentary ticket per helper is offered to those with disabilities. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center for further information.
- ★ There are age restrictions for certain performances, please see each performance page for more information.
- ★ Entrance to some performances may be refused after the start time. Please note that no refund is given to latecomers.
- ★ Please note changes to the date and time of a performance cannot be made after purchase.

Ticket Information

📍 Kyoto Experiment Ticket Center

Online	https://www.s2.e-get.jp/kyoto-ex/pt/
Phone	+81 (0)75-213-0820
Box Office	6F, 7th Hase Bldg. 229-2 Shoshoicho, Nakagyo-ku, Kyoto
Open	Weekdays 11:00-19:00 (open every day during the festival period)

Tickets bought by phone must be paid for and collected at the convenience store Seven-Eleven. Tickets can also be purchased at Meeting Point Shijo Karasuma. (☞ p.16)

📍 ROHM Theatre Kyoto Box Office

(only select performances available to purchase)

Online	https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/
Phone	+81 (0)75-746-3201
Box Office	1F, 13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto
Open	10:00-17:00 (open every day except special closure days)

In addition, tickets are available at each venue for the performances taking place at that venue (KYOTO ART CENTER, Kyoto Art Theater Ticket Center and THEATRE E9 KYOTO).

チケット取扱

📍 KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

オンライン	https://www.s2.e-get.jp/kyoto-ex/pt/ (セブン-イレブン引取またはQR発券)
電話予約	075-213-0820 (セブン-イレブン引取)
窓口	京都市中京区少将井町229-2 第7長谷ビル6F
取扱時間	平日 11:00-19:00 (開催期間中は無休)

※「ミーティングポイント 四条烏丸」でもチケットの購入が可能です(☞ p.16へ)

📍 ロームシアター京都 チケットカウンター

オンライン	https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/ (要事前登録)
電話予約	075-746-3201
窓口	京都市左京区岡崎最勝寺町13 1F
取扱時間	10:00-17:00 無休

*臨時休館日等により変更の場合あり

📍 チケットぴあ

オンライン	http://t.pia.jp
-------	-----------------

※一部演目および各種類引チケットはKYOTO EXPERIMENT チケットセンターでのみ取扱い
※その他、各会場でもプログラムのチケット取扱いあり (各会場で開催するプログラムのチケットのみ販売)
[京都芸術センター、京都芸術劇場チケットセンター、THEATRE E9 KYOTO]

フリーパスチケット & 各種割引チケット

📍 フリーパス ¥28,000 完売

📍 学生フリーパス ¥16,000 完売

Showsの有料公演10演目*1 をご覧いただけます。
(1演目につき1回、枚数限定)

※学生フリーパスは要学生証提示

※KYOTO EXPERIMENTチケットセンターのみの取扱い／前売のみ／本人のみ有効

📍 3演目券 ¥8,700

Showsの有料公演のうち、マリアーノ・ペンソッティ『LOS AÑOS (歳月)』を除く9演目*1 の中からお好みの3演目を選び、全て同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。

📍 『LOS AÑOS (歳月)』+ 2演目券 ¥9,800

マリアーノ・ペンソッティ『LOS AÑOS(歳月)』と、それ以外のShowsの9演目*1 の中からお好みの2演目を組み合わせてご観劇いただけます。

📍 学生3演目券 ¥6,900

Showsの有料公演10 演目*1 の中からお好みの3演目を選び、すべて同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。
(要学生証提示)

📍 中間アヤカ 1dayチケット 2,500円

中間アヤカ『踊場伝説』が、ご指定の1日のみ観劇できるチケットです。

📍 KEX半券割引

当日受付で、対象公演*2の観劇済み公演チケットの半券、またはクーポン*3をご提示いただくと、Showsの当日券が¥500 OFF(前売料金)にてご購入いただけます。

※ チケット1枚につき1名、1回のみ有効。

※ 当日券のみの取扱で、残席がある場合に限ります。

※ 当日券の有無については、公演当日にTwitterなどでご案内します。

📍 コミュニティカフェほっこりサービス

コミュニティカフェほっこりにて(p.99)、Showsのチケット(使用済みも可)をご提示いただくと、ソフトドリンク ¥50 OFFのサービスが受けられます。

※ チケット1枚につき1名、1回のみ有効。

1 フリーパス、3演目券などのセット券を購入の際に、中間アヤカ『踊場伝説』を選択した場合は、「1weekチケット」でご観劇できます。
2 KYOTO EXPERIMENT 2023 プログラム、フリンジ「More Experiments」
3 パートナーホテル利用時 および KYOTO EXPERIMENT フリーベーパーに付与

Passes & Discounts

📍 Festival Pass ¥28,000 Sold out

📍 Student Festival Pass ¥16,000 Sold out

This pass allows the holder to see all ten performances in the Shows program. (limited numbers).

Pass holders cannot see the same performance multiple times however one week tickets will be issued for Ayaka Nakama's work. Student ID is required for the student festival pass. Only available for purchase at Kyoto Experiment Ticket Center. Cannot be purchased on the day. Valid only for the ticket holder.

📍 3 Performance Pass ¥8,700

Choose three performances in the Shows program, except for Mariano Pensotti's *LOS AÑOS (THE YEARS)*.

📍 LOS AÑOS (THE YEARS) +2 Performances Set ¥9,800

One ticket for Mariano Pensotti's *LOS AÑOS (THE YEARS)* as well as tickets for two performances chosen from the other nine performances in the Shows program.

📍 Student 3 Performance Pass ¥6,900

Choose three performances from the ten performances in the Shows program at a discounted price. (Student ID required)

📍 Ayaka Nakama One day ticket ¥2,500

This ticket allows the holder to see Ayaka Nakama's *The Odoriba Legend* on one specific day.

When purchasing the festival pass or 3 performance pass, if Ayaka Nakama's *The Odoriba Legend* is included in the pass, this is automatically a one week ticket and not a one day ticket.

📍 KEX Shows Ticket Discounts

Purchase day tickets for any performance in the Shows program at a ¥500 discount (the advance ticket price) upon presentation of a used ticket stub (of any Kyoto Experiment 2023 program or Fringe: More Experiments program), the Kyoto Experiment free newspaper or when staying at a festival partner hotel.

One stub is a one-time discount valid for one person.

Only valid for a full-price ticket on the day of the performance and when seats are available.

Please check the Kyoto Experiment Twitter account for the latest information on ticket availability on the morning of each performance.

📍 Community Cafe Hokkori Discount

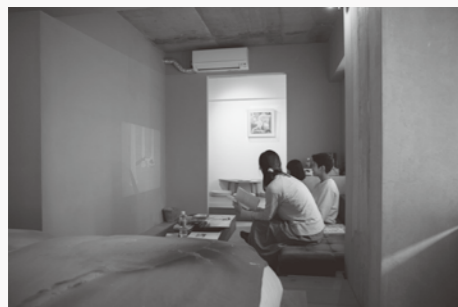
Present your Shows ticket (before or after use) at Community Cafe Hokkori (p.99) to receive ¥50 off on soft drinks.

Partner Hotels

泊りがけで夜までゆっくり楽しむ

Stay overnight and enjoy the festival until late

KAGANHOTEL (河岸ホテル)



京都中央卸売市場にある青果卸女子寮を改装して作られたアートホテル。アーティストが住み、制作活動をしており、ホテル・ホステルとしての宿泊も可。宿泊の際、作品を選べる部屋があり、作家スタッフと会えることも。カフェギャラリーや収録スタジオ、室内で楽しめるワークショップボックスもあり。

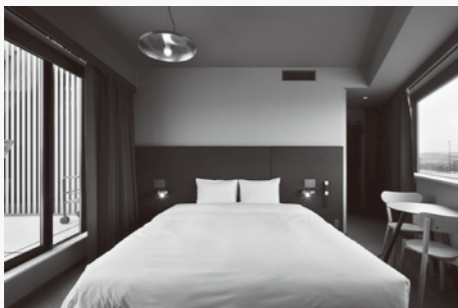
※公式予約ページから宿泊ご予約の際、コード入力(kyotoex)をすると宿泊代金5%オフ

Kagan Hotel was created by renovating a warehouse and women's dormitory of a vegetable wholesaler at the Kyoto Central Wholesale Hall. The hotel has a cafe, gallery, recording studio, atelier and workshop box. The hotel's staff but also artists live and work in the hotel. There is also a service that allows guests to select a piece of artwork from the hotel's collection to be displayed in their room for the duration of their stay. Receive a 5% discount on rooms during the festival period with the promo code "kyotoex".

☎ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel:050-1741-0627
<https://kaganhotel.com>



THE REIGN HOTEL KYOTO (ザ・レインホテル 京都)



2021年に開業した、人気デザイナー柳原照弘監修のデザイナーズホテル。眠り・食・アート&クリエイティブの質を高め、新感覚の京都滞在を体感いただけます。51室の客室には北欧らしい暖かみのあるライトや木製家具があり、シンプルかつ上質な空間をお楽しみいただけます。また、国内でも数少ないデンマークの伝統料理「スモーブロー」をメインとした北欧スタイルの朝食が特徴のホテルです。

※KYOTO EXPERIMENT特別プランにてご予約で、通常料金より10%引き・キャンセル料無料・食膳箸の特典つき

Opened in 2021, this hotel was designed by Teruhiro Yanagihara. Experience a new kind of stay in Kyoto through the highest quality sleep, food, art and creativity. The hotel's fifty one guest rooms are understated but comfortable, furnished with warm Nordic lights and wooden furniture. The hotel also provides a Scandinavian-style breakfast centered on the traditional Danish dish "smørrebrød". Receive a 10% discount on rooms, no cancellation fee and special complimentary chopsticks when you mention you are attending Kyoto Experiment upon reservation.

☎ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel:075-606-1971 <https://reignhotel.jp>

朝食付き / Breakfast Included
<https://directin.jp/?y=A7B143>



素泊まり / Room Only
<https://directin.jp/?y=A7B153>

node hotel (ノードホテル)



「アートコレクターの住まいのようなホテル」をコンセプトにしたホテル。非日常の贅沢ではなく、理想の暮らしを体験する場所として、暮らしの中でアートを身近に感じる豊かな時間をお過ごしください。

※ご宿泊チェックイン時、KYOTO EXPERIMENTを見に行く旨、お伝えいただくと、朝食をサービスをいたします。

node hotel's concept is "like the home of an art collector". Opposed to extraordinary luxury, experience a way of living in which art feels like a natural part of life. Receive a complimentary breakfast service during the festival period when you mention you are attending Kyoto Experiment upon reservation.

☎ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel:075-221-8800 <https://nodehotel.com>



KYOTO EXPERIMENTとパートナーシップを結んでいるホテルです。会場からの交通の便もよく、観劇や京都観光を夜まで楽しんだ後は宿でゆっくり過ごせます。ホテルに宿泊するお客様には、フェスティバルのShows(上演プログラム)の「当日券¥500 OFFクーポン」を提供します。※各ホテルの割引やサービスはフェスティバル開催期間中のみになります。

Kyoto Experiment has partnered with the following hotels to offer special discounts for staying overnight when you visit the festival. The hotels offer good access to the festival venues as well as general Kyoto sightseeing. Guests staying at the hotel will be provided with a 500 yen discount coupon for same-day tickets for the festival's Shows (performance program). (Please note discounts and services for each hotel are only available during the festival period.)

HOTEL ANTEROOM KYOTO (ホテル アンテールーム 京都)



HOTEL ANTEROOM KYOTOは、2011年当時、学生寮として使用されてきた建物をコンバージョンしオープンしたホテル&アパートメントです。館内には、ギャラリー・朝食レストラン・バーを併設。「アート&カルチャー」「和」という3つのテーマを現在進行形の視点でとらえ、「京都の今」を発信しています。

※KYOTO EXPERIMENTにご来場の皆様に10%オフ・朝食サービスの特別プランをご用意しています。

HOTEL ANTEROOM KYOTO opened in 2011 after converting a building that was previously used as a student dormitory and offers hotel rooms and apartments just south of Kyoto station. It consists of a gallery, breakfast restaurant, and bar, and brings together art and culture that expresses the essence of an ever-changing contemporary Kyoto. Receive a 10% discount on rooms and a complimentary breakfast service during the festival period when you mention you are attending Kyoto Experiment upon reservation.

☎お問合せ / Inquiries
Tel:075-681-5656

<https://www.uds-hotels.com/anteroom/kyoto>

☎ご予約 / Reservations

<https://x.gd/qTSjw>



BnA Alter Museum



31の泊まれるアート作品、高さ30メートルの縦型ギャラリー、世界に広がるコミュニティと心地よい音楽。そこは美術館でもホテルでもない実験と発信の場、宿泊型ミュージアム、「BnA Alter Museum」。

※オフィシャルサイトの「宿泊予約/Book Now」より日程をご指定ののち、プロモーションコード「CAMP-EXPERIMENT2023」を使用すると、フェスティバル期間中に限り10%割引になります(限定数)。

A boutique art hotel in Kyoto featuring thirty one unique art rooms to sleep in, a ten-story vertical art gallery showcasing the best of Japanese contemporary art, and a bar where the locals hang out, enjoying weekly art and music events. You can bet your visit to BnA Alter Museum will be an unforgettable travel experience. Select your dates from the "Book Now" page on the official website and enter the promotion code "CAMP-EXPERIMENT2023" to receive a 10% discount for the duration of the festival (limited availability).

☎ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries

Tel:075-748-1278

<https://bnaaltermuseum.com>



MAGASINN KYOTO (マガザンキョウト)



[泊まれる雑誌]マガザンキョウトは、触って、使って、泊まって、買える。五感をフルに使って京都カルチャーを体験できる、京都二条城そばにある宿です。宿泊は1日1組、京町家一棟を貸切。お土産雑貨や公開イベントは、毎シーズンさまざまなパートナーと協働しアップデートしていきます。

※宿泊ご予約時に「KYOTO EXPERIMENTに来場」の旨をお伝えいただくと、マガザンのセレクトしたZINEからお好きなものを1点プレゼントいたします。

Magasinn Kyoto is a Machiya hotel located near Nijo Castle, Kyoto. One group per day can rent the whole house. The concept is a "Stay-able magazine" where you can experience Kyoto culture through all five senses. The space and events are updated seasonally through collaborations with diverse partners. Mention you will be visiting Kyoto Experiment when you make a reservation and choose one of MAGASINN's specially selected zines.

☎お問合せ / Inquiries

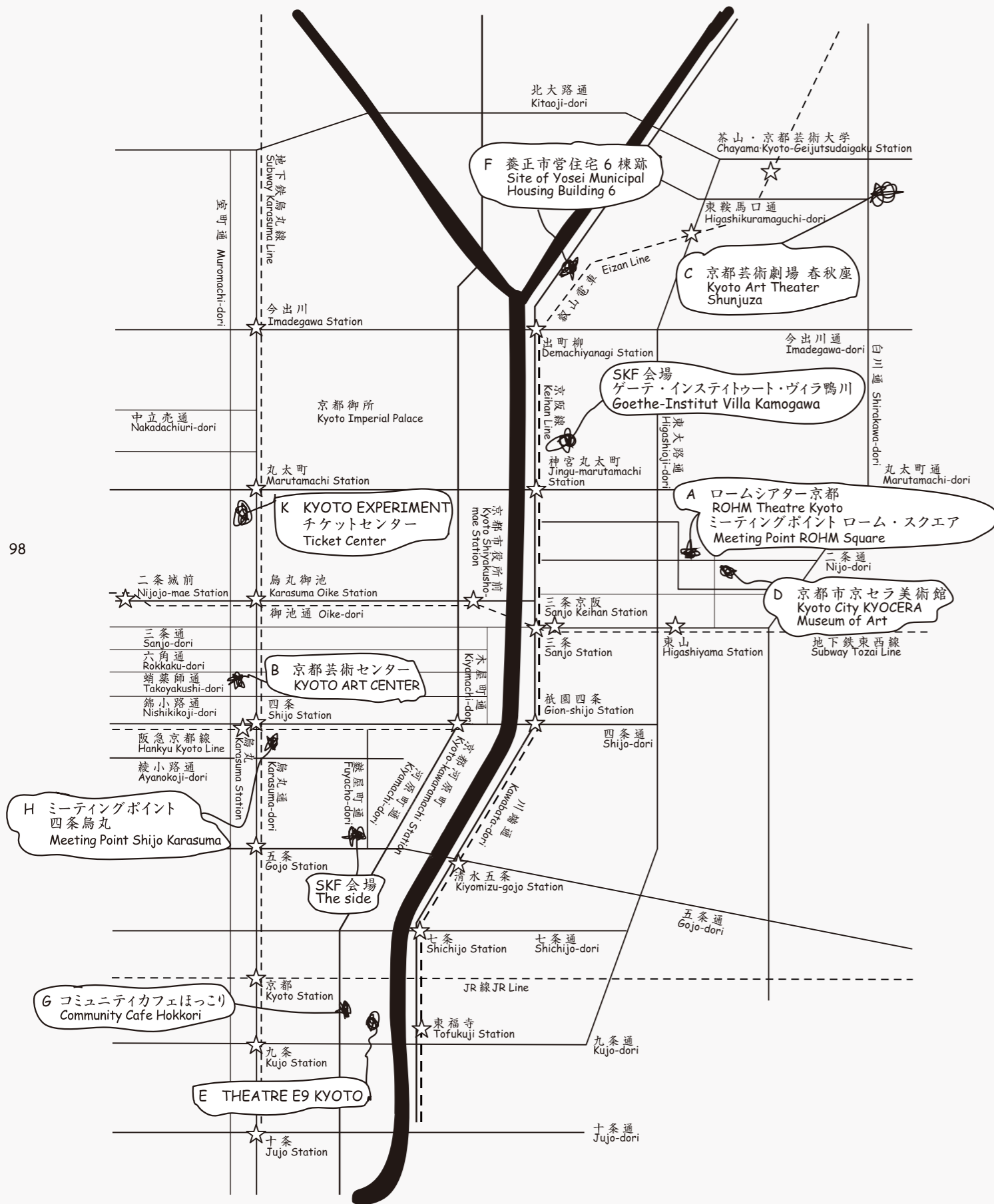
Tel:075-202-7477 <https://magasinn.xyz/>

☎ご予約 / Reservations

https://www.airbnb.jp/rooms/12844982?source%20_impression_id=p3_1661124915_fnVAnzSLyaf9%20xQRF&source_impression_id=p3_1662522695_8qo7Yyubj0OwYm0U



会場アクセス Access



A ロームシアター京都 ミーティングポイント ローム・スクエア ROHM Theatre Kyoto Meeting Point at ROHM Square, ROHM Theatre Kyoto

京都市左京区岡崎最勝寺町13
☎ 075-771-6051
・地下鉄東西線「東山駅」より徒歩約10分
・市バス32, 46系統「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車すぐ
・駐輪場あり、駐車場なし

13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto
・10 minutes' walk from Higashiyama Station (Kyoto City Subway Tozai Line)
・Kyoto City Bus Nos. 32 or 46 to "Okazaki Koen / ROHM Theatre Kyoto / Miyakomesse-mae"
・Bicycle parking available. No car parking.



E THEATRE E9 KYOTO

京都市南区東九条南河原町 9-1
☎ 075-661-2515
・JR「京都駅」八条口より徒歩約14分
・JR・京阪「東福寺駅」より徒歩約7分
・地下鉄烏丸線「九条駅」より徒歩約11分
・駐輪場あり、駐車場なし

9-1 Higashikujo-minamikawaramachi, Minami-ku, Kyoto
・14 minutes' walk from Exit Hachijoguchi of Kyoto Station (JR)
・7 minutes' walk from Tofukuji Station (JR or Keihan railway)
・11 minutes' walk from Kujo Station (Kyoto City Subway Karasuma Line)
・Bicycle parking available. No car parking.



B 京都芸術センター KYOTO ART CENTER

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
☎ 075-213-1000
・地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」下車、22-24番出口より徒歩5分
・駐輪場あり、駐車場なし

546-2 Yamabushiya-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
・5 minutes' walk from exits 22 and 24 of Shijo Station (Kyoto City Subway Karasuma Line) and Karasuma Station (Hankyu Kyoto Line)
・Bicycle parking available. No car parking.



F 養正市営住宅6棟跡 Site of Yosei Municipal Housing Building 6

京都市左京区田中馬場町6
・京阪電鉄「出町柳駅」より徒歩約4分
・市バス1, 4, 3, 17, 201, 203系統「出町柳駅前」より徒歩8分
・駐輪場、駐車場なし

6 Tanakababa-cho, Sakyo-ku, Kyoto
・4 minutes' walk from Demachiyana Station (Keihan railway)
・Kyoto City Bus Nos 1, 4, 3, 17, 201 or 203 to "Demachiyana Station". 8 minutes' walk from stop.
・No car or bicycle parking available.



C 京都芸術劇場 春秋座 Kyoto Art Theater Shunjuza

京都市左京区北白川瓜生山2-116
京都芸術大学内
☎ 075-791-8240
・叡山電車「茶山・京都芸術大学駅」より徒歩約10分
・市バス3, 5, 204系統「上経町・瓜生山学園 京都芸術大学前」下車すぐ
・駐輪場あり、駐車場なし(原付・バイクはご遠慮下さい)



G コミュニティカフェほっこり Community Cafe Hokkori

京都市南区東九条南岩本町6
南岩本市営住宅店舗101
・JR「京都駅」八条口より徒歩約10分
・JR・京阪「東福寺駅」より徒歩約10分
・地下鉄烏丸線「九条駅」より徒歩約8分
・駐輪場、駐車場なし

City Housing 101, 6 Higashikujo Minamiyamamotocho, Minami-ku, Kyoto
・10 minutes' walk from Exit Hachijoguchi of Kyoto Station (JR)
・10 minutes' walk from Tofukuji Station (JR or Keihan railway)
・8 minutes' walk from Kujo Station (Kyoto City Subway Karasuma Line)
・No car or bicycle parking available.



D 京都市京セラ美術館 Kyoto City KYOCERA Museum of Art

京都市左京区岡崎円勝寺町124
☎ 075-771-4334
・地下鉄東西線「東山駅」より徒歩約8分
・市バス5, 46系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ
・駐輪場あり、駐車場あり(有料、数台限定)

124 Okazaki Enshoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto
・8 minutes' walk from Higashiyama Station (Kyoto City Subway Tozai Line)
・Kyoto City Bus Nos. 5 or 46 to "Okazaki Koen / Bijutsukan, Heian Jingu-mae"
・Bicycle parking available. Limited number of car parking spaces available for a fee.



H ミーティングポイント 四条烏丸 Meeting Point at Shijo Karasuma

京都市下京区烏丸通四条下る水銀屋町637 第五長谷ビル B1F
・地下鉄烏丸線「四条駅」3番出口直結
・市バス5, 26系統「四条烏丸」より徒歩1分
・駐輪場、駐車場なし

B1F, 5th Hase Bldg. 637 Suiginya-cho, Shimogyo-ku Kyoto
・Directly connected to Shijo Station exit 3 (Kyoto City Subway Karasuma Line).
・Kyoto City Bus Nos. 5 or 26 to "Shijo Karasuma". 1 minute walk from stop.
・No car or bicycle parking available.

K KYOTO EXPERIMENT チケットセンター Kyoto Experiment Ticket Center

京都市中京区少将井町229-2 第7長谷ビル 6F
☎ 075-213-0820
・地下鉄烏丸線「丸太町駅」下車、6番出口より徒歩1分
・駐輪場、駐車場なし

6F, 7th Hase Bldg. 229-2 Shoshoi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
・1 minute walk from exit 6 of Marutamachi Station (Kyoto City Subway Karasuma Line).
・No car or bicycle parking available.

カレンダー Calendar

★ 終演後に、ポスト・パフォーマンス・トークがあります
 ◆ 終演後に、感想シェアカフェがあります (※ p.17)
 ♥ 託児サービスをご利用いただけます (※ p.19)

★ Post-show talk
 ◆ A festival share cafe will take place after the performance. (※ p.17)
 ♥ Childcare service is available. (※ p.19)

9月 September 10月 October

会場 Venue	アーティスト Artists	上演時間 Duration	24 Sun	30 Sat	1 Sun	2 Mon	3 Tue	4 Wed	5 Thu	6 Fri	7 Sat	8 Sun	9 Mon	10 Tue	11 Wed	12 Thu	13 Fri	14 Sat	15 Sun	16 Mon	17 Tue	18 Wed	19 Thu	20 Fri	21 Sat	22 Sun		
G	イ・ラン Lang Lee	Total 60-90min	体験期間 / Period: 9.30(Sat) -10.22(Sun) 受付日程：フェスティバル会期中の金・土・日・祝日の11:00-18:00 Reception: 11:00-18:00 on Fridays, Saturdays, Sundays and public holidays during the festival period.																									
B	ウィチャヤ・アートマート Wichaya Artamat / For What Theatre	70min (予定 TBC)		14:00 ★◆	13:00♥ 17:00																							
A	チェルフイッチュ chelfitsch	100min		18:00	13:00◆♥ 18:00	14:00	14:00★																					
A	アリス・リボル Alice Ripoll / Cia. REC	60min								19:00★	14:00 ◆♥																	
A	バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre	60min									15:30	15:30 ★◆♥																
E	山内祥太 & マキ・ウエダ Shota Yamauchi & Maki Ueda	60-90min (予定 TBC)									18:00	13:00 18:00	15:00★															
F	中間アヤカ Ayaka Nakama	-											11:00-20:00	休演日 No Performance		11:00-20:00	11:00- 18:00											
D	ルース・チャイルズ & ルシンダ・チャイルズ Ruth Childs & Lucinda Childs	65min															20:15	20:15	20:15									
B	ダイナ・ミシェル Dana Michel	180min																						18:00★	18:00◆	16:00♥		
C	マリアーノ・ベンソッティ Mariano Pensotti / Grupo Marea	105min																						14:00★	13:00 ◆♥			
B	サムソン・ヤン Samson Young	-		10:00- 22:00	展示 10:00-20:00 Exhibition 10:00-20:00																							
Kansai Studies		-	パブリックイベントを予定しています。詳細はウェブサイトをご覧ください。 A public event is planned for Kansai Studies. Please see the festival website for more information.																									
Super Knowledge for the Future [SKF]																												
① ウィチャヤ・アートマート 上映会&トーク			① 15:00																							⑩ 11:00		
② 伝承でたどる妖怪まちあるき				② 10:00																								
③ アリス・リボル 特別トーク																												
④ バック・トゥ・バック・シアター ワークショップ																												
⑤ シアター?ライブラリー?																												
⑥ アイデンティティの「まぜまぜ」 は可能か?																												
⑦ ことばの混交の果てに—— 「クレオール主義」30年																												
⑧ ルース・チャイルズ ワークショップ																												
⑨ 芸術文化とファンデレイジング																												
⑩ メディアとしての染織																												
⑪ KEXラジオ																												
H	ミーティングポイント 四条烏丸* Meeting Point Shijo Karasuma	-		12:00- 18:00	12:00- 19:00																							
A	ミーティングポイント ローム・スクエア* Meeting Point ROHM Square	-		13:00- 18:00																								

*イベントがある日はオープン時間を延長することもあります。 *Meeting Point opening hours may be extended on event days.

